



中尾遺跡遠景（北より）

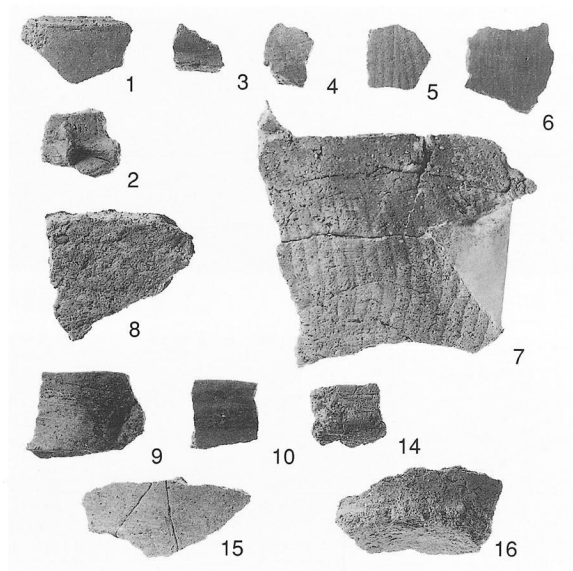


小溝状遺構群土層断面（C-C'）

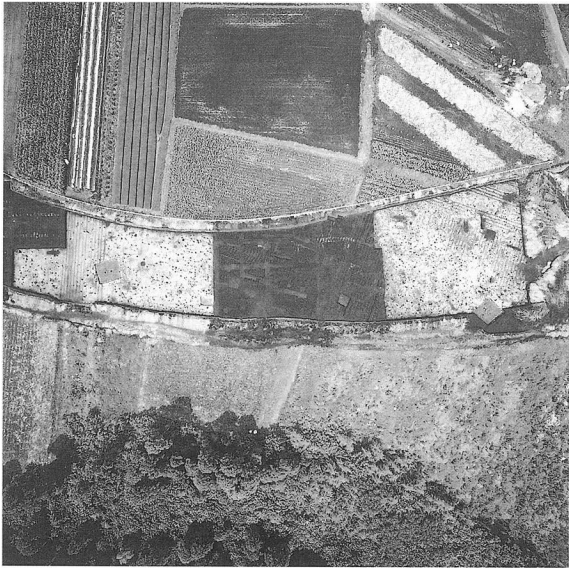




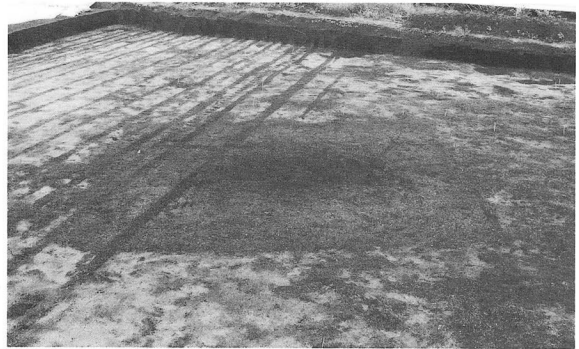
御池ボラ面調査後（遠景）



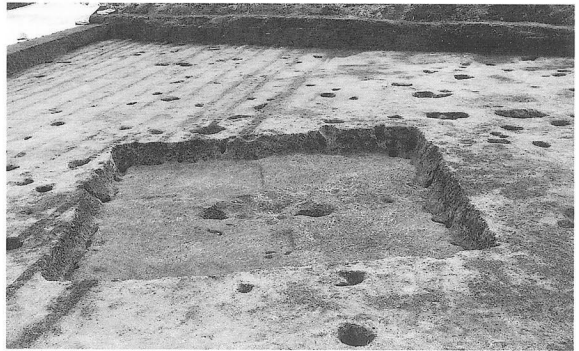
縄文土器



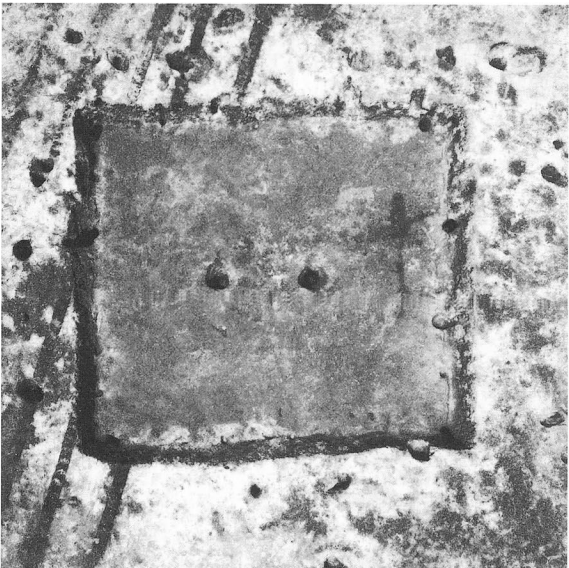
御池ボラ面遺構分布状況



1号竪穴住居跡検出状況（東より）



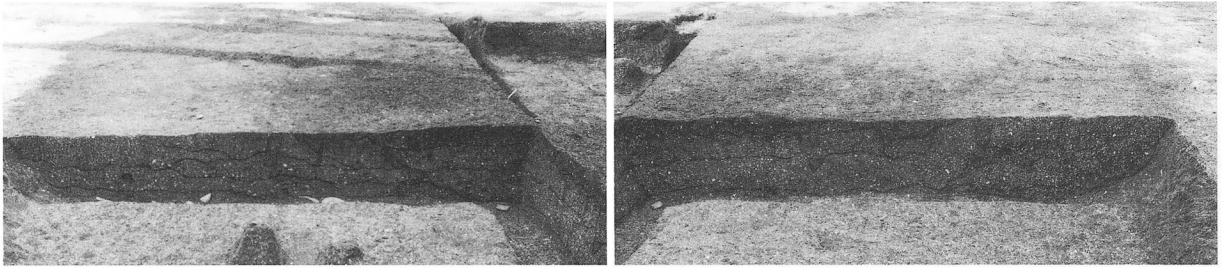
1号竪穴住居跡完掘状況（東より）



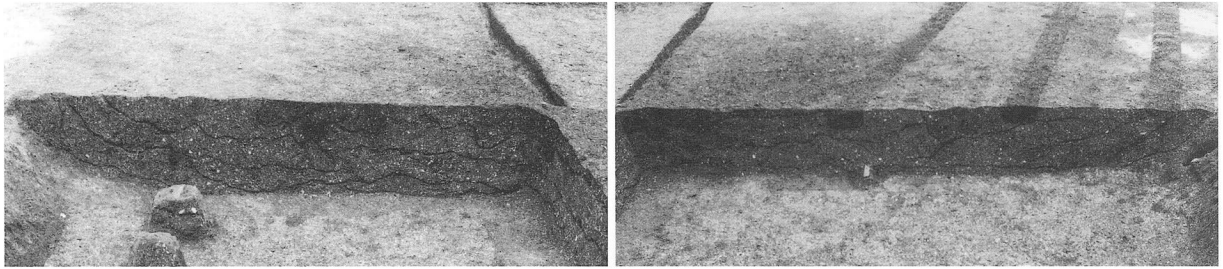
1号竪穴住居跡



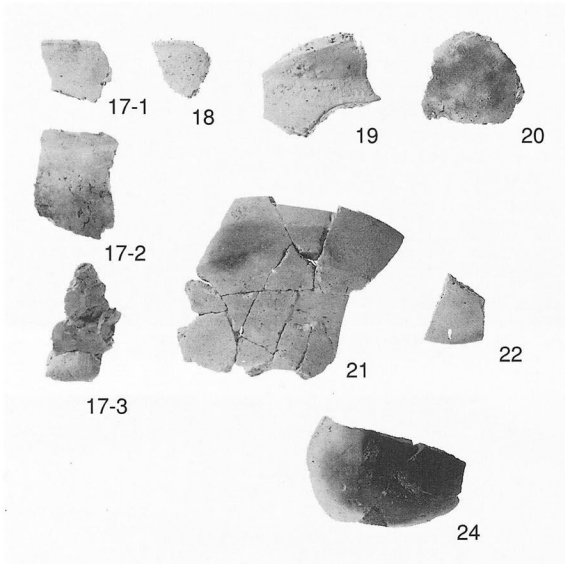
1号竪穴住居跡遺物出土状況



1号豎穴住居跡埋土状況（東—西）



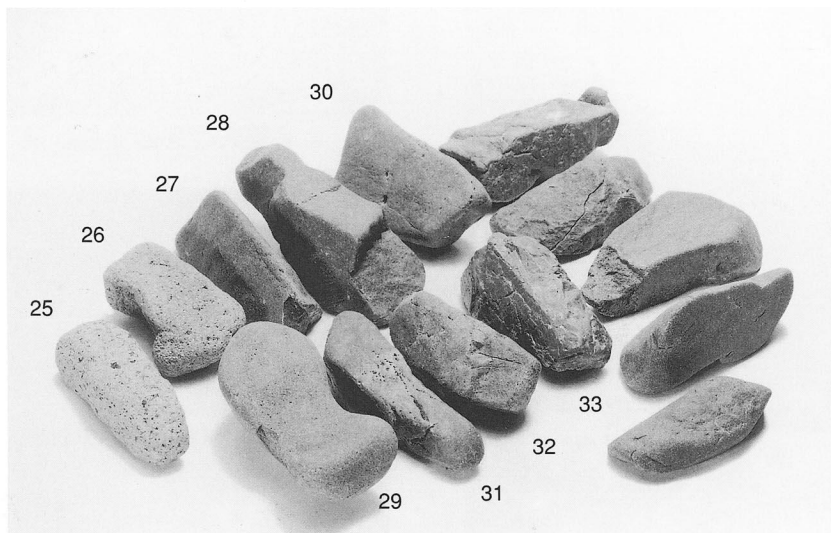
1号豎穴住居跡埋土状況（北—南）



1号豎穴住居跡出土土器①



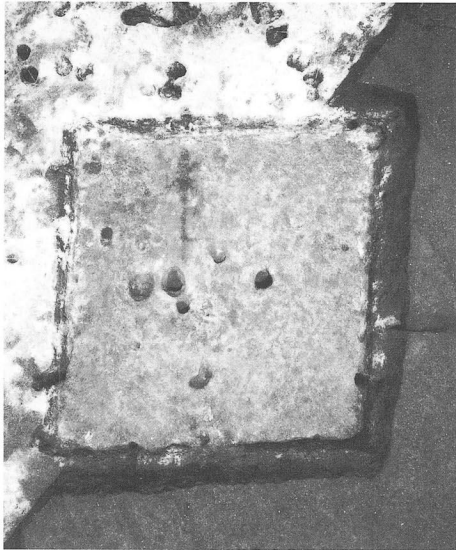
1号豎穴住居跡出土土器②



1号豎穴住居跡出土石



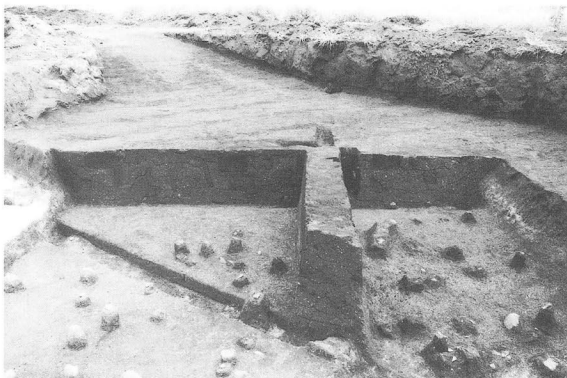
2号竪穴住居跡①（南東より）



2号竪穴住居跡②



2号竪穴住居跡検出状況（南東より）

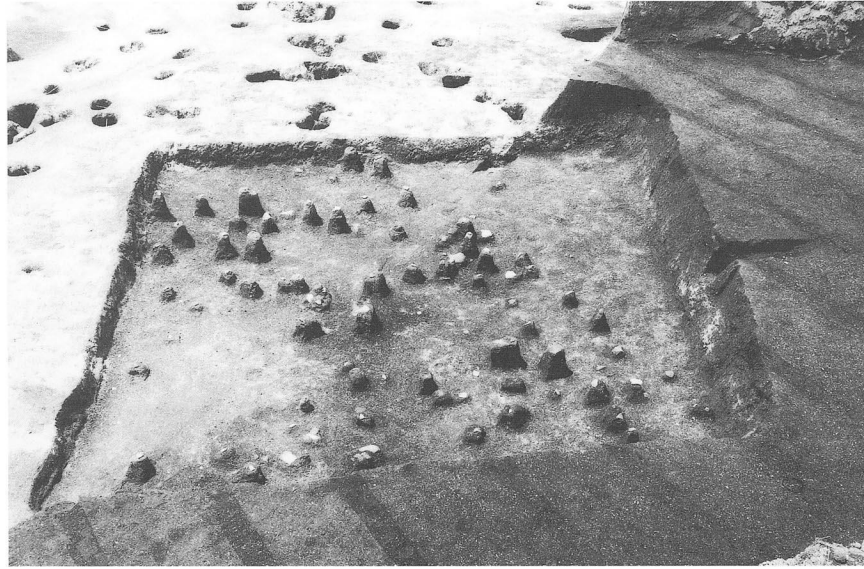


2号竪穴住居跡埋土状況（北西－南東）

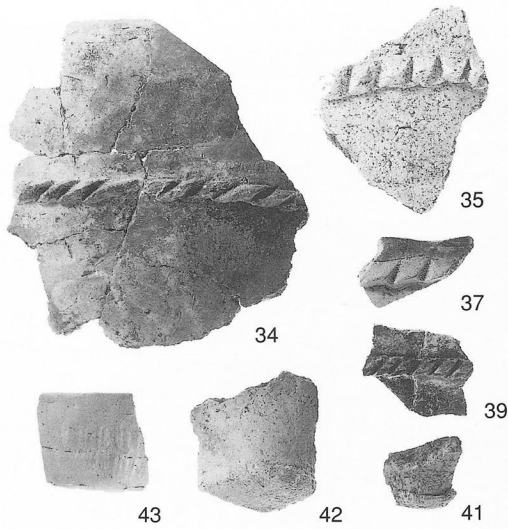


2号竪穴住居跡埋土状況（南西－北東）

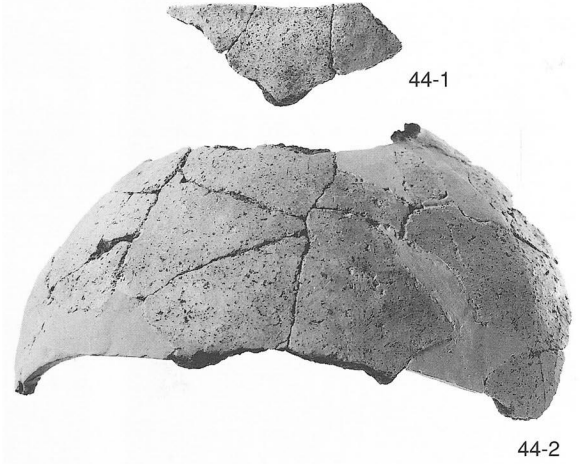




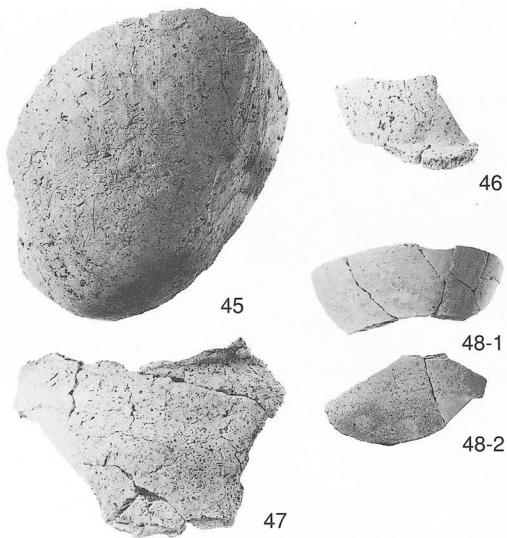
2号竪穴住居跡遺物出土状況（南東より）



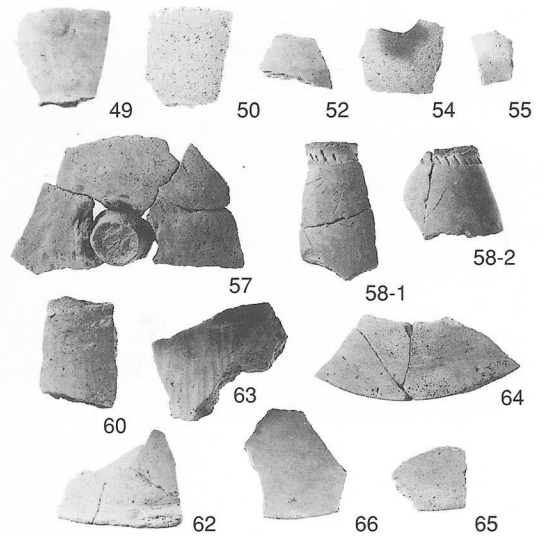
2号竪穴住居跡出土土器①



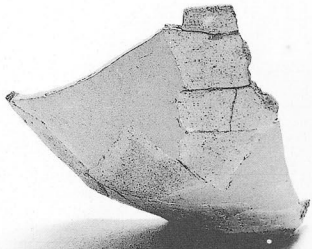
2号竪穴住居跡出土土器②



2号竪穴住居跡出土土器③



2号竪穴住居跡出土土器④



56

2号豎穴住居跡出土土器⑤



67

2号豎穴住居跡出土土器⑥



包含層（第4層）遺物出土狀況①



包含層出土土器①



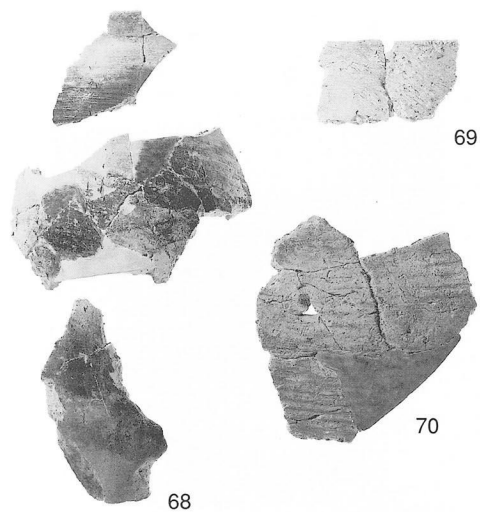
包含層（第4層）遺物出土狀況②



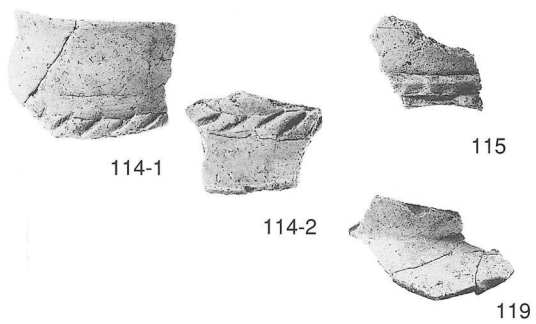
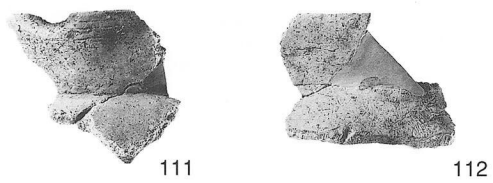
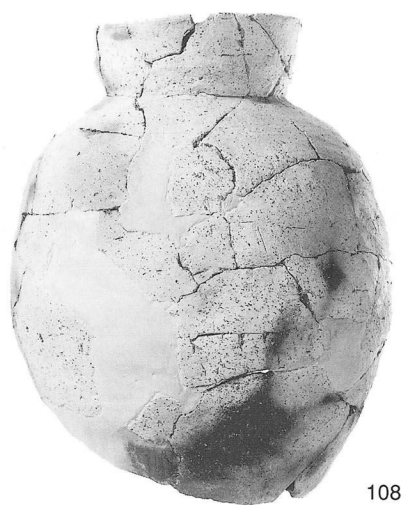
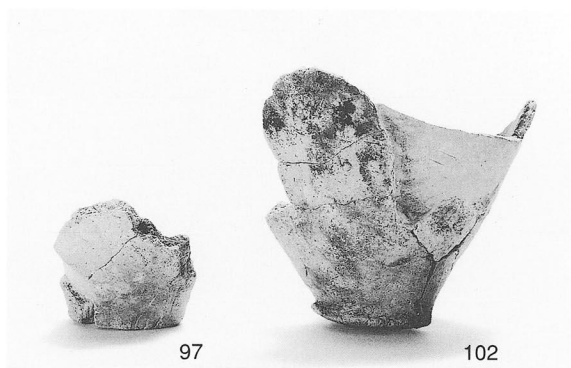
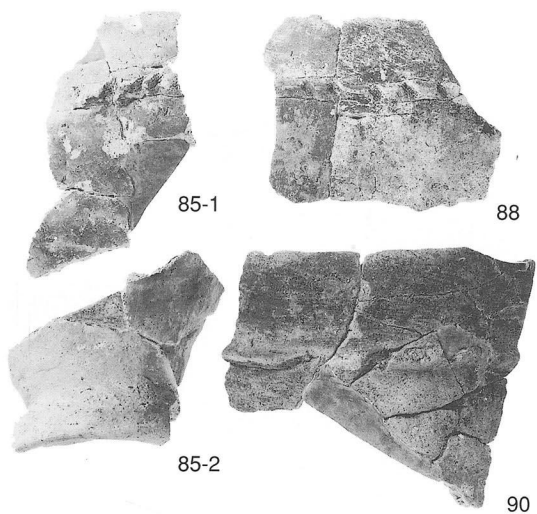
包含層出土土器②



图版 8



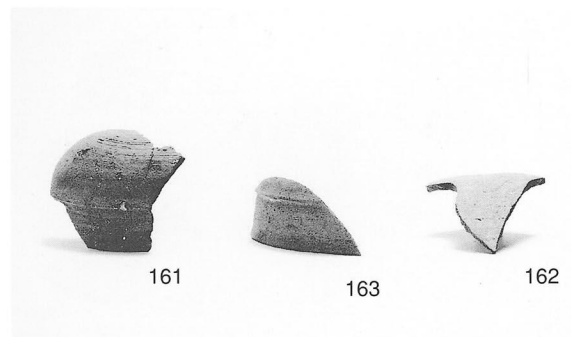
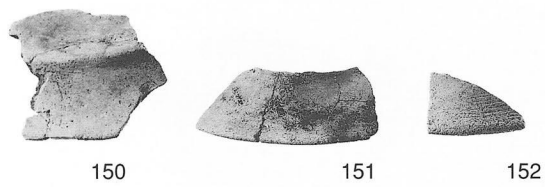
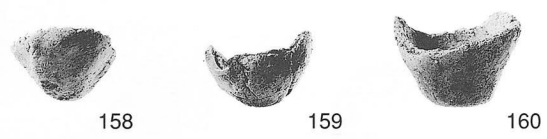
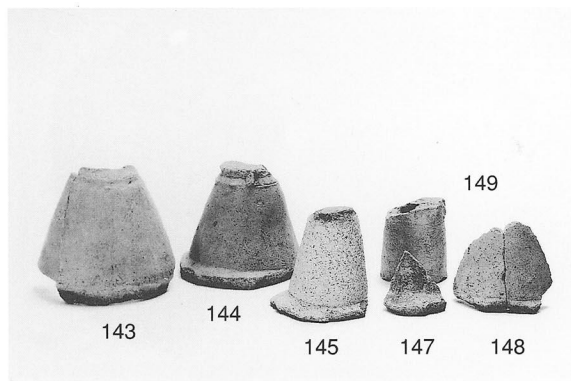
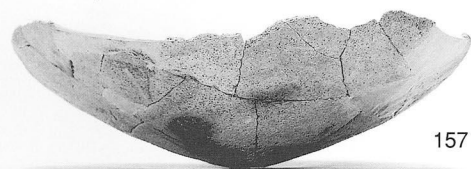
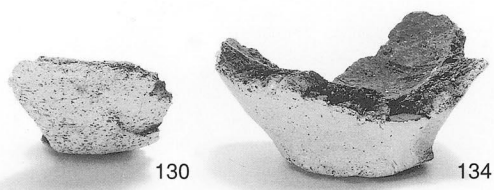
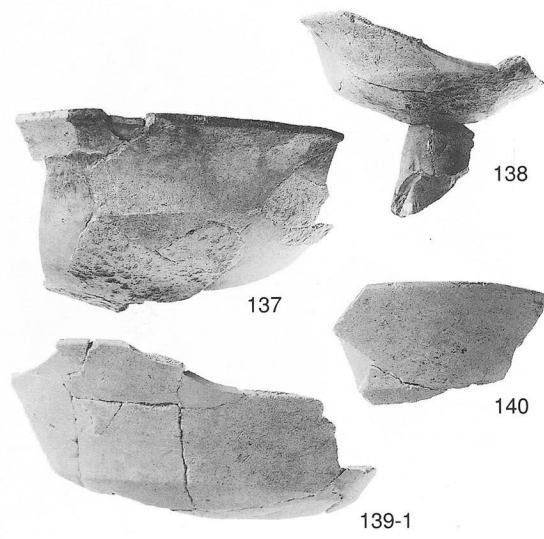
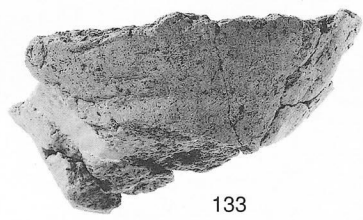
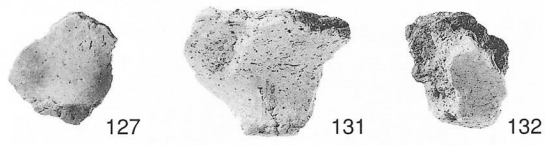
包含層出土土器③



包含層出土土器④



图版  
10



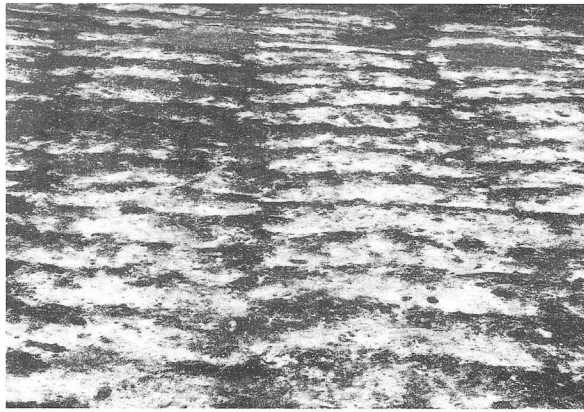
包含層出土土器⑤



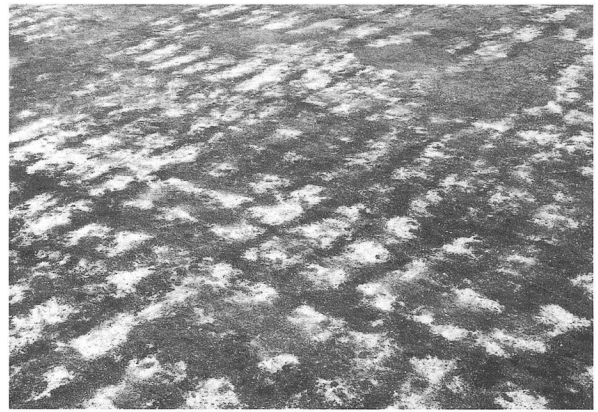
表土剥ぎ取りの様子



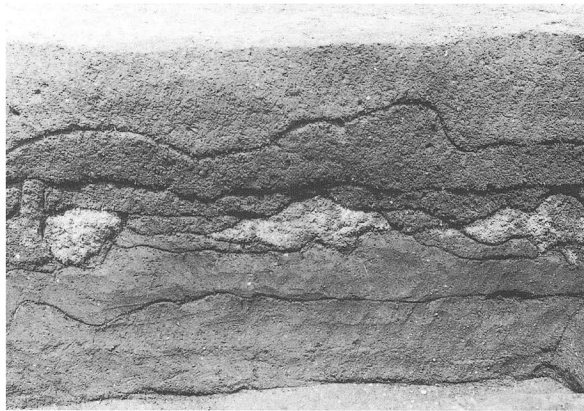
第2層面小溝状遺構群検出状況①



第2層面小溝状遺構群検出状況②



第2層面小溝状遺構群検出状況③



小溝状遺構群土層断面 (A-A'の一部)



小溝状遺構群白ボラ除去後の様子①

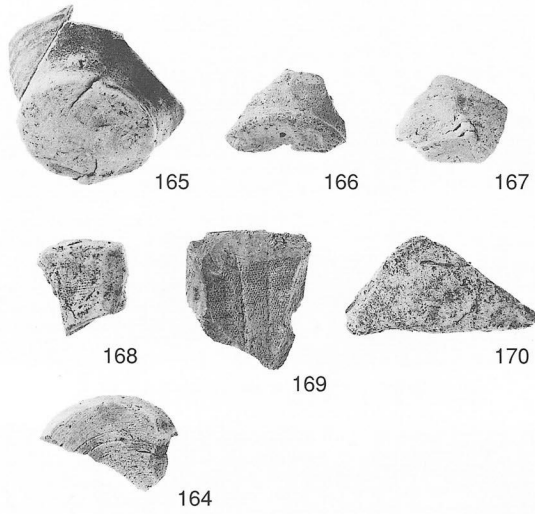


小溝状遺構群白ボラ除去後の様子②

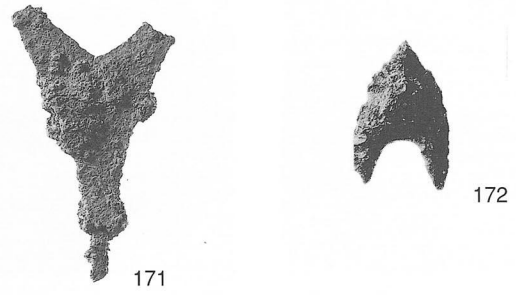


小溝状遺構群白ボラ除去後の様子③



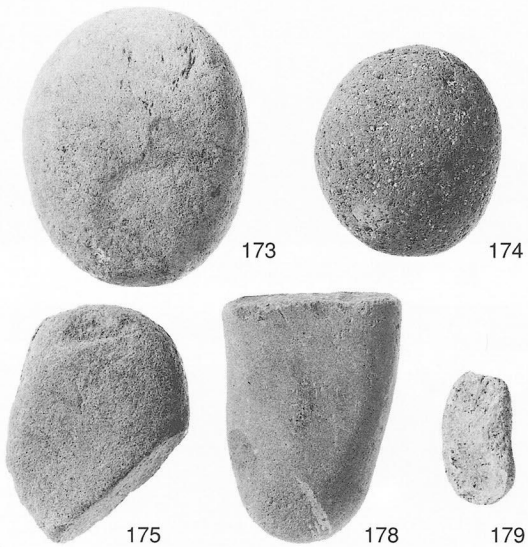


包含層出土土師器坏、皿、瓦（古代～中世）



鉄製品（雁股鍬）

石器①（石鍬）



石器②（磨石・砥石）



石器③（石皿）



表

180



裏

180

石器④（砥石）

M I N O B A R U

蓑 原 遺 跡



## 第IV章 蓑原遺跡の調査

### 第1節 調査の経過

調査対象面積は4200m<sup>2</sup>である。調査区の全長が400m以上あり、細長いため、全体をA～Dの4区に分けて調査を進めた。

重機により表土を除去し、Ⅱ層上面（白ボラ上面）と、Ⅶ層上面で遺構検出を行った。

Ⅱ層上面はD区のみ旧地形にそって南西から北東方向に徐々に傾斜が急になり、北端部に近い部分では平坦部分と比較して1m近い落ち込みとなっていた。

Ⅱ層上面で検出された顕著な遺構としては、文明年間（1469～1487）の桜島起源の軽石（白ボラ）降灰後の畠跡がある。調査区全体に見られたが、特にD区において良好な状態で検出された。自然科学分析でもD区のみプラント・オパールが検出され、作物が栽培されていたことが確認された。

Ⅶ層上面で検出された遺構としては、古墳時代後期の竪穴住居跡3軒と中世の掘立柱建物跡9棟がある。

竪穴住居跡3軒はB区北端部で集中して検出されたが、いずれも調査区外の畑下に延びていたため、全体を調査することはできなかった。検出された3軒の住居跡は、全て方形プランで、1辺6.3m～7.4mの大型住居である。柱穴の数は特定できないものの、検出された部分から推定すると、1辺に3本が並ぶと想定される。遺物の出土状況を見ると、SA1、SA2は小片が床面付近にかたまって出土しており、SA3は、完形の須恵器（短頸壺）や土師器の甕の破片が床面付近から出土した。いずれの住居跡も炉跡（火処）は明確ではなかった。

掘立柱建物跡9棟は、D区に集中して検出された。

2間×1間の小型のものから5間×2間4面庇付の大型のものまでさまざまな形式であった。特徴的なものを挙げると、SB1内では中央部南寄りに石組遺構が検出された（建物には付随するものかどうかは不明）。SB9は5間×2間4面庇付で本遺跡の掘立柱建物跡では最大の規模である。

この他の遺構では、竪穴状土坑4基、土坑4基、溝状遺構2条、ピット群が検出された。

Ⅶ層上面検出遺構の調査を終了した時点で、御池ボラ層（Ⅷ層）の下までトレンチを入れたが、遺構・遺物の確認はできなかった。

全長約400m、幅約10mという調査区域で、遺構・遺物ともに断片的な資料を得たに過ぎないが、隣接する中尾遺跡や農業用道路延長上にある鶉尾遺跡等の当該時期資料と比較検討することによって、調査の不備を埋め、古墳時代後期の竪穴住居跡や中世の掘立柱建物跡、中世以降の畝状遺構の解明に迫ることも可能であると考えている。

### 第2節 基本層序

蓑原遺跡の基本層序を第2図に示した。第Ⅰ層（表土）は、最近まで畑に利用され、30cm前後の厚みがある。第Ⅱ層は、白ボラの濃集層で、全体としてはブロック状を成すが、水平分布は層状堆積であ



第1図 葦原遺跡周辺地形図

ったことを示している。第Ⅲ層は、ややしまりのある黒色土で、御池ボラを散点的に含む。遺物包含層である。第Ⅳ層は御池ボラを全体に含む黒褐色土でしまりは弱い。遺物包含層である。第Ⅴ層は、御池ボラを少量含む黒色土である。第Ⅵ層は、御池ボラを全体に含む黒褐色土でしまりは弱い。第Ⅶ層は、御池ボラから成る層に黒褐色土を含む明黄褐色軽石層でしまっていて硬い。第Ⅷ層は、御池ボラの一次堆積層で硬くしまっているが、くずれやすい。第Ⅸ層は、他の粒子を混入しない極細粒の黒色土で、やや軟らかい。

なお、葦原遺跡では、プラント・オパール分析を実施している。その結果については第7節を参照されたい。

## 第2図 基本土層柱状図

I-a	I-a層 耕作土・褐灰色土（15～30cm；砂質。しまりは弱い。）
I-b	I-b層 黒色土（5～30cm；直径2～10mmの軽石〈白ボラ〉を全体に含む。砂質でザラザラしている。しまりは弱い。）
II	II層 黒色土混淡黄色軽石（2～10cm；白ボラ濃集層。全体に混合された状態に一部濃集部がブロック状に入る状況を示す）
III	III層 黒色土層（5～20cm；細粒の黒色土。ややしまっている。直径1～3mmの御池ボラを散点的に含む。遺物包含層）
IV	IV層 軽石混黒褐色土層（15～40cm；直径1～5mmの御池ボラを全体に含む。しまりは弱い。遺物包含層）
V	V層 黒色土層（5～10cm；御池ボラ少混）
VI	VI層 軽石混黒褐色土層（5～40cm；IV層と同じく直径1～5mmの軽石〈御池ボラ〉を全体に含む。しまりは弱い。）
VII	VII層 黒褐色土混明黄褐色軽石層（7～25cm；直径1～5mmの御池ボラから成る層に黒褐色土を混入する。しまっていて硬い。）
VIII	VIII層 明黄褐色軽石層（70～80cm；御池ボラの一次堆積層。硬くしまっているが、くずれやすい。）
IX	IX層 黒色土（他の粒子を混入しない極細粒の黒色土。やや軟らかい。）

## 第3節 A区の調査

A区は、調査対象区の南端に位置し、幅約10m、長さ約75mである。

調査が始まった時点では、まだ作物（辣蕒）が植えてあり、すぐには調査に着手できなかった。そのため作物の収穫が終了した6月上旬、ようやくトレンチの掘削を開始することができた。

10カ所のトレンチ掘削により遺物や遺構の確認を行ったところ、小さな土器片が数点出土しただけ



で、遺構もほとんど見られなかった。表土から御池ボラの一次堆積層（Ⅷ層）までの深さが90～110cmと浅く、ゴボウの耕作のためのトレンチャーが数十cmおきに深さ1m以上も入り込んで御池ボラ層まで達するという攪乱の激しい状況が見られた。

そこで、全体的に掘り下げても成果が期待できないと思われたため、A区北側半分のみ重機による表土除去を行い、Ⅳ層上面まで掘り下げた。その結果、小さな土器片が数点出土したのみで遺構の存在する可能性は見出せなかった。

以上の調査により、A区には遺物・遺構ともほとんど残存していないと推測されたため、10カ所掘削したトレンチ内の御池ボラ上面のレベルを測量し、地形の概要のみ確認して調査終了とした。

## 第4節 B区の調査

B区は約150mと長いので、排土の処理手順と作業員の人数との兼ね合いにより、B1区（南側）とB2区（北側）の二つに分けて調査を進めた。

最初に着手したのは、現場事務所設置場所から遠いB1区（約90m）である。B2区は農道に面しているため、B1区の排土をB2区に溜めた方がトラックで搬出しやすいからである。B1区が終了した後、B2区の排土をB1区に溜めるという手順で調査を進めた。

### B1区（第4図）

B1区は、トレンチ掘削の結果、表土から30～40cm下に白ボラが確認されたので、重機により白ボラ（Ⅱ層）上面近くまで表土除去を行ったところ、北側と南側で攪乱の様相にかなりの違いが認められた。そこで北側と南側で調査の手順を変える必要が出てきた。

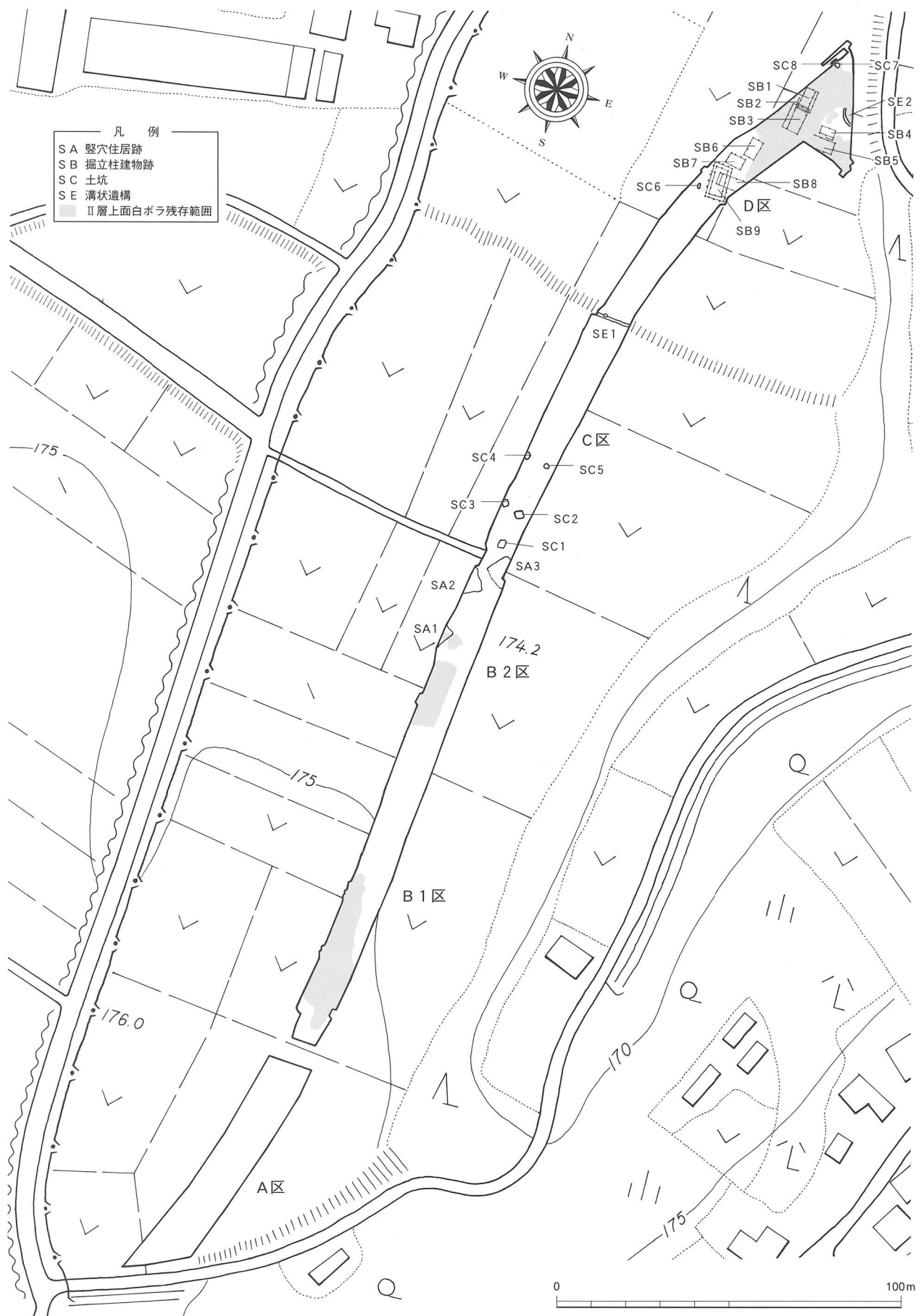
B1区北側は、全体的にゴボウのトレンチャーによる攪乱が入っている上、東側半分は山芋栽培のための重機による攪乱が特に激しく、白ボラはほとんど残っていなかった。

B1区南側は、山芋栽培のための重機によるトレンチャーが南北に長く入っていたものの、トレンチャー間に白ボラが良好な状態で残存しているのが認められた。

そこで、B1区北側はそのまま下層に掘り下げていくことにし、B1区南側は白ボラ（Ⅱ層）上面で精査し、調査を行ってから掘り下げることにした。

B1区北側では、遺物はⅢ層・Ⅳ層を中心にして、土師器片等が全体的に出土したが、Ⅲ層・Ⅳ層では、遺構を明確にとらえることができず、御池ボラの混入が多い層（Ⅴ～Ⅵ層上面）まで掘り下げてようやくピット等が見え始めた。東側は耕作による攪乱が深く、ピットは西側に集中して検出された。ピットの埋土は3種類あり、きめの細かい黒色土で御池ボラをわずかに混入したやわらかい埋土（A）、御池ボラを混入する黒色でやや軟らかい埋土（B）、御池ボラを混入する黒褐色土でやや硬い埋土（C）である。基本層序から推測すると、A・Bの埋土よりもCの埋土が時代が古いと考えられるが、AとBは類似しており、埋土の違いによるピットの時代差や性格の違いは確認できなかった。

最終的にはⅦ層上面でピット等の遺構を検出したが、掘立柱建物跡として認定できる柱穴の並びは確認できなかった。



第3図 蓑原遺跡 II層上面及びVII層上面遺構分布図 (1/1600)

B 1 区南側は山芋栽培のための重機による幅60~70cmのトレンチャーが等間隔で南北に走っていたが、II層上面でトレンチャー間に残存している白ボラが広い範囲で溝状に見える形で検出された。そこで白ボラが良好な状態で残存している部分の土層断面の観察を行ったところ、白ボラがブロック状に散点的に見られ、畝間に降灰した白ボラである可能性が考えられた。

そこで白ボラを除去したところ、畝状遺構は検出されず、凹凸の激しい面が検出されたため、畝状遺構ではなく、白ボラ降灰後の畑を復旧するための復旧痕である可能性が高くなった。

II層上面の調査が終わった後、VII層上面まで掘り下げていったが、遺物もほとんど出土せず、B 1 区南側の北東部分にピットがいくつか検出されたのみであった。

## B 2 区 (第5図)

B 2 区は、全体的に南から北方向へ緩やかに傾斜している。

B 2 区の北端に最初に入れたトレンチで、土師器や須恵器等の土器片が集中して出土したため、住居跡の可能性が考えられた(結局このトレンチは3号竪穴住居跡南側の土器集中部に当たっていることが後で判明した)。

白ボラの残存が認められたため、まずII層上面まで重機で掘り下げて調査を行った。

II層上面で精査したところ、明瞭な畝状のラインは検出できなかつたため、白ボラの残存している範囲のみを実測して掘り下げた。

VI層で住居跡らしい埋土が表れたものの、今ひとつ輪郭が明瞭にならず、結局VII層上面で精査して竪穴住居跡3軒とピット群を検出した。ピットの埋土はB 1 区同様3種類あったが、埋土の違いによるピットの時代差や性格の違いは確認できなかった。

竪穴住居跡はB 2 区北側に集中しており、北側に隣接するC区でさらに検出される可能性が出てきた。

竪穴住居跡はいずれも調査区外の畑下に延びており、全体を検出することは出来なかつた。

なお、2号竪穴住居跡と3号竪穴住居跡はB区とC区間の農道の下に延びているため、作物の収穫等の妨げにならないよう調査区全体の調査が終了した後、農業用道路工事が始まってから調査を行うことになった。B 2 区のピット群も掘立柱建物跡として認定できる柱穴の並びは確認できなかった。

遺物は、竪穴住居跡に共伴して出土した遺物以外では、III層・IV層からの出土が大半で、弥生土器や土師器等が出土した。

## 1 検出遺構と遺物

### 竪穴住居跡

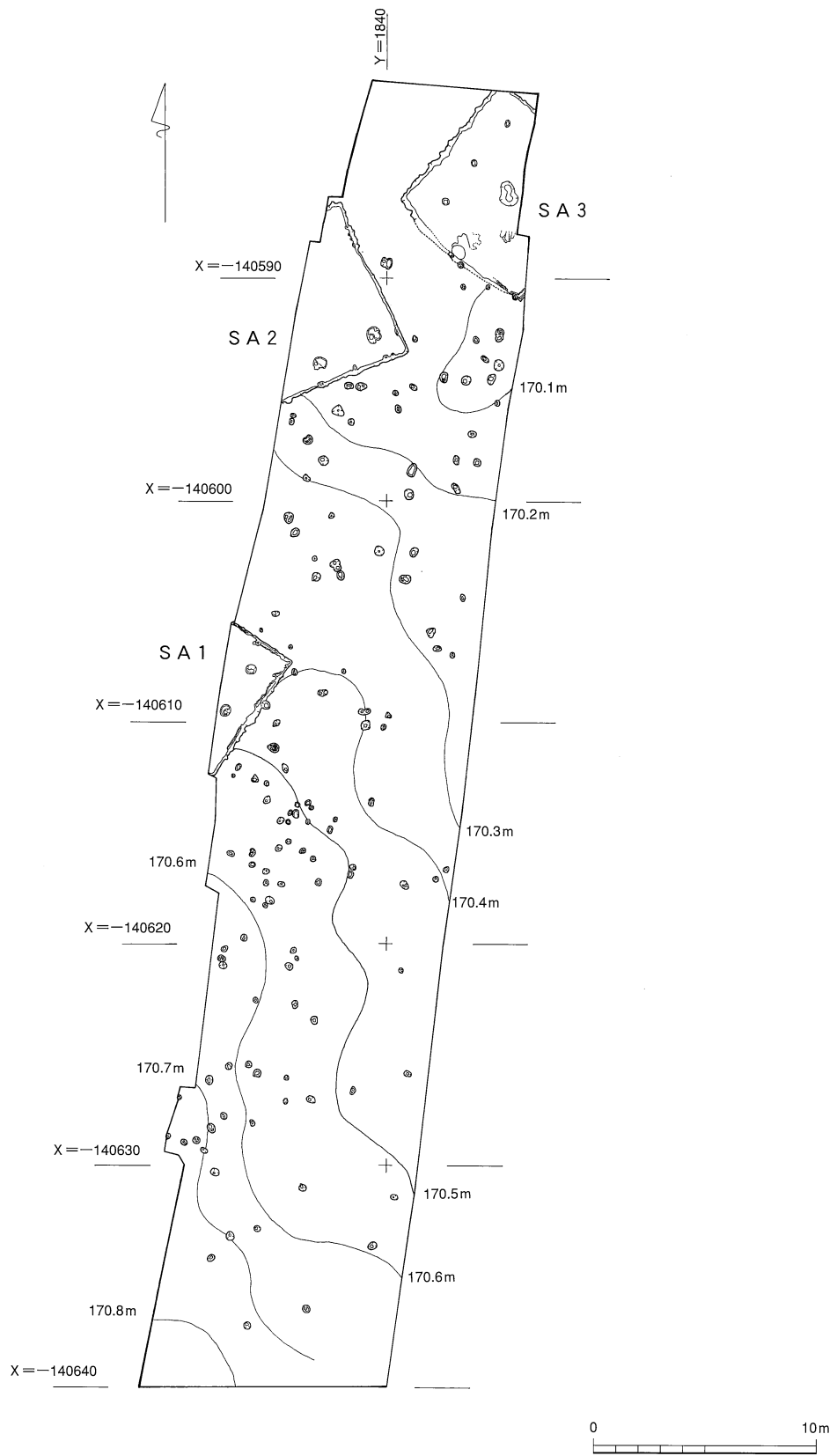
#### 1号竪穴住居跡 SA 1 (第6図)

B 2 区の北端部西側で検出された竪穴住居跡である。住居西側の大部分は調査区外の畑下に延びているため、プランの約4分の1を検出した。平面プランは正方形あるいは長方形になるであろう。東壁長は約6.3mを測る。検出面から床面までの深さは最深部で0.27mを測る。住居の埋土は、御池ボラを混入する黒褐色土を主体とし、乱れは認められないことからある程度自然堆積したものと考えられる。

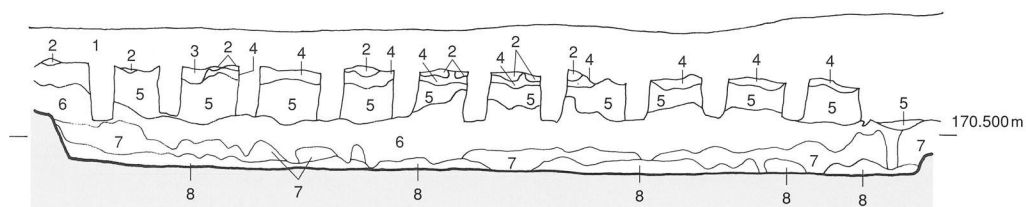
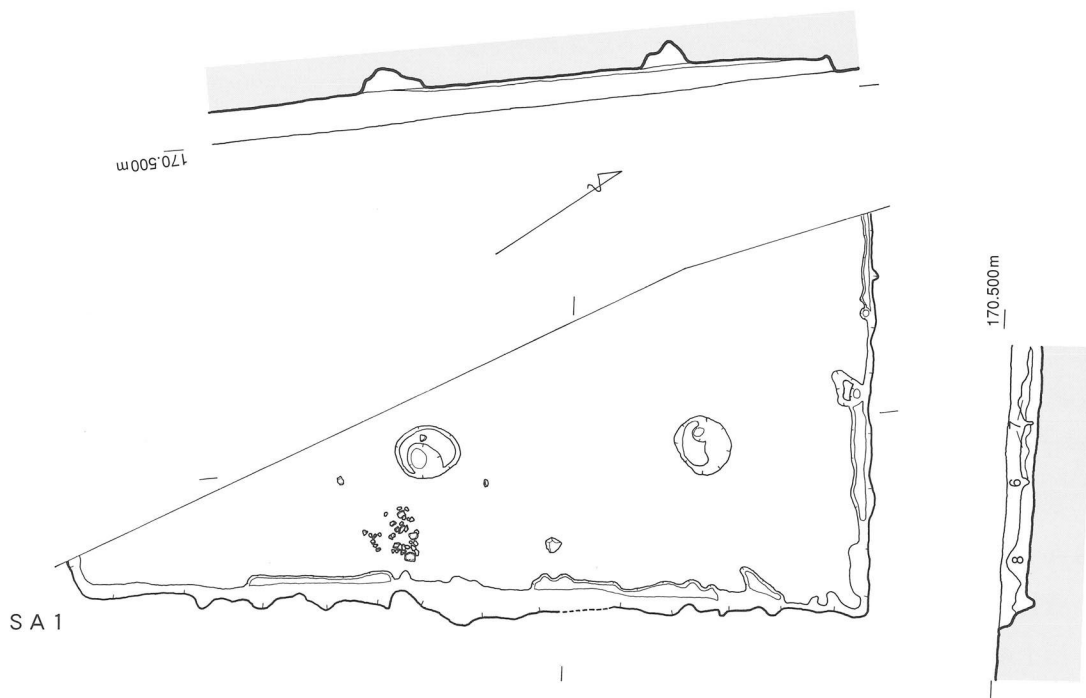




第4図 葦原遺跡 B1区Ⅶ層上面遺構分布図 (1/300)



第5図 葦原遺跡 B2区Ⅶ層上面遺構分布図 (1/300)



- 1 表 土 砂質。しまりは弱い
- 2 淡黄色軽石 白ボラ濃集層
- 3 黒色土 白ボラを多く含み、もろい
- 4 黒色土 白ボラを少量混入する。
- 5 黒色土 御池ボラを少し含む。粘質でしまりがある。
- 6 黒褐色土 御池ボラを含む。
- 7 黒褐色土 御池ボラを少し含む。硬くしまりがある。
- 8 黒褐色土 御池ボラを多量に含み、硬くしまっている。



第6図 葦原遺跡 1号竪穴住居跡実測図 (1/60)

支柱穴は主軸に平行に配置される東側の2本のみを検出した。柱間隔は約2.3mである。床面は全体的に平坦で硬化している。東壁と北壁に深さ7cm前後の壁帯溝を有する。焼土・炉跡は確認されなかった。

遺物は、床面直上で支柱穴の近くに土器片がまとまって出土している。住居廃棄後に投棄されたものであろう。

出土遺物を第8図に示した。

1はくびれを持たずに、体部から口縁に内湾しながら延びる器形の甕で、口縁に貼付突帯を有する。やや上げ底で底部に緩やかなくびれを持ち、外反気味に立ち上がる。2は鉢で、底部が外反し、わずか



に上げ底になっている。外面・内面とも斜方向の指ナデ調整で、外面には指頭痕が見られる。3~4は埴である。3は、外面は風化が著しいものの一部にヘラミガキや指頭痕が見られる。内面も口縁部に近くなるほど風化が著しいものの、底部近くはミガキが見られ、黒斑が内部まで入っている。4は、外面は横方向やや斜方向のヘラミガキ、内面も横方向や斜方向のヘラミガキである。

### 2号竪穴住居跡 SA2 (第7図)

B2区の北端部西側、SA1の北約10mで検出された。SA1と同様に住居西側の半分は調査区外の畑下に延びているため、プランの約2分の1を検出した。平面プランは長方形と思われる。東壁長は約7.4m、北壁長は検出できた部分で約6.2mを測る。検出面から床面までの深さは約0.2mを測る。住居の埋土は、御池ボラを混入する黒褐色土を主体とし、乱れは認められないことからある程度自然堆積したものと考えられる。

支柱穴は南側の2本のみを検出した。柱間隔は約2.7mである。床面は全体的に平坦で硬化している。SA1とちがって明確な壁帯溝は見られない。焼土・炉跡も確認されなかった。

遺物は、床面直上で支柱穴の近くに土器片がまとまって出土している。

出土遺物を第9図に示した。

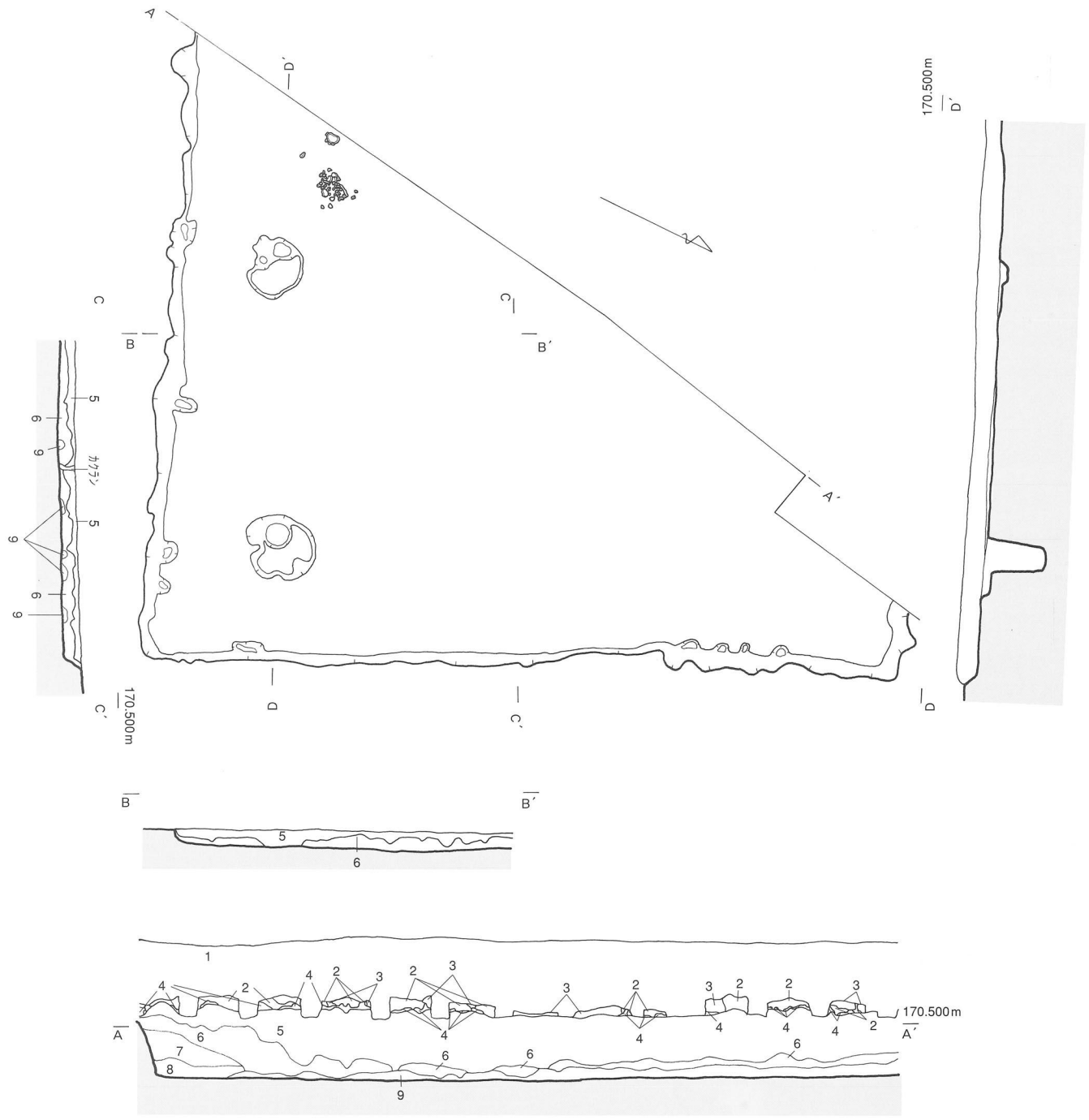
5・6は同一個体と思われる。くびれを持たずに、体部から口縁に内湾しながら延びる器形の甕で、口縁に貼付突帯を有する。内面底部付近に横方向の工具痕が見られる。底部がなく、甑として再利用された可能性もある。7は甕である。平底で底部にくびれを持ち、若干底部裾が外方に開き気味になっている。外面・内面共にナデ調整である。8・9は壺である。8は長胴形になると思われる。口縁部が上方に延びわずかに内傾する。外面はヘラミガキ調整で、煤が付着している。内面は粘土のつなぎ目が見られ、薄く黒変している。9は壺の胴部と思われる。外面・内面共にナデ調整である。10~12は埴である。10は、外面はケズリ風ナデで底部は風化気味である。内面は斜方向のヘラミガキで、黒変している。11は、全体的に風化が著しく調整不明である。12は、外面は口縁部が横ナデ、胴部から底部にかけてナデ調整である。内面は風化が著しく調整不明である。13は、高台付坏の底部である。全体的に風化気味であるが、外面・内面共に丹塗りである。

### 3号竪穴住居跡 SA3 (第10図)

B2区の北端部東側、SA2に隣接する形で検出された。住居東側が調査区外の畑下に延びているため、プランの約3分の2を検出したが、本遺跡の3軒の竪穴住居跡の中では最も広く検出された。平面プランは正方形で、一辺は約7.1mを測る。検出面から床面までの深さは約0.4mを測る。住居の埋土は、御池ボラを混入する黒褐色土を主体とし、乱れは認められないことからある程度自然堆積したものと考えられる。支柱穴は西側の3本のみを検出した。住居跡の主軸に平行して配置されており、柱間隔は2.2m前後である。床面は全体的に平坦で硬化している。中央部がやや窪んでおり、最深部は検出面から約0.5mを測る。南東のコーナーに壁帯溝を有するが、それ以外では確認できなかった。

南壁中央部近くには長軸0.46m、深さ0.36mの掘り込みがあり、土器片が集中していたが、後に掘り込まれたもので、SA3に伴うものではないと考えられる。

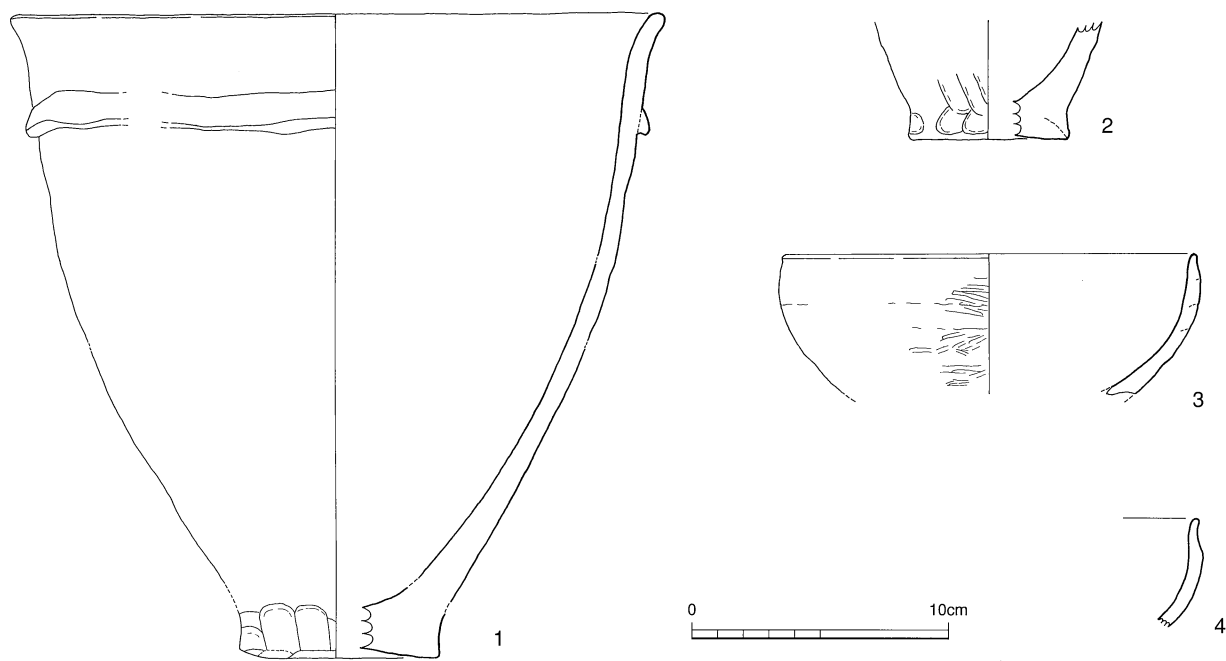
中央部やや南寄りに掘り込みがあり、炉跡かと思われたが、硬化した落ち込み跡は確認できたものの、



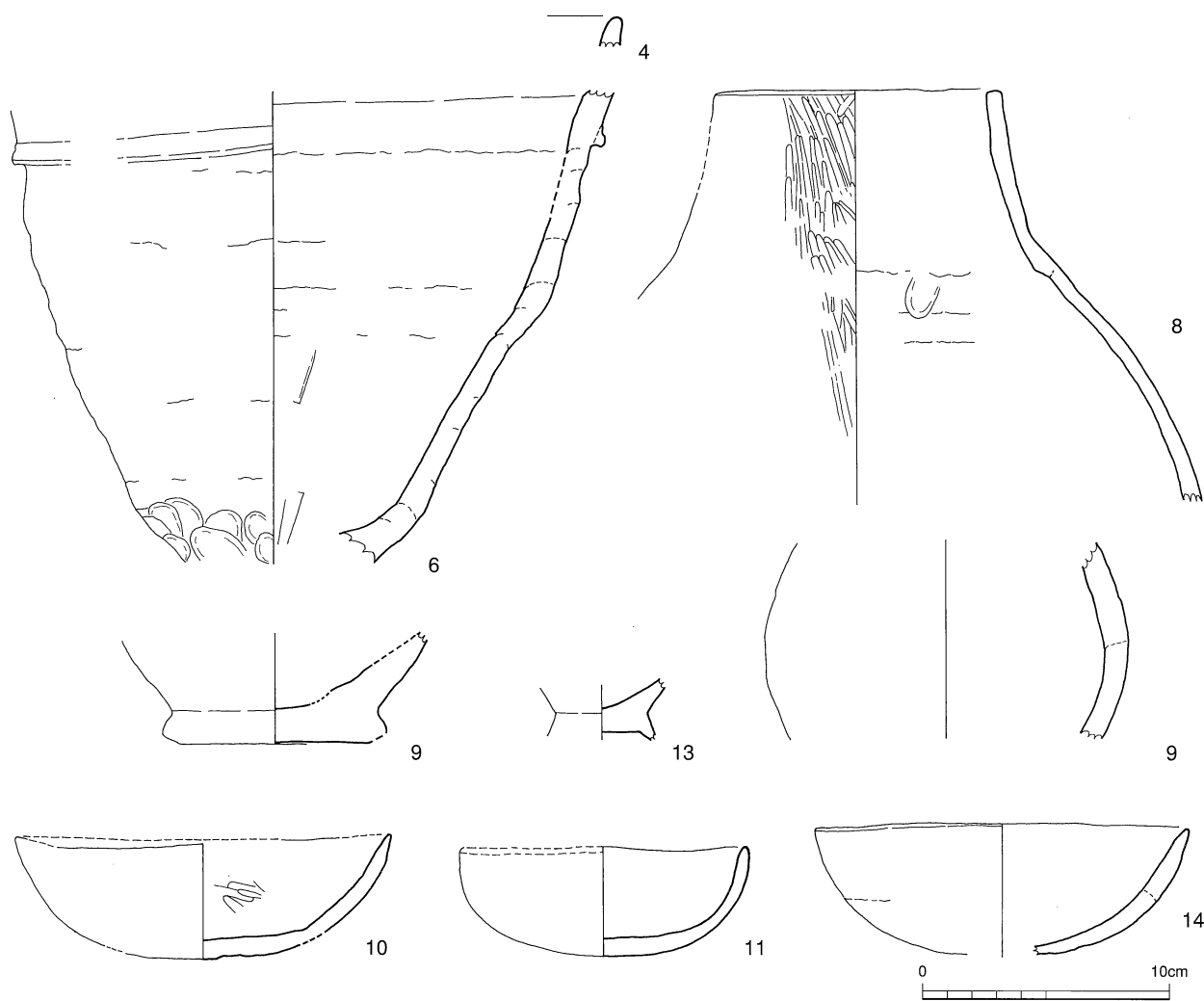
- 1 表 土
- 2 淡黄色軽石 白ボラ濃集層
- 3 黒色土 白ボラを多く含み、もろい
- 4 黒色土 白ボラを少量混入する。
- 5 黒色土 御池ボラを少し含む。粘質でしまりがある。
- 6 黒褐色土 御池ボラを含む。やや粘質でしまりがある。
- 7 黒褐色土 御池ボラを多量に含み、硬くしまっている。
- 8 黒褐色土 7層より御池ボラを多く含み、硬くしまっている。
- 9 黒褐色土 御池ボラを多量に含み、硬くしまっている。住居の床面と考えられる。

0 2m

第7図 葦原遺跡 2号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第8图 蓑原遺跡 1号竖穴住居跡出土遺物実測図(1/3)



第9图 蓑原遺跡 2号竖穴住居跡出土遺物実測図(1/3)



焼土のような埋土ではなく、火を使ったかどうかは不明である。なお位置的に見て、S A 3に伴うものではないと考えられるが、断面からは確認できなかった。中からは土器が1点出土している。

出土遺物を第11図に示した。

14は逆L字状口縁の甕である。口縁部上面が水平である。内への突出は弱く、外端部が丸い。復元口径17cm前後で、穿孔が2カ所ある。外面・内面共にナデ調整で、内面には、斜方向の工具痕と指頭痕が見られる。15と16は同一個体であると思われる。口縁が外反する壺である。外面は粗いナデとミガキによる調整で黒変している。内面は工具による横方向・斜方向のナデ調整で粘土のつなぎ目が見られる。17は甕の口縁付近で、外面は貼付突帯を有し、穿孔がある。18・19は坏である。外面・内面共にミガキ調整である。20は高坏の脚部である。外反しながら延び、裾部が開いていく。外面は風化が著しくミガキの調整が不明である。内面はナデ調整である。21は高台付碗の裾部と思われる。外面は丹塗りで内面はナデ調整である。22～24は須恵器である。22は短頸壺である。口縁部は外反しながら外上方へ立ち上がり、底部は丸底である。外面は口縁部から頸部にかけて横ナデ、胴部から底部にかけてヘラケズリである。内面は口縁部は横ナデで、胴部から底部にかけては回転による横ナデである。23は坏身である。外面は回転ナデの後、粗な調整で、底部はヘラ切り後、粗なナデ調整が見られる。内面は回転ナデ調整である。24は甕の胴部である。外面は格子目叩きの後ナデ調整、内面は同心円状の当て具痕が見られる。25・26は甕である。25はくびれを持たずに、体部から口縁に内湾しながら延びる器形の甕で、口縁に貼付突帯を有する。口唇部がやや先細りで丸く仕上げている。平底で底部に緩やかにくびれを持ち、外反気味に立ち上がる。26はくびれを持たずに、体部から口縁に内湾しながら延びる器形の甕で、口縁に貼付突帯を有する。貼付突帯下部には指頭圧痕が並ぶ。

なお、25・26はS A 3南端部の土坑から出土したものの、この土坑はS A 3に伴うものではないと推測されるため、25・26もS A 3に共伴する遺物ではないと考えられる。

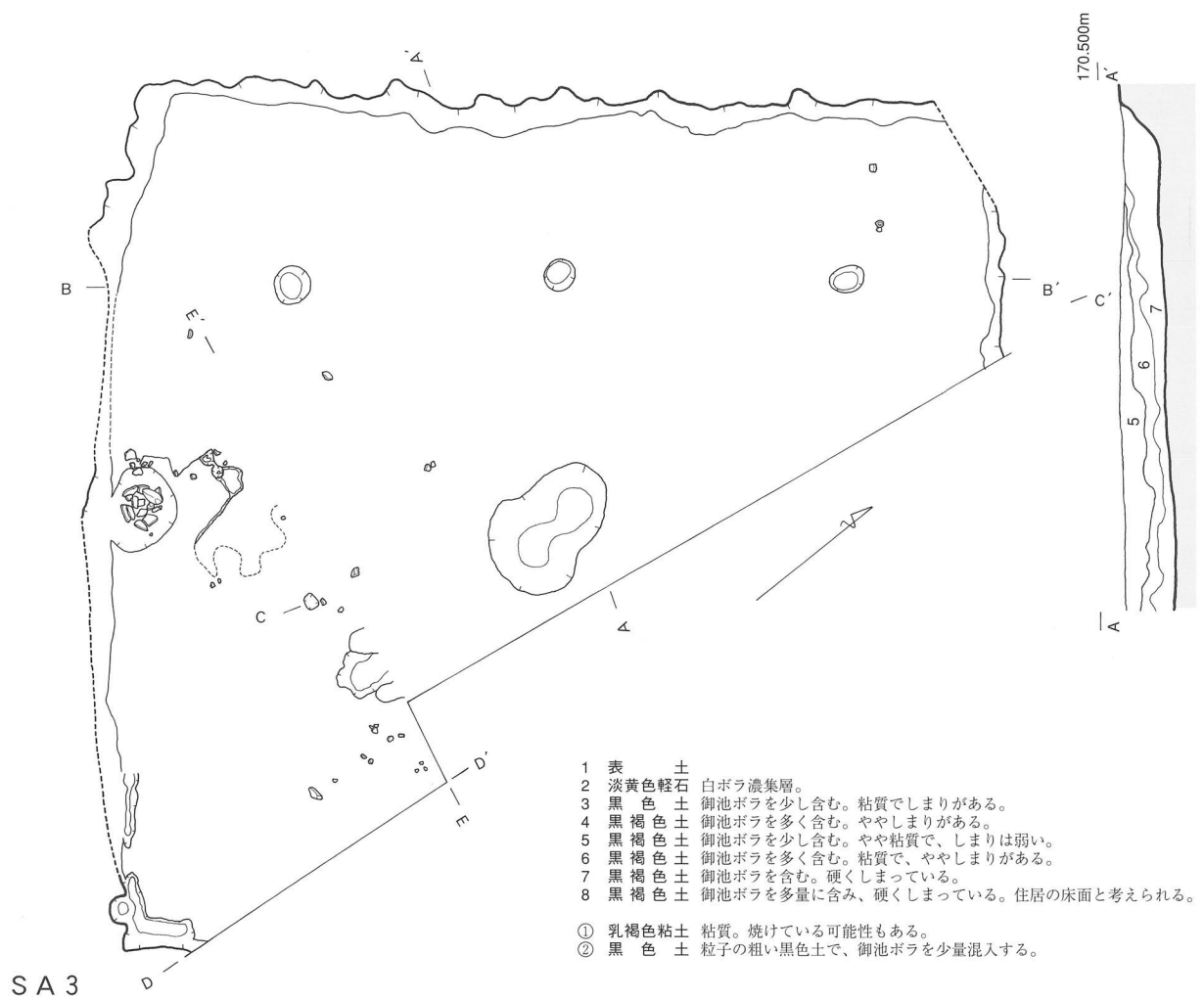
## ピット群

B区内には、主要な遺構の他に多数のピットが穿たれていた。規模にはかなりのばらつきがあり、建物の柱穴としてまとまるものは確認できなかった。こうしたピット群の性格はよく解らず、ピットによっては、壁面や底面は歪みあるいは凹凸が著しいものが見られ、埋土の状況からして人工のものではなく、自然にできたもの、例えば樹木の根穴などの可能性も考えられる。

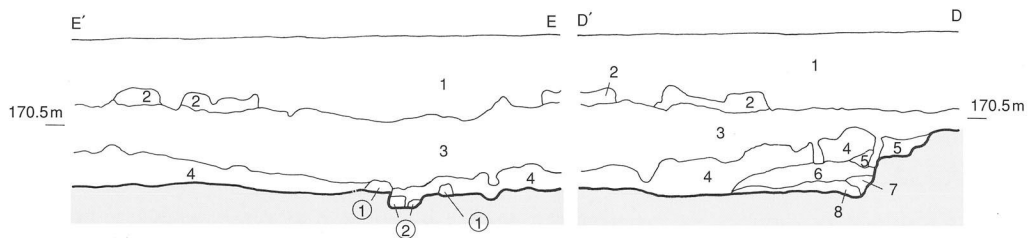
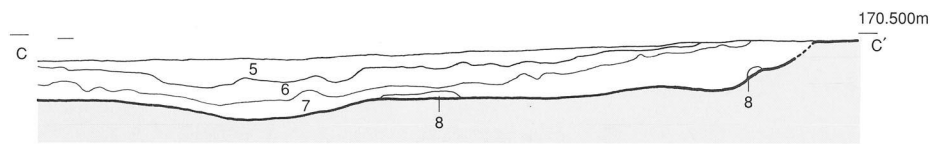
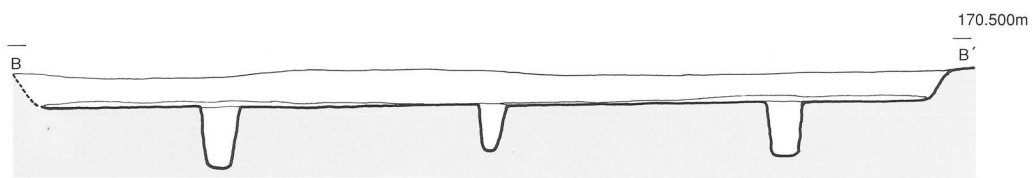
ピット群の分布状況を見ると、多くが西側に存在していることが指摘できる。これは東側が耕作による攪乱が激しかったためであろうと考えられる。また南に行くほどまばらになっている。

## 2 遺構以外の出土遺物 (第12・13図)

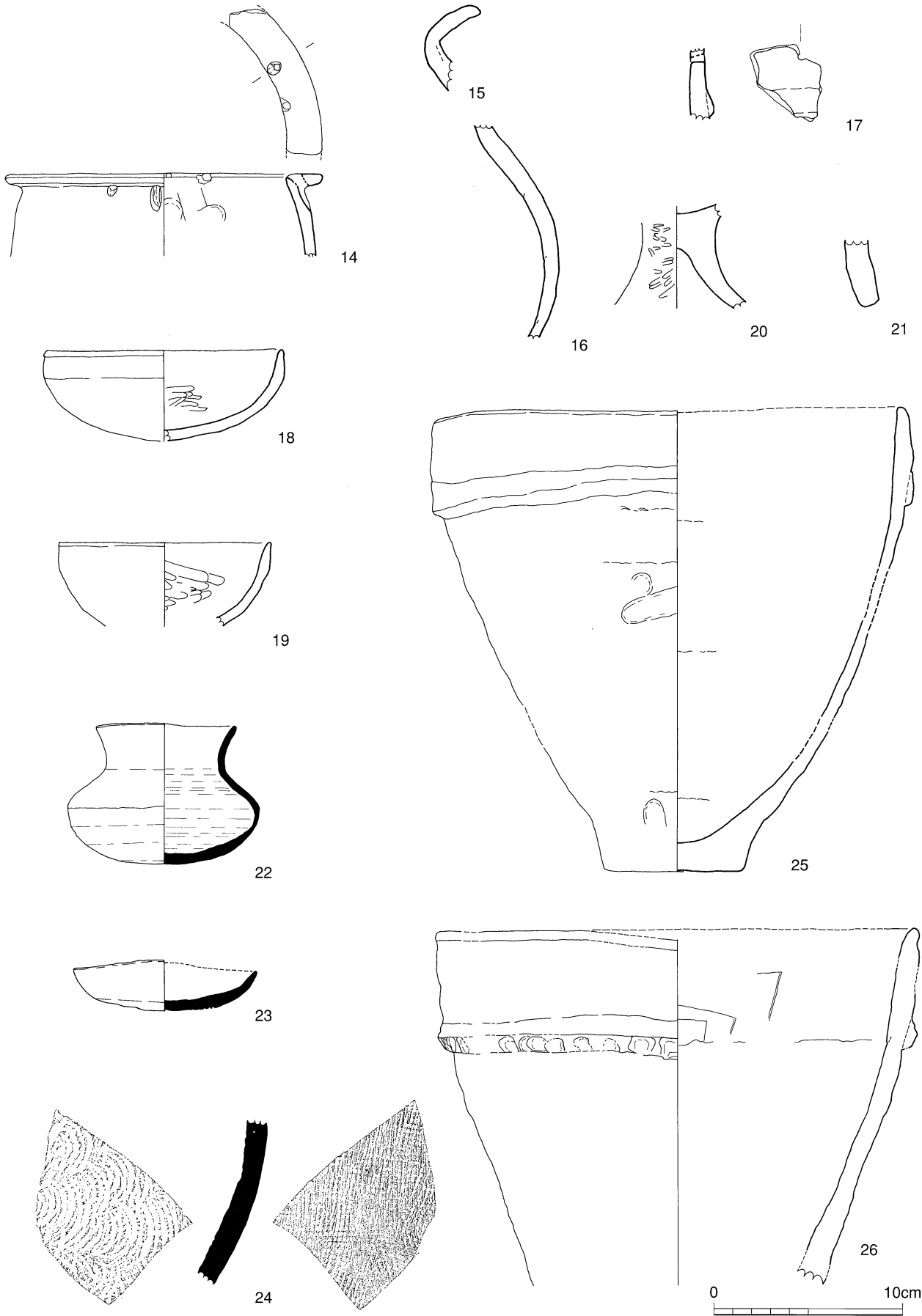
遺物の出土状況は、大半がIV層(御池ボラ中混黒褐色土)からで、特にIV層上部から多く出土し、IV層下部にいくほど少なくなっていた。中央部から北側にかけて多く出土し、南側からは少なかった。遺物は、縄文土器や下城式土器をはじめとする弥生土器等で、陶磁器片も数点見られた。



SA 3



第10図 葦原遺跡 3号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第11図 葦原遺跡 3号竪穴住居跡出土遺物実測図(1/3)

## 縄文土器

27～33は深鉢である。

27はやや外反し、口縁部からやや下方に貼付突帯を有する。28は口縁部からやや下方に貼付突帯を有する。29は口唇部に向かって先細りとなり貼付突帯を有する。30は台形状の突帯が口縁端部に接するよう貼り付けられている。31は、口縁部が内傾する器形である。32はやや内湾気味に立ち上がる器形で、外面は横方向の条痕の上をナデ調整している。内面は横方向のヘラミガキである。33は平底で底部がやや直立気味に立ち上がった後、直線的に開いている。

34～39は浅鉢である。34・35は天城式土器と考えられる。34は口縁部が短く外反して鱗状突起が付き、口辺部内面に沈線がめぐる。胴部上半に最大径を持つと考えられる。35は口縁部が短く外反して鱗状突起が付き、口辺部外面に沈線がめぐる。36・37は黒色磨研の黒川式土器である。36は口縁部が短く外反し、口辺部外面に沈線がめぐる。37は胴部が屈曲し、口縁部に向かって外反していく器形であると考えられる。38・39は胴部が屈曲し、外反しながら口縁部が開く浅鉢になると思われる。38はリボン状突帯と思われる痕跡が見られる。

## 弥生土器

40・41は下城式と考えられる甕の胴部である。40は刻目突帯を1条有し、胴部はやや膨らみを持ち底部へとすぼまる器形であると思われる。41は刻目突帯を2条有し、直線的に口縁部に至る器形と思われる。42は下城式と考えられる壺の頸部から胴部で、頸部と胴上半部に2本単位の平行線文がめぐる。43は甕の底部である。

## 土師器

44・45は甕の底部である。44は上げ底で裾部は外側に開く。45は平底である。46は壺の底部である。尖底で内面の中心点に工具突刺痕らしきものが見られる。47・48は高坏の脚部である。49は土製紡錘車である。

## 須恵器

50は蓋で推定口径は9.3cmである。51は壺の頸部から肩部である。外面は平行叩きで、内面に放射状の当て具痕を残す。

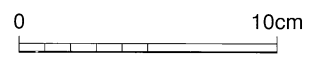
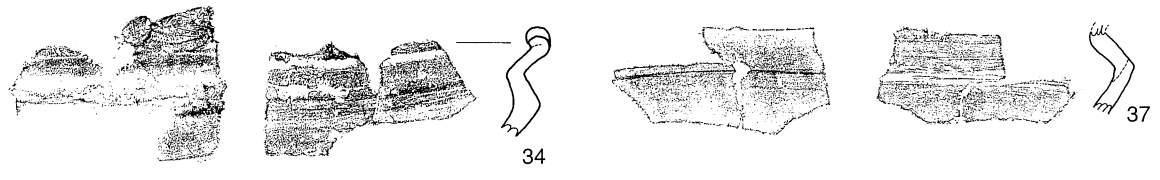
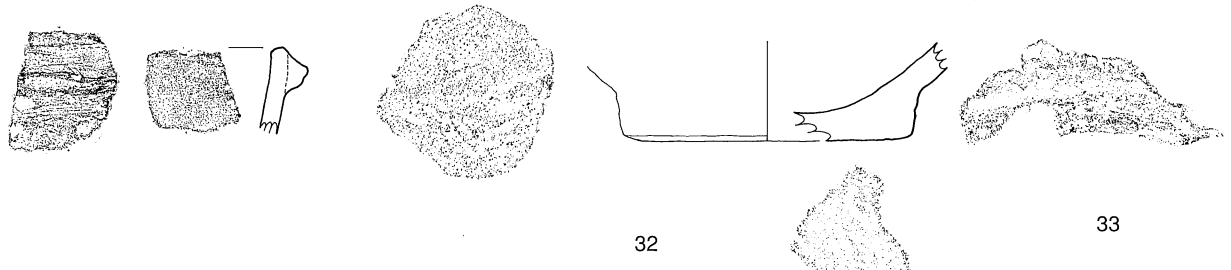
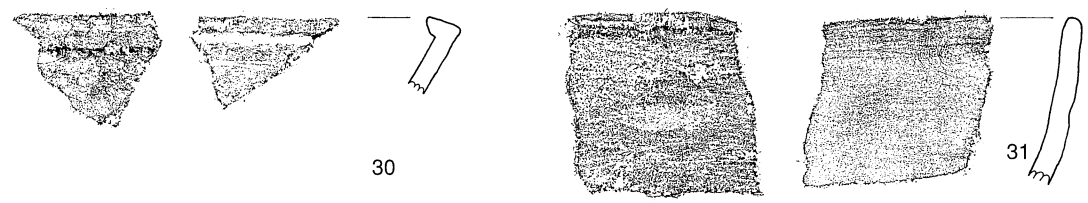
## 青磁

52～54は青磁碗である。

52は龍泉窯系青磁碗の体部で、外面に鎬蓮弁文を削り出している。53は龍泉窯系青磁碗の体部下半である。表裏に草花文を施す。口縁部に雷文の入る可能性が高い。54は龍泉窯系青磁碗の体部である。外面に片切彫の蓮弁文を施す。

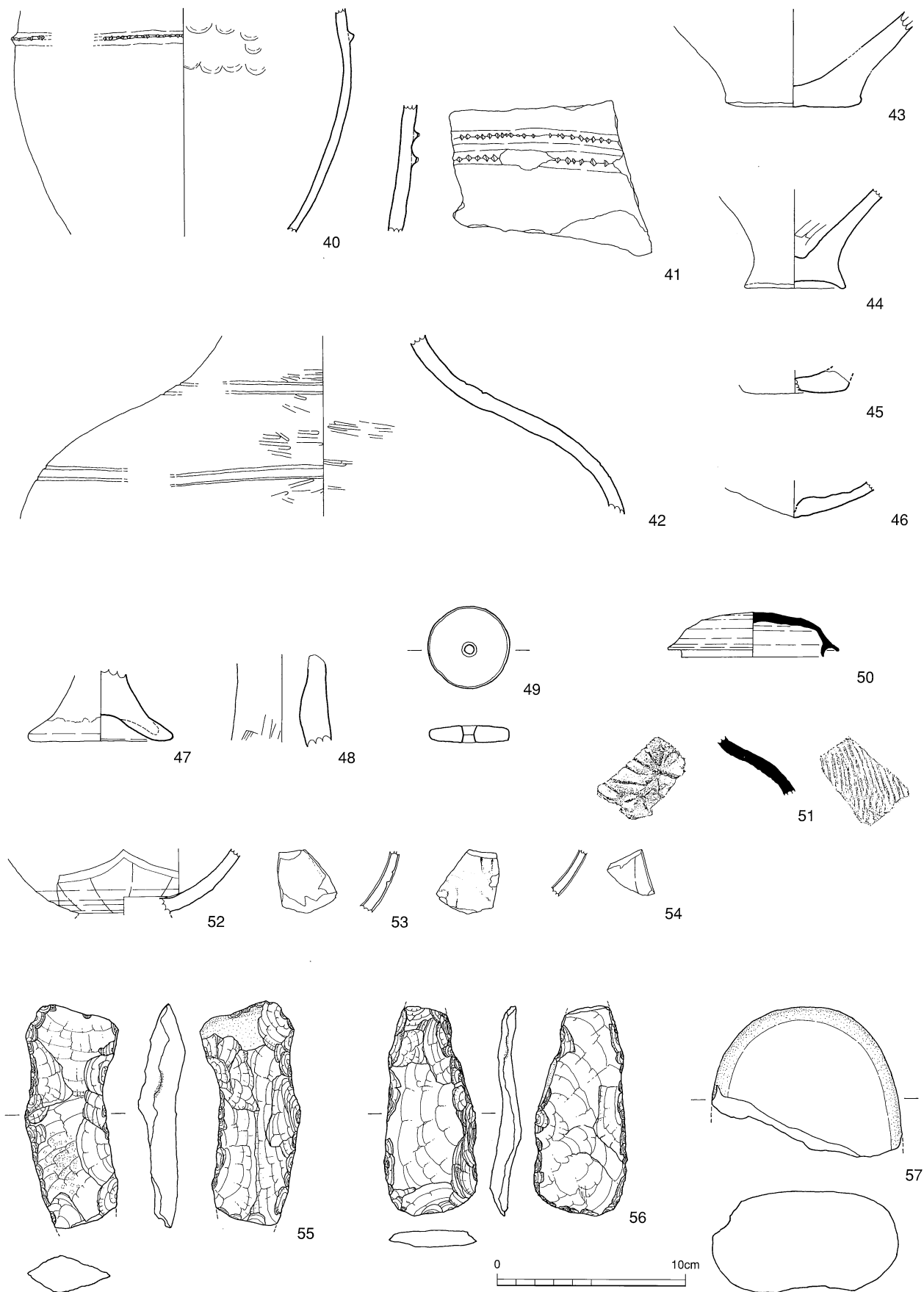
## 石器

55・56は打製石斧である。55は利用石材は砂岩である。下方両側面に敲打痕がありややえぐりが入る。



第12図 蓑原遺跡 B区遺構外出土遺物実測図(1) (1/3)





第13図 葦原遺跡 B区遺構外出土遺物実測図(2) (1/3)

全体的に剥離が粗雑でややいびつ、器体が屈曲している。最大長12.1cm、最大幅5.3cm、最大厚2cm、重量121.8gである。56は利用石材は頁岩である。側縁上部に敲打痕がありやくびれている。頁岩の特徴を反映した階段状剥離が顕著である。撥形を呈す。最大長11.35cm、最大幅5.05cm、最大厚0.9cm、重量77.9gである。57は溶結凝灰岩製の磨石である。一部欠損部分を除いて全面に擦痕、上方に敲打痕がある。最大長8.1cm、最大幅10.25cm、最大厚5.4cm、重量650gである。

## 第5節 C区の調査

C区は現場事務所及び駐車場があったため、一番最後に調査を行った。表土を重機で剥ぎ、II層上面で精査し、畝状遺構の確認をしたが、白ボラの残存状況が悪く、遺構の確認はできなかった。そこでIV層までさらに重機で掘り下げ、遺構の検出を行った。

C区もIV層では埋土との区別がつきにくく、最終的には御池ボラの混入が多くなるVII層まで掘り下げて精査し、竪穴状土坑4基、土坑1基、ピット群が検出された。ピットの埋土はB区同様3種類が確認できたが、埋土の違いによるピットの時代差や性格の違いは確認できなかった。

C区とD区の境は、1m以上の段差のある畑地であったが、遺構検出面（VII層）まで掘り下げてみると、C区北端部は北に向かって急斜面になっていた。

C区西側はゴボウのトレンチャーによる攪乱が激しく遺構の検出が困難であった。竪穴状土坑は南側に集中している。ピット群は攪乱の少なかった東側に集中して検出されたが、B区同様、掘立柱建物として認定できる柱穴の並びは確認できなかった。

### 1 検出遺構（第14図）

#### 土坑

##### 1号土坑 SC1（第15図）

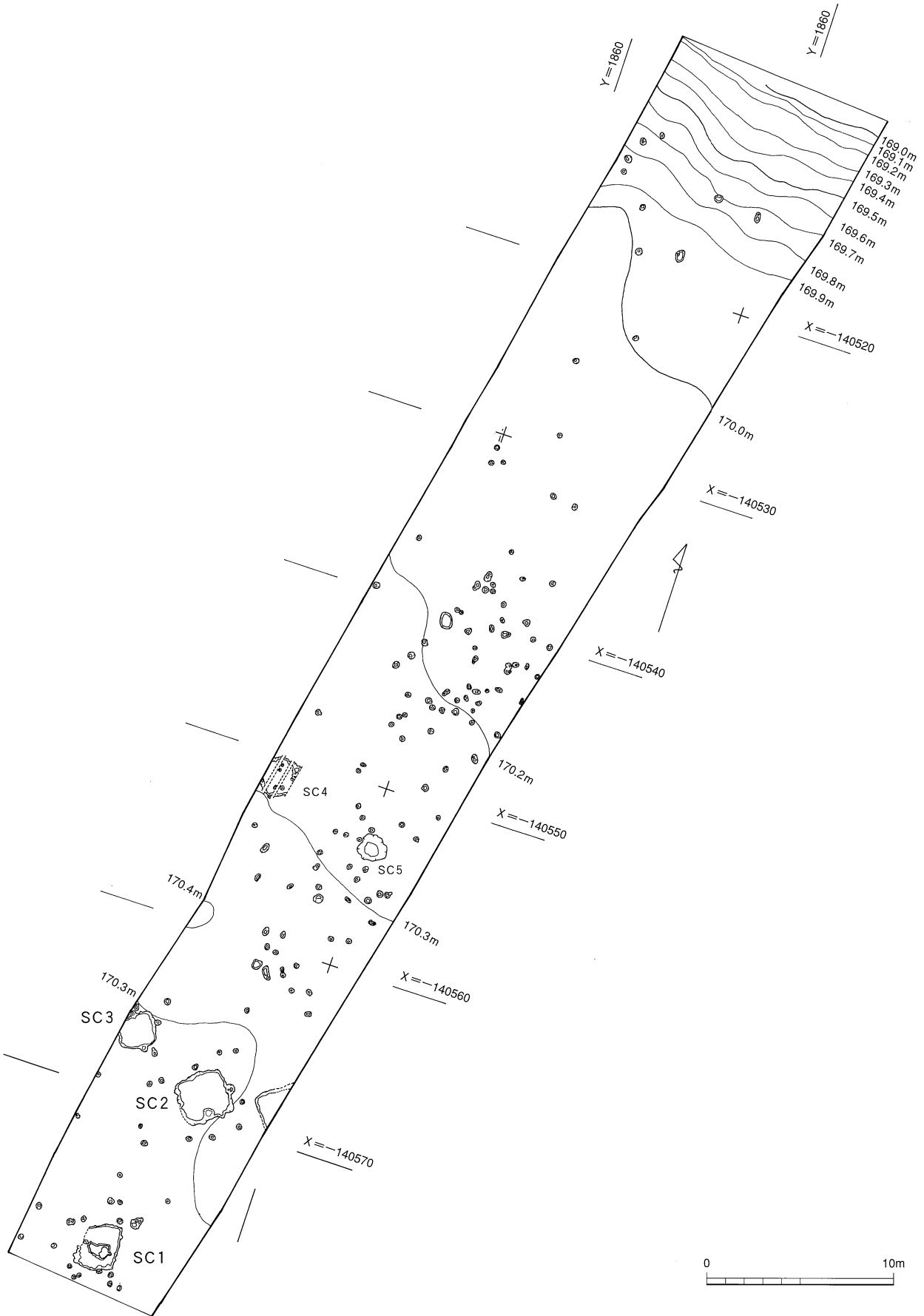
C区の南端部で検出した竪穴状土坑である。北西部の隅は耕作による攪乱で確認できなかった。平面形は、やや歪んでいるものの、長軸2.6m、短軸2.2mの隅丸長方形をなす。床面は中央部が盛り上がり、検出面からの深さは0.04m、周辺部の最深部で0.2mを測る。中央部の盛り上がっている部分の東寄りに焼土が確認された。

土坑内の埋土は2層に分けられ、下層が御池ボラの混入した黒色土で、上層は御池ボラがわずかに混入する黒色土である。長軸の方位はほぼ真北である。

埋土から土師器の埴（64）が出土している。

##### 2号土坑 SC2（第15図）

C区の南側、SC1の北約7mで検出した竪穴状土坑である。平面形は長軸2.8m、短軸2.5mの隅丸長方形をなし、C区の竪穴状土坑中最大規模である。床面の深さは、検出面から約0.28mを測り、ほぼ平坦で、黒色土の混入した御池ボラで硬化している。南壁中央部内側と東壁中央部外側にピットが検出



第14図 葦原遺跡 C区Ⅶ層上面遺構分布図(1/300)

された。

長軸の方位は北に対して60° 前後東へ振れる。埋土は2層から成り、下層は御池ボラの混入した黒色土で、上層は同じ黒色土ながら御池ボラの混入が少なくなっている。

埋土から弥生土器の壺（60）が出土している。

### 3号土坑 SC3（第15図）

C区の南側、SC2の西側約2mに隣接して検出した竪穴状土坑である。平面形は長軸2m、短軸1.8mの隅丸長方形をなす。西側の隅は調査区外の畑下に延びているため検出できなかった。床面の深さは、検出面から約0.28mを測り、ほぼ平坦で、黒色土の混入する御池ボラで硬化している。北壁・南壁の中央部外側と東壁中央部にピットが検出された。長軸の方位は北に対して65° 前後東へ振れる。埋土は2層から成り、下層は御池ボラの混入した黒色土で、上層は同じ黒色土ながら御池ボラの混入が少なくなっている。西壁部分は調査区外の畑下にあるため、ピットは確認できなかった。

埋土から石核と敲石（65・66）が出土している。

### 4号土坑 SC4（第15図）

C区の中央部西側で検出した竪穴状土坑である。ゴボウのトレンチャーによる攪乱が南北に走っているため、4基の竪穴状土坑中最も検出状況が悪く、全体を明確に検出することはできなかった。西側の隅は調査区外の畑下に延びているため検出できなかった。東側の隅はトレンチャーで切られていた。平面形はややいびつながら一辺約2mの正方形である。床面は凹凸があり、硬化面は確認できなかった。遺構の上部が切られているため、床面の深さは、検出面から約0.06m程で、凹部でも0.14m程度である。ピットは8基検出されたが、どれが遺構に伴うものであるかは確認できなかった。埋土は2層からなり、下層は御池ボラの混入した黒色土で、上層は同じ黒色土ながら御池ボラの混入が少なくなっている。

### 5号土坑 SC5（第15図）

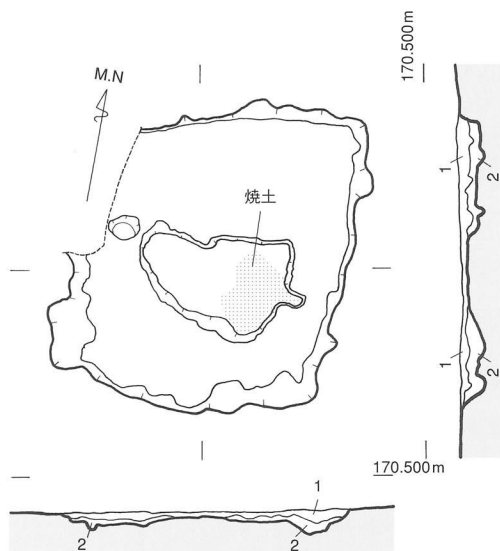
C区の中央部東寄り、SC4の東5mで検出された。SC1～SC4までが竪穴状土坑であるのに対し、平面形状は、南北1.4m、東西1.6mの不整形をなす。底面までは約0.6mと深く、東側の掘り込み面は急である。埋土は3層からなり、黒色土で下層に行くほど御池ボラの混入が多くなっている。西側にピットの並びが2列に広がるように検出されたが、SC5に伴う遺構かどうかは不明である。

埋土から砥石（67）が出土している。

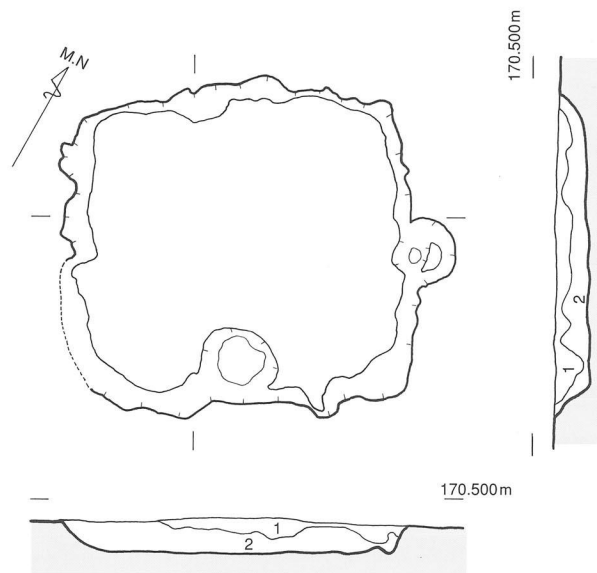
### ピット群（第14図）

C区内には、主要な遺構の他に多数のピットが穿たれていた。規模にはかなりのばらつきがあり、建物の柱穴としてまとまるものは確認できなかった。B区同様、こうしたピット群の性格はよく解らず、ピットによっては、壁面や底面は歪みあるいは凹凸が著しいものが見られ、埋土の状況からして人工のものではなく、自然にできたもの、例えば樹木の根穴などの可能性も考えられる。

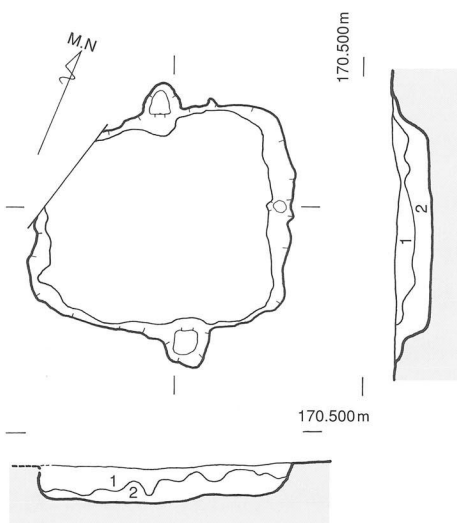
ピット群の分布状況を見ると、調査区中央部東側がやや密度が高いことが指摘できる。北側の斜面に近づくにつれてピット群が希薄となっている。



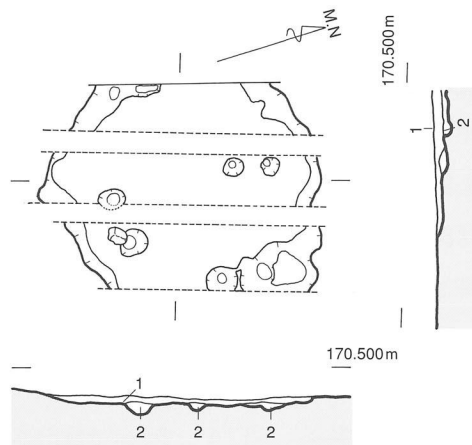
1号土坑 (SC1)



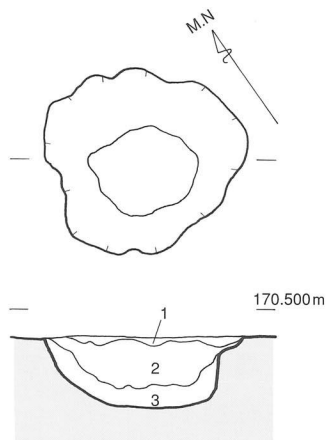
2号土坑 (SC2)



3号土坑 (SC3)



4号土坑 (SC4)



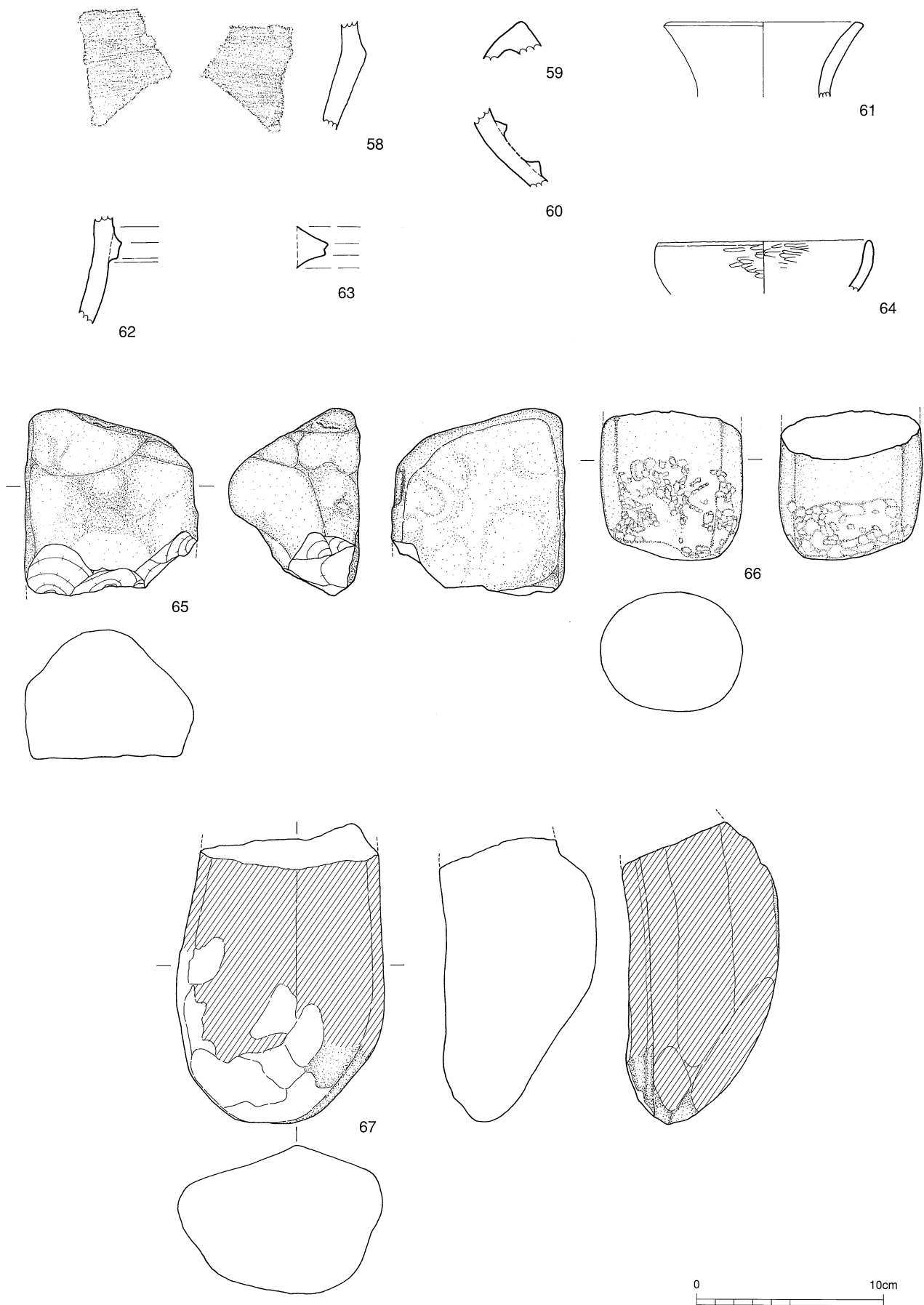
5号土坑 (SC5)

- 1 黒色土 径1~10mmの御池ボラを含む。やや粘質でしまりがある。
- 2 黒色土 1層よりも御池ボラの混入が多い。やや粘質でしまりがある。
- 3 黒色土 御池ボラを多量に含む。



第15図 葦原遺跡 C区土坑実測図 (1/60)





第16图 葦原遺跡 C区出土遺物実測図 (1 / 3)

## 2 出土遺物 (第16図)

### 縄文土器

58は深鉢の胴部である。胴部が屈曲する器形である。内外面とも条痕の上を横ナデ調整している。

### 弥生土器

59～61は壺である。59・60は同一個体で、垂下り口縁を持つ壺である。肩部に3条の三角突帯をもつが、真ん中の突帯は剥離したと思われる。61は口縁部が朝顔形に開く壺であると思われる。口径10.9cmを計る。62・63は甕である。62は胴部で台形状の貼付突帯を持つ。63は甕から剥離したと思われるM字状の貼付突帯である。

### 土師器

64は碗の口縁部である。口唇部はやや風化しているものの、内外面ともにミガキが施されている。

### 石器

65は3号土坑に伴って出土した石核である。利用石材はデイサイトである。最大長10.04cm、最大幅9.4cm、最大厚7.1cm、重量910gである。66は3号土坑に伴って出土した敲石である。利用石材は砂岩である。下端に敲打痕が観察される。最大長8.2cm、最大幅7.8cm、最大厚6.5cm、重量570gである。67は5号土坑に伴って出土した砥石である。利用石材は砂岩である。表面全体に擦痕が見られる。最大長16.35cm、最大幅13.5cm、最大厚8.1cm、重量1915gである。

## 第6節 D区の調査

D区は農業用道路工事との関連で北端部を先に調査した。

トレンチを数カ所掘削したところ、白ボラの残存状況が4区中最もよかった。そこで、重機で表土を剥ぎ、白ボラ(Ⅱ層)上面で精査したところ、畝状遺構と考えられる遺構が広い範囲にわたって検出された。白ボラを復旧した以降の畑地であると考えられるので、時代の特定は困難である。

北側は北に向かって急斜面になっており、北に行くほど、白ボラも厚く堆積している状況が見られた。トレンチを入れた結果、遺物等の出土はほとんど見られなかったので、Ⅶ層上面まで掘り下げ、遺構検出を行った。その結果北端部だけで、柱穴から出土した遺物から中世と考えられる掘立柱建物跡5棟、石組遺構1基、土坑2基、溝状遺構1条が検出された。

D区の残りの部分(中央部～南端部)は、重機による表土剥ぎを行い、Ⅱ層上面で精査したが、耕作の攪乱等により白ボラがほとんど残っていなかった。そこでⅦ層上面まで掘り下げて精査した。その結果、C区との境に溝状遺構1条、柱穴から出土した遺物から中世と考えられる掘立柱建物跡4棟、土坑1基、ピット群が検出された。ピットの埋土は3種類あり、きめの細かい黒色土で御池ボラをわずかに混入したやわらかい埋土(A)、御池ボラを混入する黒色でやや軟らかい埋土(B)、御池ボラを多量に混入



- 1 表土 砂質。しまりは弱い
- 2 淡黄色軽石 白ボラ濃集層。
- 3 黒色土 白ボラを多く含み、もろい。
- 4 黒色土 白ボラを少量混入する。
- 5 黒色土 細粒の黒色土。ややしまっている。径1~3mmの御池ボラを散点的に含む。
- 6 黒褐色土 径1~5mmの御池ボラを全体的に含む。しまりは弱い。
- 7 明黄褐色軽石 径1~5mmの御池ボラを全体的に含む。
- 8 黒褐色土 径1~10mmの御池ボラを多量に含み、硬くしまっている。
- 9 黒褐色土 黒褐色土と御池ボラの混土層。
- 10 黒色土 粘質シルト。径1~10mmの御池ボラをまばらに含む。
- 11 明黄褐色軽石 御池ボラのアブロックを多く含む。
- 12 黒色土 やや粘質。白ボラと御池ボラを少量含む。
- 13 黒褐色土 御池ボラを混入し、硬化している。
- 14 黒褐色土 御池ボラを混入し、硬化している。
- 15 明黄褐色軽石 御池ボラを大量に含む。
- 16 黄褐色土 白ボラ2次堆積層。
- 17 褐色土 黒褐色土と白ボラの混土層。
- 18 暗灰黄色軽石 白ボラ1次堆積の上部層。極細粒。
- 19 灰黄色土 白ボラ1次堆積の下部層。下方程粗くなる。
- 20 黒褐色土 黒灰色火山灰。
- 21 黒褐色土 硬化層。黒色土と御池ボラの混土層。
- 22 黒褐色土 御池ボラを混入する。
- 23 黒色土 硬化層。径1~10mmの御池ボラを混入し、上下面に鉄分が沈着している。

第17図 葦原遺跡 D区Ⅶ層上面遺構分布図(1/300)及び土層断面実測図(1/60)

する黒褐色土でやや硬い埋土（C）である。A・Bの埋土よりもCの埋土が時代が古いと考えられるが、AとBは類似しており、埋土の違いによるピットの時代差や性格の違いは確認できなかった。

掘立柱建物跡の柱穴の埋土はAとBである。

## 1 検出遺構（第17図）

### 掘立柱建物跡

#### 1号掘立柱建物跡 SB1（第18図）

D区の北端部西側で検出した掘立柱建物跡で3間×2間の長棟構造である。棟方位はN-8°-Eの南北棟である。規模は、東側柱の桁行6.6mで、柱間隔は北から2.2m、2.3m、2.1m、西側柱の桁行6.7mで、柱間隔は北から2.2m、2.3m、2.2mを測り、ほぼ等間隔に並ぶ。北側柱の梁行3.8mで、柱間隔は西から1.9m、1.9m、南側柱の梁行3.9mで、柱間隔は西から1.8m、2.1mを測る。

柱穴の掘形は東側柱列が径0.35～0.6m前後、西側柱列が径0.35～0.45m前後の円形及び楕円形を呈している。10柱穴中6柱穴が2段堀である。柱穴の検出面からの深さは0.3～0.6mとばらつきが見られた。西側柱穴の北から第1柱穴は、一部が調査区外の畑下に延びているため、検出できない部分があった。柱穴から土師器が出土している。

SB1内の中央部南寄りに石組遺構が検出された。掘立柱建物跡に付随する遺構かどうかは不明である。

#### 2号掘立柱建物跡 SB2（第18図）

SB1の南に隣接し、一部切り合う形で検出した掘立柱建物跡である。4間×1間の身舎に、4間×1間の庇を西側に備えた長棟構造である。棟方位はN-11°-Eの南北棟である。規模は、東側柱の桁行7.9mで、柱間隔は北から2m、1.9m、2m、2mを測り、ほぼ等間隔に並ぶ。西側柱の桁行7.7mで、柱間隔は北から1.7m、2m、2.1m、1.9mを測り、ややばらつきがある。北側柱の梁行3.7m、南側柱の梁行3.4mを測る。

柱穴の掘形は東側柱列が径0.2～0.4m、西側柱列が径0.21～0.34mの円形及び楕円形を呈している。東側柱列の北から第3柱穴はやや内側に入り込んでいる。東側柱列の北から第1・4柱穴、西側柱列の北から第3柱穴は2段堀である。柱穴の検出面からの深さは0.3m前後のものが多く、最も深い西側庇柱列の南から第1柱穴は0.39mを測る。

#### 3号掘立柱建物跡 SB3（第19図）

SB1よりやや西側にずれるものの、ほぼ重なる位置検出された掘立柱建物跡である。SB1との時期差については不明である。柱列の並びを見ると、北に向けてやや広がりのあるプランになっている。3間×2間の身舎に、2間×1間の庇を南側に備えた長棟構造である。棟方位はN-7°-Eの南北棟である。規模は、東側柱の桁行5.7mで、柱間隔は北から1.9m、1.9m、1.9mを測り、等間隔に並ぶ。西側柱は北から第1・2柱穴が検出できなかったが、第3柱穴と第4柱穴の柱間隔は2mで、東側柱列の柱間隔とはほぼ同じである。北側柱の梁行3.7m、南側柱の梁行3.5mを測る。

柱穴の掘形は東側柱列がそれぞれ径0.3～0.4m前後、西側柱列が径0.3m前後の円形及び楕円形を呈している。東側柱列の南から第1柱穴と北側柱列の中央柱穴のみ2段堀である。柱穴の検出面からの深さは0.2～0.4m前後のものが多いが、最も深い東側柱列の北から第1柱穴は0.51mを測る。南側底部分の柱穴はどれも浅く、0.12～0.15mである。

#### 4号掘立柱建物跡 SB4 (第19図)

D区北端部の南東側で検出された掘立柱建物跡である。2間×1間の身舎に、2間×1間の庇を南側に備えた長棟構造である。棟方位はE-2°-Sの東西棟である。規模は、北側柱の桁行4.3mで、柱間隔は東から2.2m、2.1mを測り、ほぼ等間隔に並ぶ。南側柱の桁行4.4mで、柱間隔は東から2.2m、2.2mで、等間隔に並ぶ。東側柱の梁行2.2m、西側柱の梁行2.4mを測る。

南側底部分の西から第1柱穴は検出されなかった。

柱穴の掘形は北側柱列がそれぞれ径0.2～0.3m前後、南側柱列が径0.25～0.3m前後の円形及び楕円形を呈している。南側柱列の東から第1柱穴のみ2段堀である。柱穴の検出面からの深さは0.3m程度のものが多いが、南側底部分の柱穴は0.2m前後と浅い。

柱穴から龍泉窯系の青磁碗が出土している。

#### 5号掘立柱建物跡 SB5 (第20図)

D区北端部の南東側、SB4の南隣で検出された掘立柱建物跡である。3間×2間の長棟構造である。棟方位はE-4°-Sの東西棟である。規模は、北側柱の桁行6.7mで、柱間隔は東から2.3m、2.2m、2.2mを測り、ほぼ等間隔に並ぶが、東から第2柱穴、第3柱穴はやや内側に入り込む形となっている。南側柱は東から第4柱穴が調査区外の畑下に延びるため検出できなかったが、第1柱穴、第2柱穴、第3柱穴の柱間隔は2.2mで、等間隔に並ぶ。東側柱の梁行3.6mで、柱間隔は北から1.9m、1.7mを測る。南側柱列は、北から第2柱穴は検出されず、第3柱穴は調査区外の畑下に延びるため検出できなかった。

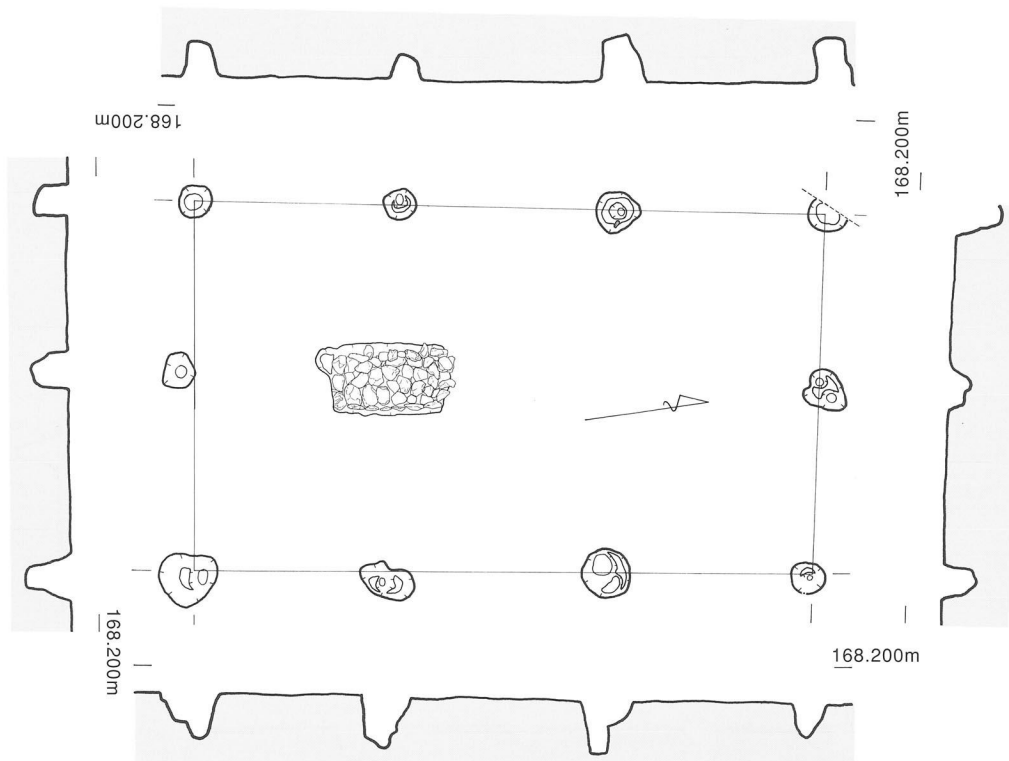
柱穴の掘形は北側柱列がそれぞれ径0.23～0.33m程度、南側柱列が径0.28～0.35m程度の円形及び楕円形を呈している。南側柱列の東から第2柱穴のみ2段堀である。柱穴の検出面からの深さは0.3m前後のものが多いが、最も深い北側柱列の東から第2柱穴は0.5mを測る。

#### 6号掘立柱建物跡 SB6 (第20図)

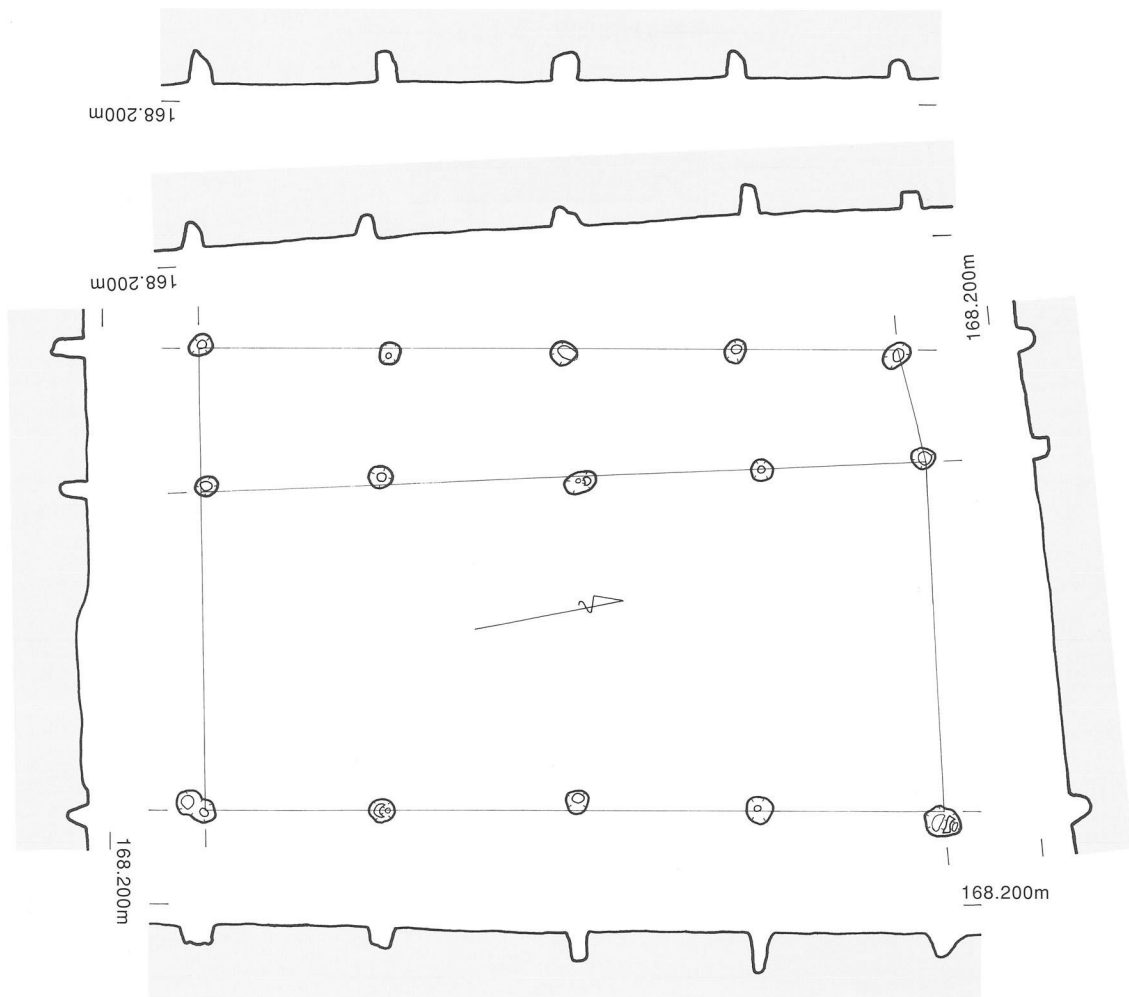
D区中央部のやや北寄りで検出された掘立柱建物跡である。3間×2間の長棟構造である。棟方位はN-14°-Eの南北棟である。規模は、東側柱の桁行5.8mで、柱間隔は北から1.8m、2m、2mを測る。西側柱の桁行5.6mで、柱間隔は北から1.9m、1.8m、1.8mで、ほぼ等間隔に並ぶ。北側柱の梁行3.4mで、柱間隔は東から1.7m、1.7mを測り、等間隔である。南側柱の梁行3.4mで、柱間隔は東から1.7m、1.7mを測り、等間隔である。

柱穴の掘形は東側柱列がそれぞれ径0.3m程度、西側柱列が径0.22～0.28m前後の円形及び楕円形を呈し、概して東側柱列の径が西側柱列の径を上回る。東側柱列の北から第2柱穴と西側柱列の第1・4柱穴は2段堀である。柱穴の検出面からの深さは0.2mに満たない浅いものが多いが、最も深い西側柱列の北から第2柱穴は0.33mを測る。





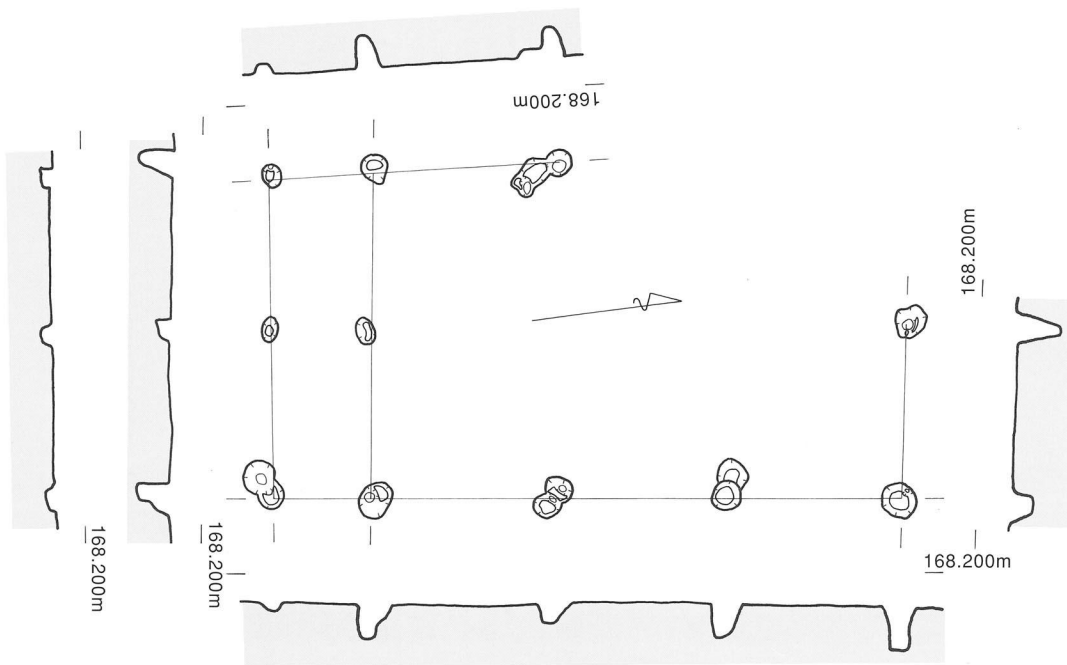
1号掘立柱建物跡 (SB1)



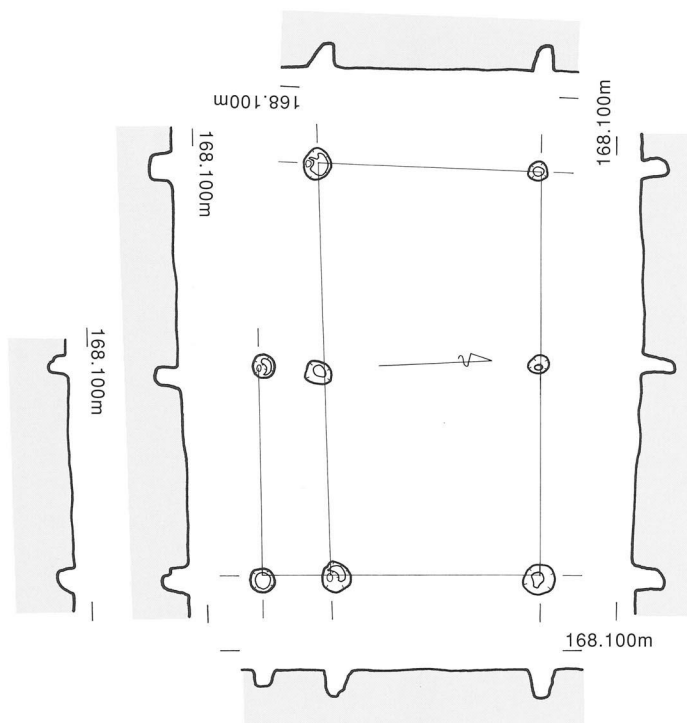
2号掘立柱建物跡 (SB2)

第18図 葦原遺跡 掘立柱建物跡実測図 (1) (1/80)





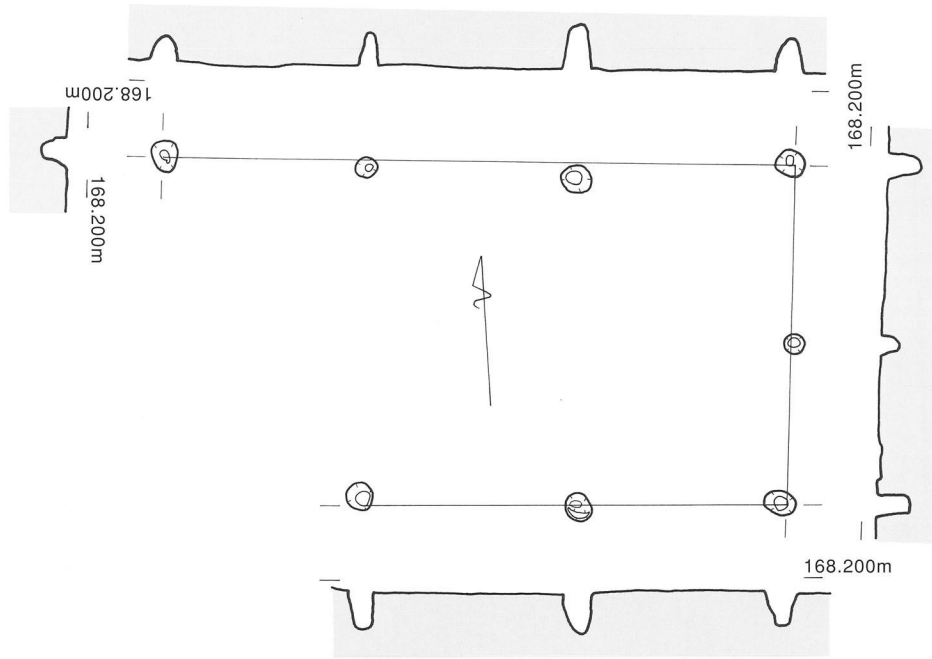
3号掘立柱建物跡 (SB3)



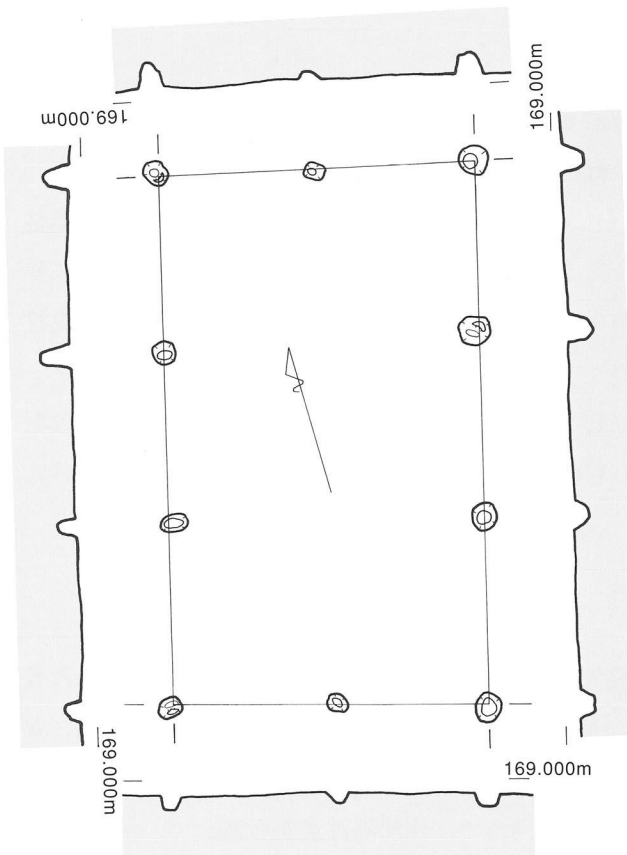
4号掘立柱建物跡 (SB4)



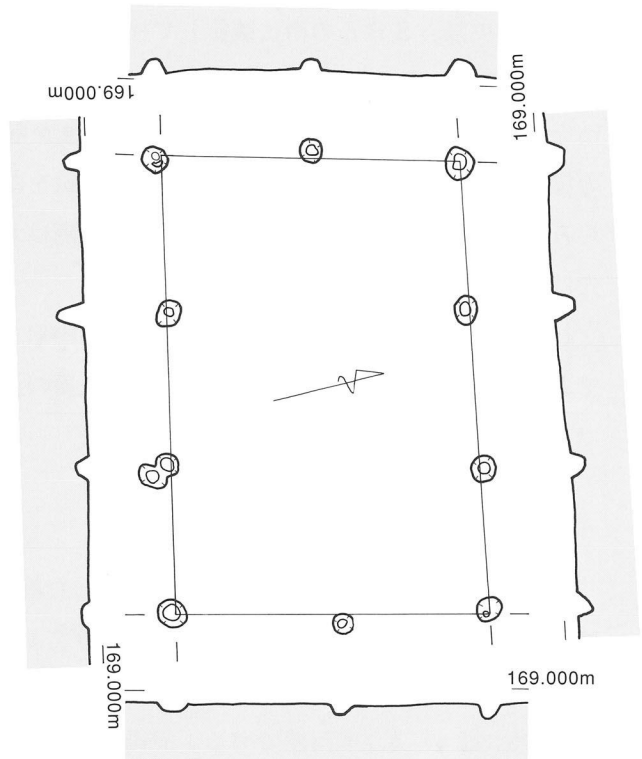
第19図 葦原遺跡 掘立柱建物跡実測図(2) (1/80)



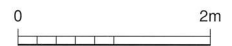
5号掘立柱建物跡 (SB5)



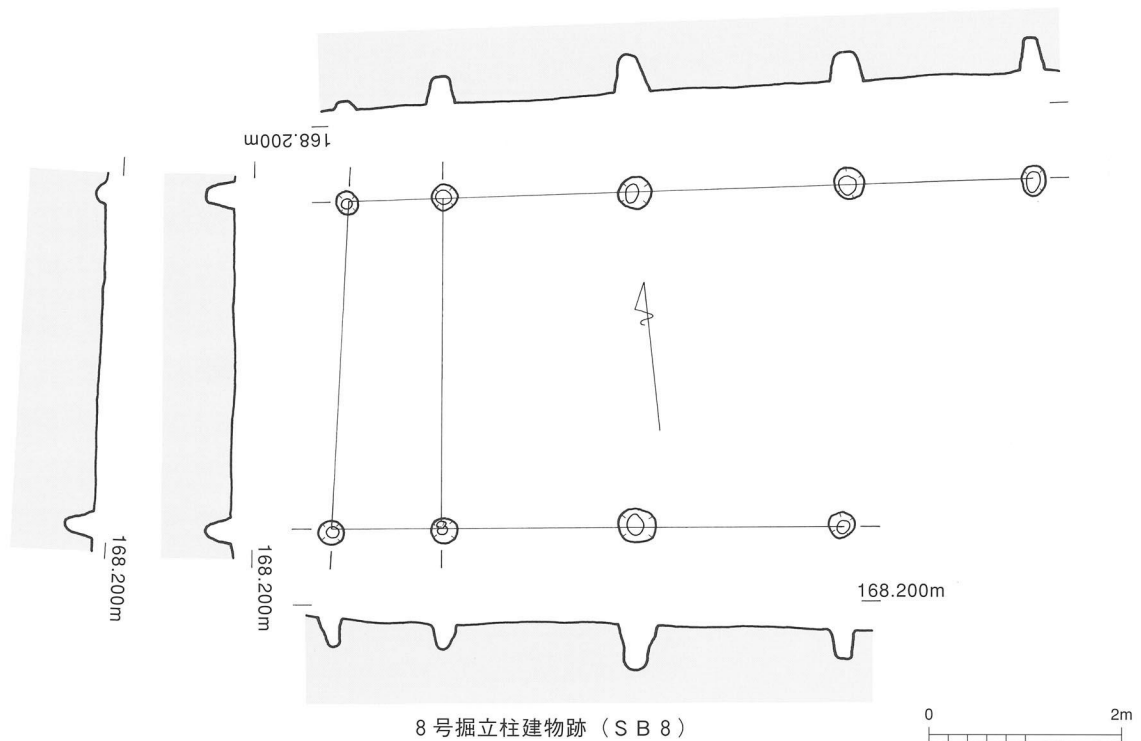
6号掘立柱建物跡 (SB6)



7号掘立柱建物跡 (SB7)



第20図 葦原遺跡 掘立柱建物跡実測図 (3) (1/80)



第21図 蓑原遺跡 掘立柱建物跡実測図(4) (1/80)

7号掘立柱建物跡 SB 7 (第20図)

D区中央部、SB 6の南に隣接して検出された掘立柱建物跡である。3間×2間の長棟構造である。棟方位はE-11°-Sの東西棟である。規模は、北側柱の桁行4.8mで、柱間隔は東から1.6m、1.7m、1.5mを測る。南側柱の桁行4.9mで、柱間隔は東から1.6m、1.6m、1.7mで、ほぼ等間隔に並ぶ。東側柱の梁行3.3mで、柱間隔は北から1.6m、1.7mを測り、ほぼ等間隔であるが、中央柱穴はやや外側に膨らみを見せる。西側柱の梁行3.2mで、柱間隔は北から1.6m、1.6mを測り、等間隔であるが、中央柱穴はやや外側に膨らみを見せる。

柱穴の掘形は、径0.3m前後の円形及び楕円形を呈している。南側柱列の西から第1柱穴のみ2段堀である。柱穴の検出面からの深さは0.2m未満の浅いものが多く、最も深い南側柱列の西から第2柱穴でも0.3mを測る程度である。

8号掘立柱建物跡 SB 8 (第21図)

D区中央部、SB 7の南に隣接して検出した掘立柱建物跡である。1間×1間の庇を西側に備えた長棟構造である。東側は調査区外の畑下に延びており、身舎の規模は確定できなかったが、桁行3間、梁行1間であると思われる。SB 9と切り合っているが、時期差は不明である。

棟方位はE-5°-Sの東西棟である。規模は、北側柱の桁行6.3mで、柱間隔は東から2m、2.3m、2mを測る。南側柱は東から第1柱穴が未検出で、第2柱穴と第3柱穴の柱間が2.2m、第3柱穴と第4柱穴の柱間が2mを測る。梁行は、西側柱列が3.5mを測る。

柱穴の掘形は北側柱列が、径0.25~0.34m前後、南側柱列が径0.25~0.4m前後の円形及び楕円形を呈している。柱穴の検出面からの深さは0.3m程度のものが多いが、最も深い北側柱列の東から第3柱

穴は0.42mを測る。

#### 9号掘立柱建物跡 SB9 (第22図)

D区中央部で検出した掘立柱建物跡で、9棟中最大規模を誇る。5間×2間の身舎に、4面庇を備えた長棟構造である。棟方位はN-2°-Eの南北棟である。規模は、西側柱の桁行9.2mで、柱間隔は北から2m、1.8m、1.9m、1.6m、1.9mを測り、ややばらつきがある。南側柱の梁行4mで、柱間隔は東から2m、1.8mを測る。

柱穴の掘形は西側柱列が、径0.32~0.52m前後、南側柱列が径0.32~0.4m前後の円形及び楕円形を呈する。西側柱列の北から第3柱穴・第5柱穴・第6柱穴、北側柱列の中央柱穴は2段掘である。柱穴の検出面からの深さは、他の掘立柱建物に比べて深く、0.6mを超えるものが多い。最も深い西側柱列の第4柱穴は0.72mを測る。

庇部分の柱穴は、やや並びにばらつきがあり、検出面からの深さは、0.4m程度のもので多く、最も深い南側庇柱列の西から第1柱穴で0.6mを測る。

#### 石組遺構 (第23図)

D区のⅦ層上面で検出され、SB1の建物内につくられるが、時期や建物との前後関係については不明である。掘形は長軸1.3m、短軸0.65m、深さ約0.45mの長方形を呈し、主軸はほぼ北を示している。なお東側の上場は芋穴の攪乱を受けており、全体の掘形を明確にすることはできなかった。

石組はまず床面に扁平な河原石を平坦に敷き詰めている。側壁の石は、1段目は、長めの扁平な石を下方向に突き刺すように据えている。2段目は、片方が細い長方形の石を多く使用し、細い方を壁にして平らな面を内側に向けている。敷石の隙間は白粘土で固められ、敷石直上には3ミリほどの炭化物が入っており、その上に赤変した粘土が極く薄く検出された。

側壁の石の隙間は黒色土が少し混じる白粘土で固められている。埋土は御池ボラを少量含む黒灰色土や粘性の非常に強い白粘土等である。

埋土中からは数は少ないものの鉄片や土師質小皿(ヘラ切り)の小片などが出土した。また南側短辺の西寄りには径20cm、深さ25cmの半月型のピットがあり、石組遺構に関連した遺構と考えられる。

#### 土坑

##### 6号土坑 SC6 (第24図)

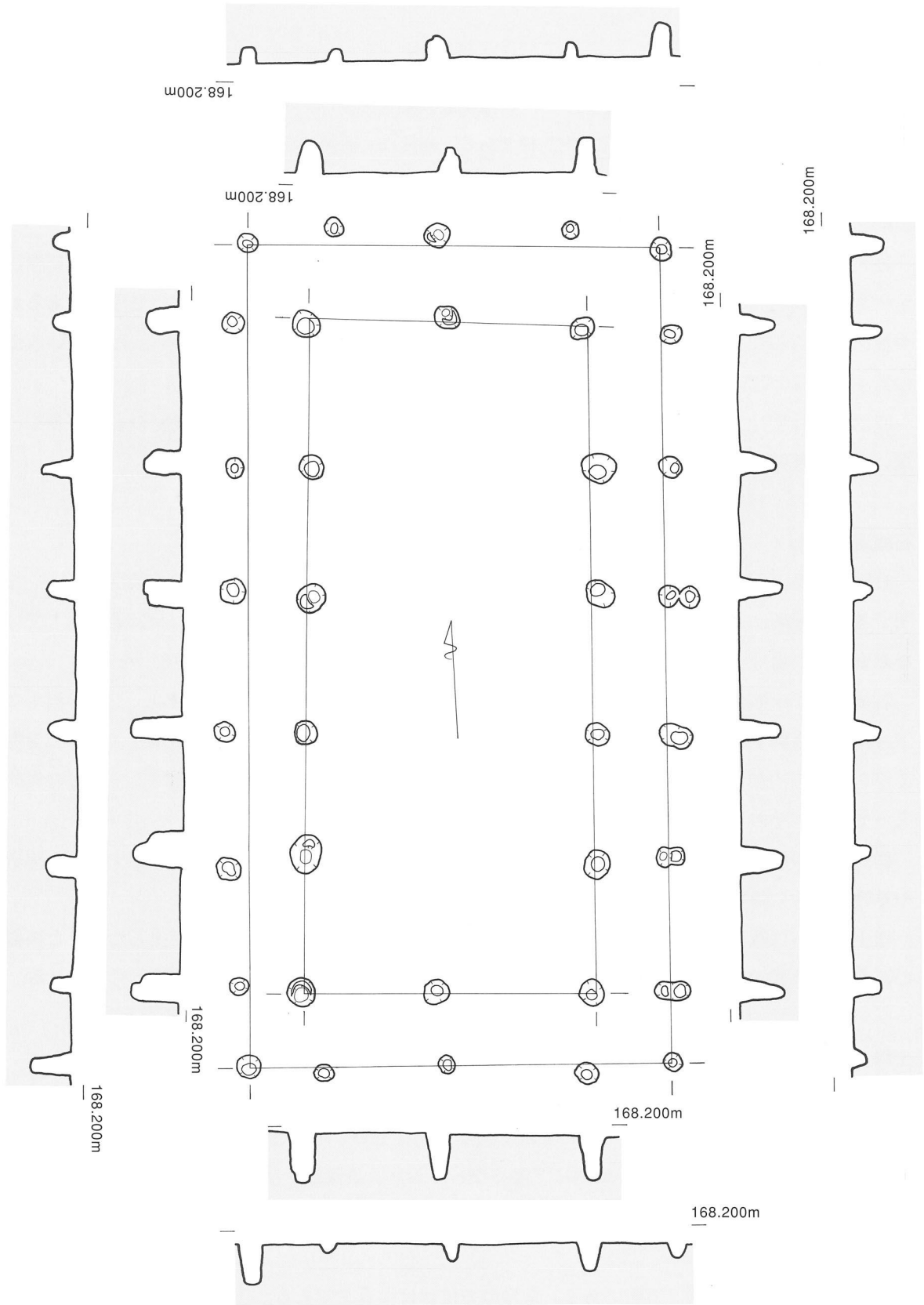
D区の中央部やや西寄りで検出した土坑である。平面形は、やや歪んでいるものの、長軸1.5m、短軸0.8mの細長い楕円形をなす。南側ほど深くなっており、最深部で検出面からの深さは0.6mを測る。土坑内の埋土は6層に分けられるが、いずれも御池ボラを含み、下層部が黒色土、上層部が暗黒褐色土である。

出土遺物はなく、時期は不明である。長軸の方位はほぼ真北である。

##### 7号土坑 SC7 (第24図)

D区の北端部西側、北に向かって急傾斜していく手前で検出した土坑である。南北長1.4m、東西長1.4m

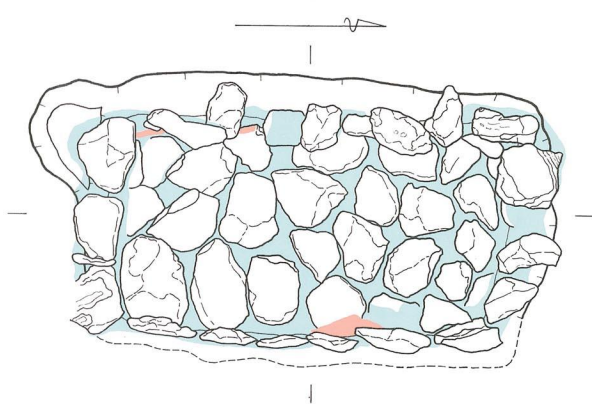




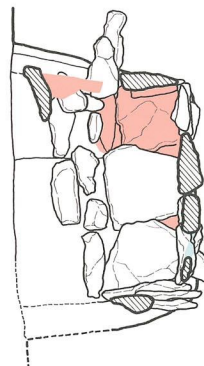
9号掘立柱建物跡 (SB9)



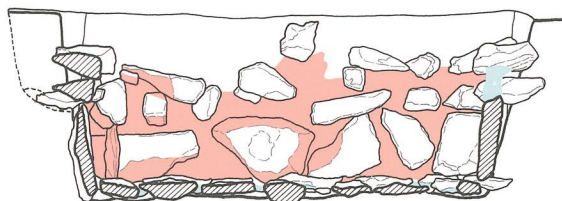
第22図 葦原遺跡 掘立柱建物跡実測図 (5) (1/80)



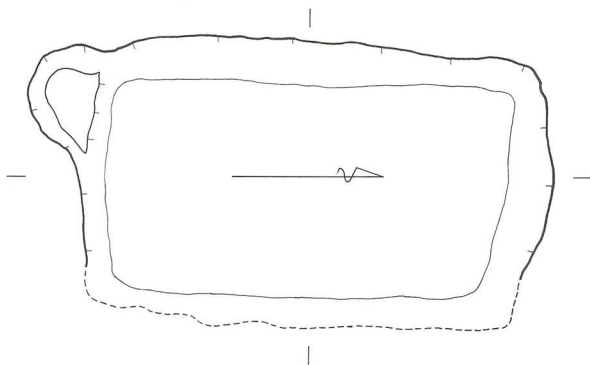
167.900m



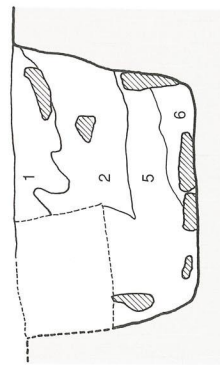
167.900m



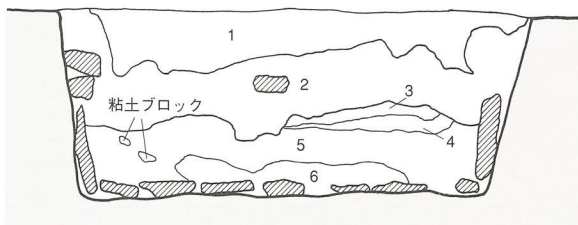
- 黒色土少混白粘土
- 赤変した粘土



167.900m



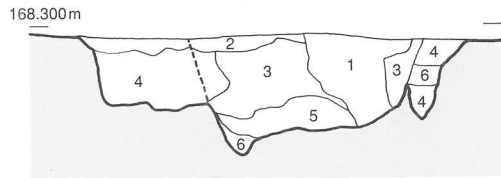
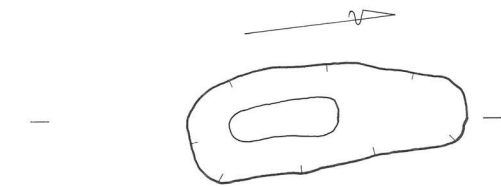
167.900m



- 1 黒灰色土 軟質。弱い粘性を帯びる。径2~5mmの御池ボラと炭化物を少量混入する。
- 2 白色粘土 灰混じりで非常に粘性を帯びる。
- 3 黒灰色土 第1層と似ており、御池ボラを少量混入する。
- 4 明黄褐色土 御池ボラ2次堆積層。
- 5 黒色土 軟質。第1層よりやや強い粘性を帯びる。御池ボラを極少量混入する。
- 6 白色粘土 第2層と同じ。

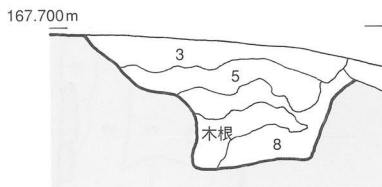
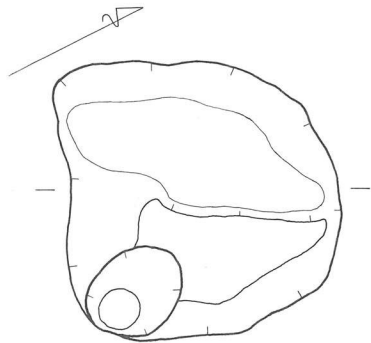


第23図 葦原遺跡 石組遺構実測図 (1 / 20)

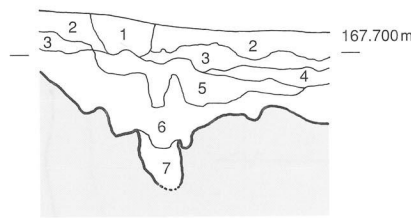
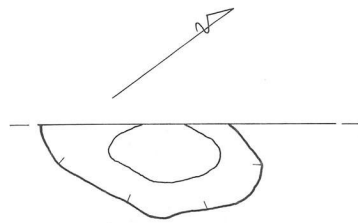


6号土坑 (SC 6)

- 1 明暗褐色土 砂質。御池ボラを混入する。軟。
- 2 暗黒褐色土 御池ボラ (3層より若干多量) を混入する。
- 3 暗黒褐色土 砂質。御池ボラを混入する。軟。
- 4 黒色土 御池ボラを混入する。やや軟。
- 5 黒色土 シルト質。径2~8mmの御池ボラをまばらに含む。やや硬。
- 6 黒色土 御池ボラがほぼ同じ割合で混入する。軟。



7号土坑 (SC 7)



8号土坑 (SC 8)

- 1 黒色土 白ボラを多量に含む。
- 2 淡黄色軽石 白ボラ濃集層。
- 3 黒色土 細粒で御池ボラを散点的に含む。ややし  
まりあり。
- 4 暗黒褐色土 御池ボラを多量に含  
む。バサバサして水  
気が少ない。
- 5 黒褐色土 御池ボラを少量に含  
む。やや軟。
- 6 暗茶褐色土 御池ボラを多量に含  
む。しまりがなく非  
常にもろい。
- 7 茶褐色土 御池ボラをかなり多  
量に含む。非常に硬  
くしまりがある。
- 8 明黄褐色軽石 5層の褐色土を若干  
まだらに含む。



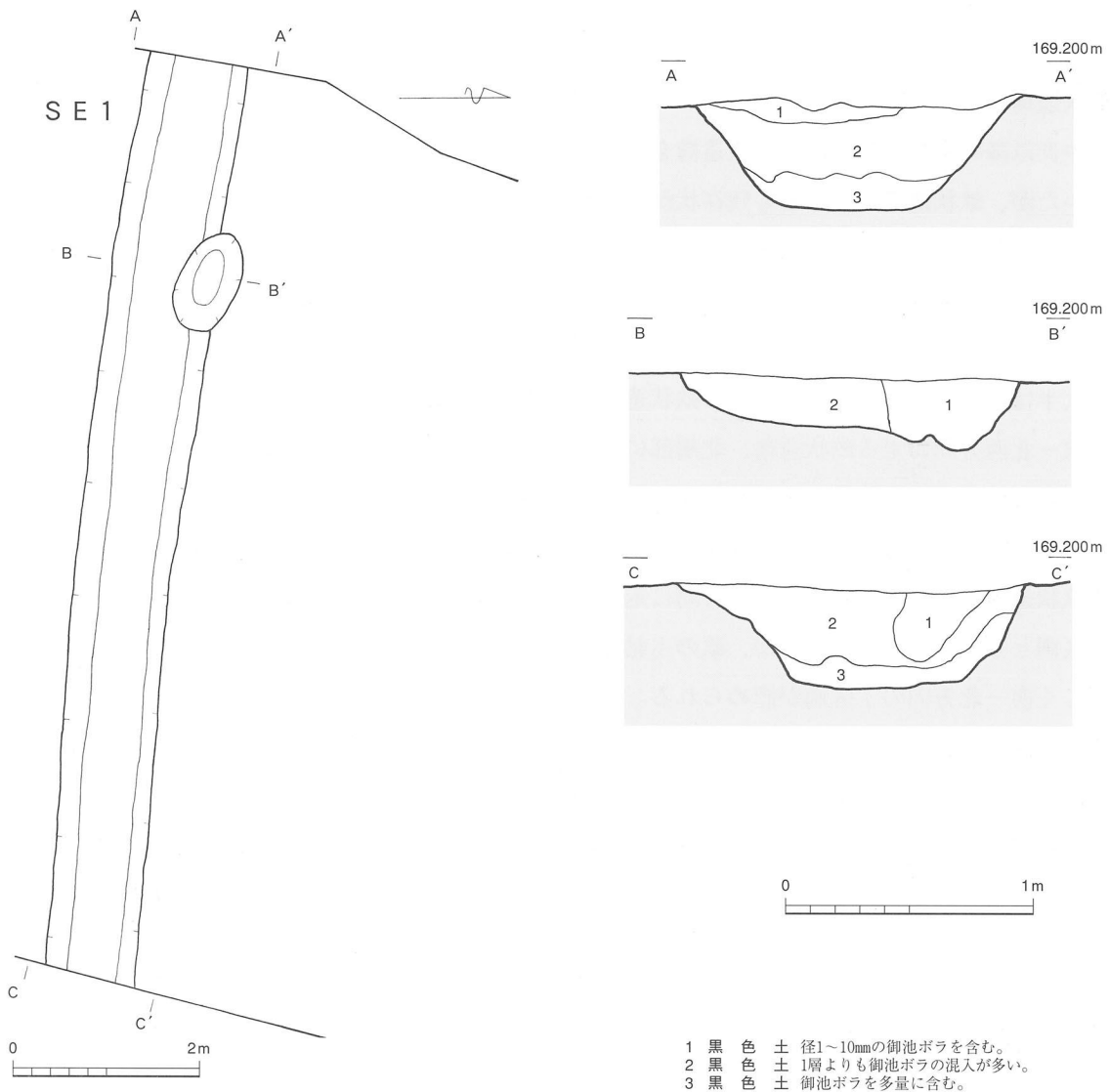
第24図 D区土坑実測図 (1/40)

の不整形の土坑である。西側半分が深くなっており、検出面からの深さは0.7mを測る。

土坑内の埋土は3層に分けられ、底面から黒褐色土をまだらに含む明黄褐色土層、御池ボラを少量含む黒褐色土層、御池ボラを散点的に含む黒色土層の順に堆積しているが一部木根により攪乱されている。

#### 8号土坑 SC 8 (第24図)

D区の北端部西側、SC 7の西に隣接して検出した楕円形の土坑である。土坑の西側3分の1は調査区外に延びるため検出できなかった。長軸1.2m、短軸推定0.7mを測る。中央部が深くなっており、検出面からの深さは最深部で0.6mを測る。埋土は3層に分けられ、下層から御池ボラを多量に含む茶褐色土層、御池ボラを多量に含む暗茶褐色土層、御池ボラを少量含む黒褐色土層の順に堆積している。



第25図 蓑原遺跡 1号溝状遺構実測図（1/80）及び土層断面実測図（1/30）

### 溝状遺構

#### 1号溝状遺構 SE 1（第25図）

D区の南端部、C区との境で検出した溝状遺構である。調査区を東西に横断している。西から東に向かって傾斜し、中央部から東に向かっては平坦になる。流水の痕跡は検出できなかった。

幅1m前後、深さ0.4m前後を測る。埋土は御池ボラを混入する黒色土で下層ほど御池ボラの割合が多くなっている。埋土中からの遺物はなく、時期や性格については不明である。

#### 2号溝状遺構 SE 2（第17図）

D区の北端部東側、SB 4の北東3.5mのところ検出した溝状遺構である。南北方向に円弧状に走る。耕作等による攪乱のため、遺構上部が飛ばされており、検出面からの深さは10~15cm程度しかなかった。南北の端部はさらに浅くなり遺構検出ができない状態であった。埋土は、御池ボラを少し含む黒色土で、

ややしまりがある。陶器片・土器片が出土したが、時期や性格については不明である。

## 畝状遺構（第26図）

中世以降の畝跡と思われる畝状遺構をⅡ層（白ボラ）上面で検出した。白ボラは調査区全体に分布していたが、畝状遺構として最も残存状況がよく、明瞭なラインが見えたのはD区北端部であった。平面的に平行して走る白ボラが残る部分が畝の基底部で、その間の白ボラを混入する黒色土を畝間として捉えた。畑地に降灰した白ボラを掘り上げて畝を作ったため、畝間は白ボラを混入する黒色土となったものと思われる。

大半は南―北方向に平行して走る畝状遺構であるが、南東部に南南東―北北西方向に走る畝状遺構と南東―北西方向に走る畝状遺構、北端部に東―西方向に走る畝状遺構と南東―北西方向に走る畝状遺構が認められる。畝状遺構の溝の長さは2.5m前後、溝幅は0.2～0.4mを測る。

南―北方向に走る畝状遺構は等高線に交わる方向で畝が作られている。南東部の南東―北西方向に走る畝状遺構と北端部の南東―北西方向に走る畝状遺構は、等高線に平行する方向で畝が作られている。

区画としては明瞭ではないが、畝の主軸方向から考えると、南西部に南―北方向の1区画、北東部に同じく南―北方向の1区画が認められる。南東部には部分的ながら南南東―北北西方向と南東―北西方向の2区画が、北端部の急傾斜の始まり部分に東―西方向の1区画、それに切られる形でわずかではあるが南東―北西方向の1区画が認められる。

植物珪酸体分析では、イネとオオムギが検出されており、稲作が行われていた可能性やムギ類が栽培されていた可能性が高い。

## 2 出土遺物（第27・28・29図）

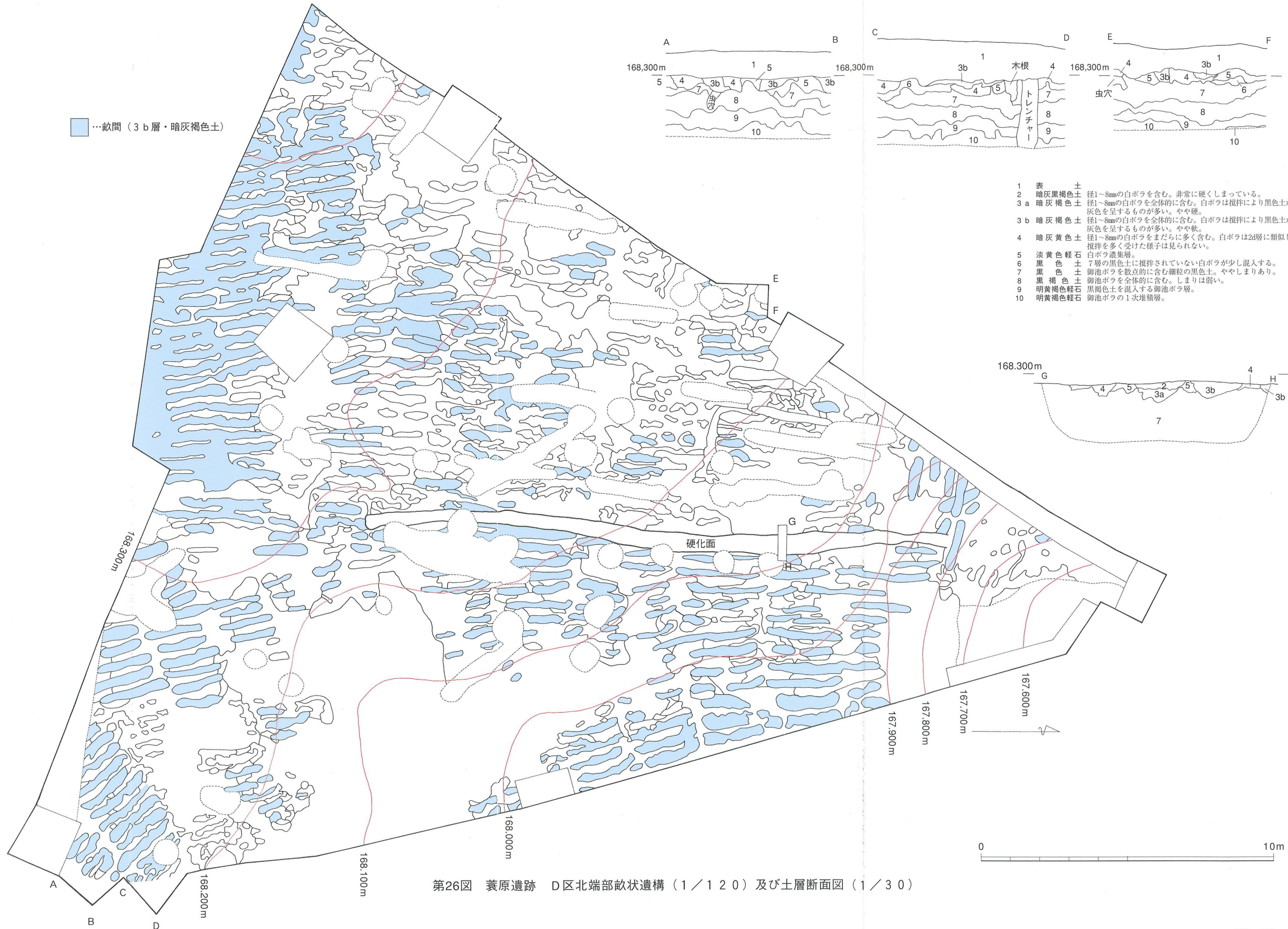
遺物の出土は、大半がⅢ・Ⅳ層からである。遺構からの出土は、掘立柱建物跡の柱穴から土師器・青磁・陶器、2号溝状遺構から陶器・土師器がわずかに見られただけで、多くは遺構外の出土遺物である。遺物は、縄文土器や弥生土器、土師器等で、陶磁器片も数点見られた。

### 縄文土器

68～70は深鉢である。68は胴部が膨らみ口縁部が外反する。外面はヘラミガキ、内面はナデ調整であるが、上部に板状工具痕が見られる。69は口縁部で平坦な口唇部を持つ。内外面ともナデ調整である。70はやや外反する口縁部で平坦な口唇部を持つ。71は口縁部であるが器種は特定できない。段が巡る。

72～76は浅鉢である。72は口縁部が短く外反する。玉縁状を呈し、外面に沈線が巡る。胴部上半に最大径を持つ器形になると思われる。73は頸部から胴部である。器壁は薄く、内外面ともヘラミガキが施され、穿孔がある。74は胴部で外面にスタレ状の組織痕が見られる。75は胴部である。外面は粗いナデで、内面は炭化物が付着し、ヘラミガキが施されている。76は胴部である。外面はナデ、内面はヘラミガキが施されている。





…畝間 (3b層・暗灰褐色土)

- 1 表 土
- 2 暗灰黒褐色土 径1~8mmの白ボラを含む。非常に硬くしまっている。
- 3 a 暗灰褐色土 径1~8mmの白ボラを全体的に含む。白ボラは攪拌により黒色土が附着し、灰色を呈するものが多い。やや硬。
- 3 b 暗灰褐色土 径1~8mmの白ボラを全体的に含む。白ボラは攪拌により黒色土が附着し、灰色を呈するものが多い。やや軟。
- 4 暗灰黄色土 径1~8mmの白ボラをまだらに多く含む。白ボラは2d層に類似しており、攪拌を多く受けた様子は見られない。
- 5 淡黄色軽石 白ボラ濃集層。
- 6 黒色土 7層の黒色土に攪拌されていない白ボラが少し混入する。
- 7 黒色土 御池ボラを散点的に含む細粒の黒色土。ややしまりあり。
- 8 黒褐色土 御池ボラを全体的に含む。しまりは弱い。
- 9 明黄褐色軽石 黒褐色土を混入する御池ボラ層。
- 10 明黄褐色軽石 御池ボラの1次堆積層。

第26図 葦原遺跡 D区北端部畝状遺構 (1/120) 及び土層断面図 (1/30)

## 弥生土器

77は壺の口縁部である。口縁端部に台形状の突帯を持ち、断面逆L字状の口縁を呈する。上面がやや丸く外傾し口唇部が凹む。78は甕の底部である。やや厚手で上げ底を呈する。底部にくびれを持ち、若干底部裾が外方に開き気味になっている。79は高台付壙の坏部であると思われる。外面は丹塗りである。

## 土師器

80は鉢の胴部から底部付近である。81は胴部で、外面は叩きが施されている。82は壺の胴部である。

83は皿の口縁部から底部で糸切り底である。1号掘立柱建物跡の柱穴から出土している。84は皿の底部で糸切り底である。85は小皿の口縁部から底部で底に板状工具痕？が見られる。86は坏の体部から底部でヘラ切り底である。

## 須恵器

87～89はこね鉢の口縁部である。いずれも口縁部はやや内湾し、端部は肥厚する。88は口唇部に自然釉が見られる。89は口縁部の片口部分である。

## 陶器・青磁

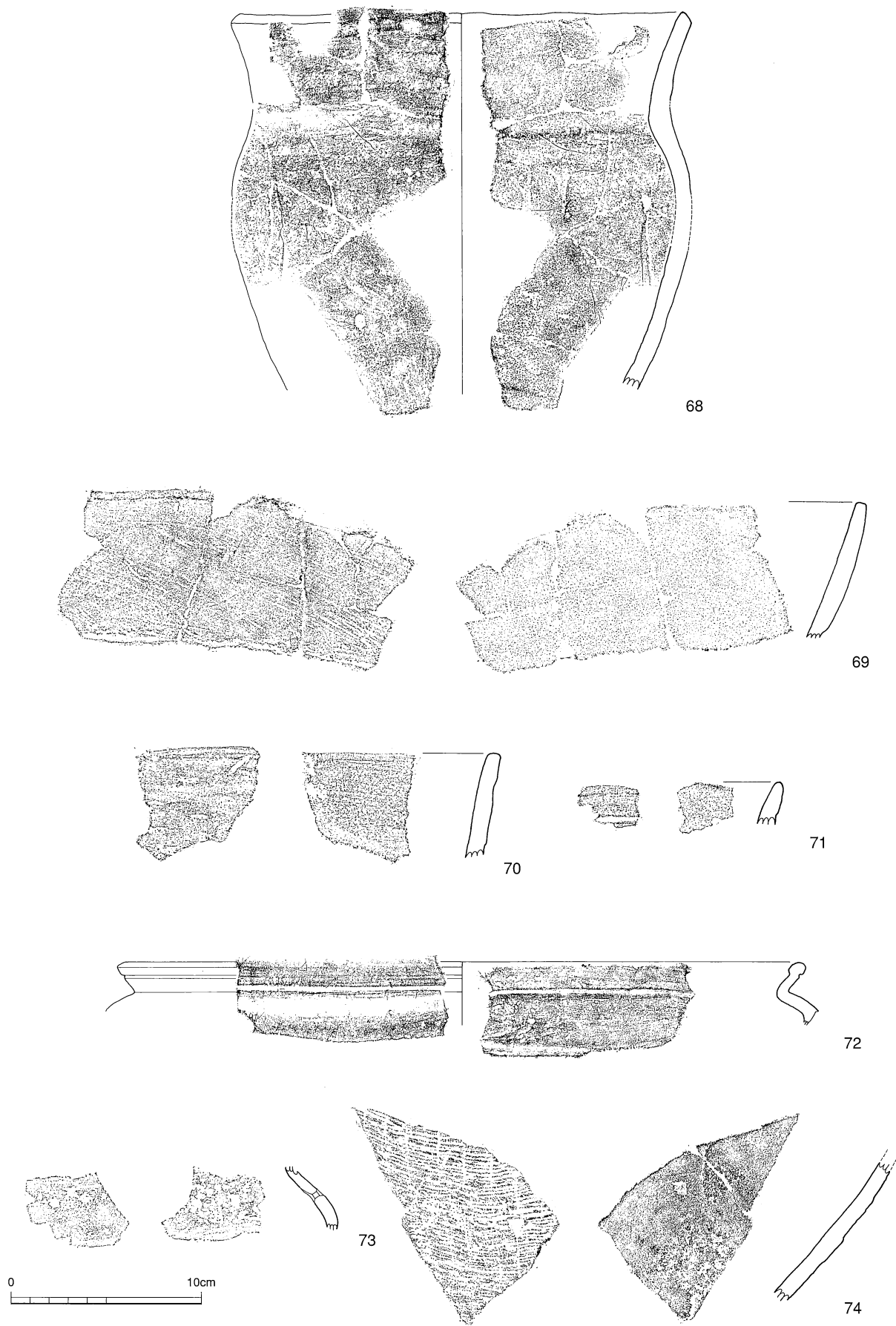
90・91は龍泉窯系の青磁碗である。90は口縁部で内面は無文であるが、外面は口縁部直下に浅い沈線が巡る。91は口縁部から体部である。外面に鎬蓮弁文を削り出している。4号掘立柱建物跡の柱穴より出土した。

92・93は陶器である。92は口縁部で外反する。仏花器と思われる。93は甕の胴部で、外面は斜方向の平行叩き、内面は同心円叩きが施されている。

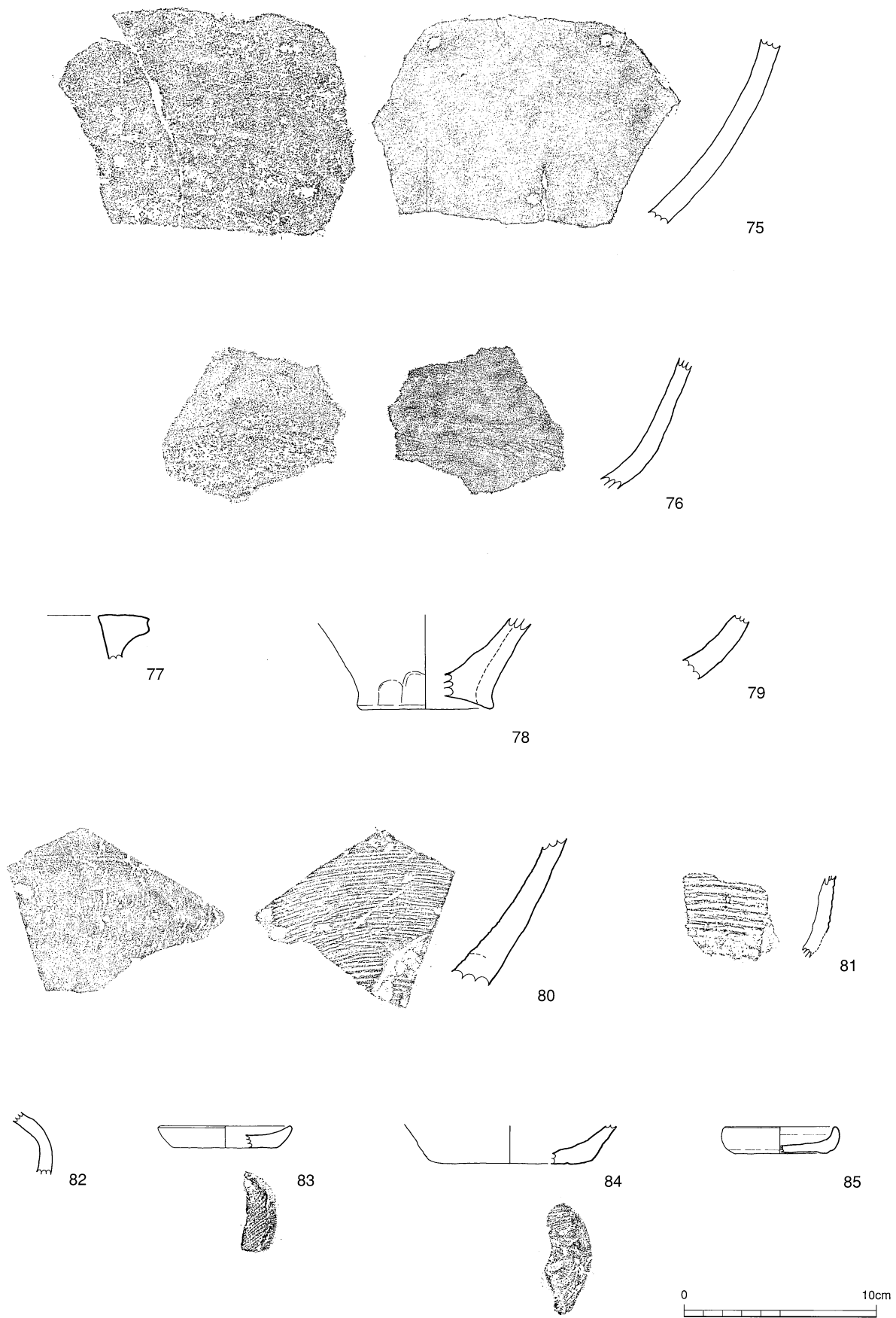
## 石器

94は打製石斧である。利用石材は頁岩である。最大長8.2cm、最大幅6cm、最大厚1.8cm、重量107.5gである。95は磨製石鏃で凹基鏃である。利用石材は頁岩である。着柄のためと思われる溝が両面に見られる。最大長3.7cm、最大幅2.2cm、最大厚0.4cm、重量3.4gである。

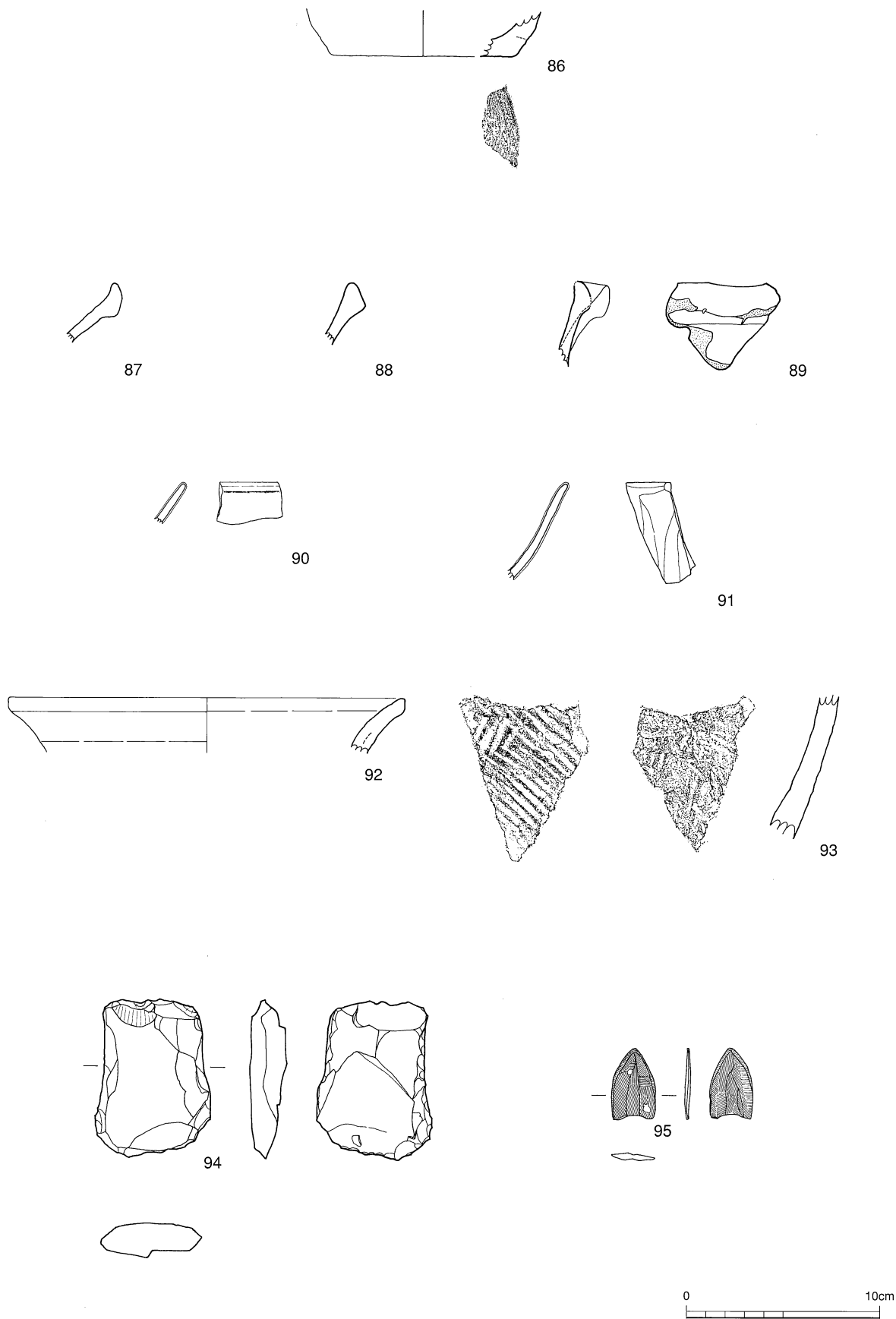




第27図 蓑原遺跡 D区出土遺物実測図(1) (1/3)



第28图 蓑原遺跡 D区出土遺物実測図(2) (1/3)



第29图 蓑原遺跡 D区出土遺物実測図(3) (1/3)

第1表 袁原遺跡出土土器観察表(1)

遺物番号	種別	器種部位	出土地点	法量 (cm)			手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
1	土師器	甕 口縁~底部	B区 SA 1	25.2	7.9	25.6	横ナデ、工具ナデ後粗いナデ 貼付突帯、スス付着、指頭痕	丁寧な横ナデ、黒色物付着	黒褐、灰褐 にぶい赤褐	にぶい赤褐 灰黄褐	3mm以下の褐・にぶい黄褐色の粒を含む。 1mm以下の透明光沢粒を少し含む。	成川式?
2	土師器	鉢 胴下位~底部	B区 SA 1		6.4		斜方向の指ナデ、頭指痕	斜方向のナデ	にぶい赤褐	にぶい橙	5mm以下の茶褐色の粒を多く含む。 2mm以下のガラス状の鉱物粒を少し含む。	
3	土師器	碗 口縁~胴部	B区 SA 1	16.5			ヘラミガキ、指頭痕、風化著しい	ミガキ、黒斑、風化著しい	浅黄橙 橙	浅黄橙	1mm以下の灰白色粒を少し含む。 きめ細か	
4	土師器	碗 口縁~胴部	B区 SA 1				横方向、やや斜方向のヘラミガキ	横方向、斜方向のヘラミガキ	にぶい褐	灰褐	きめ細か	
5	土師器	甕 胴~底部近	B区 SA 2				横ナデ、縦方向、斜方向のナデ 貼付突帯、指頭痕	横ナデ、斜方向のナデ、 横方向の工具痕	橙 にぶい橙	橙	2~7mmの茶褐色粒、3mm以下の灰白色粒 を少し含む。きめ細か	6と同一 個体
6	土師器	甕 口縁	B区 SA 2				横ナデ	横ナデ	橙	橙	2mm以下の茶褐色粒を少し含む。	5と同一 個体
7	土師器	甕 底部	B区 SA 2	9.25			ナデ、指頭痕	ナデ、指頭痕	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2mm以下の褐色粒、1mm以下の灰白色粒、 2.5mm以下の赤褐色粒を含む。	
8	土師器	壺 口縁~胴部	B区 SA 2				横ナデ後ヘラミガキ、スス付着	横ナデ、指頭痕、指ナデ後ナデ 薄く黒変	灰黄褐 黒	にぶい褐 褐灰	2mm以下の浅黄色粒、灰白色粒、0.5mm 以下の無色透明光沢粒を多く含む。	
9	土師器	壺 胴部	B区 SA 2				ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	5.5mm以下の茶褐色粒、2.5mm以下の灰 褐色粒、灰白色粒を含む。	
10	土師器	碗 口縁~底部	B区 SA 2	15.45	5.12		ケズリ風ナデ	ナデ、横方向のヘラミガキ、黒変	明赤褐	明赤褐 黒	3mm程の褐色粒、無色透明光沢微細粒を 含む。	
11	土師器	碗 口縁~底部	B区 SA 2	11.6	4.6		風化著しい		明黄褐	明黄褐	1mmの乳白色の粒を多く含む。 1mm以下の浅黄色粒を含む。	
12	土師器	碗 口縁~底部近	B区 SA 2	15.5			横ナデ	横ナデの後ヘラミガキ? 風化著しい	にぶい褐	にぶい褐 にぶい橙	きめ細かな光沢微細粒を含む。	
13	土師器	高台付坏 底部	B区 SA 2				丹塗	丹塗	橙	にぶい橙 灰黄	1mm以下の明褐色粒を少し含む。	
14	土師器	甕 口縁	B区 SA 3	17.3			ナデ	斜方向の工具痕、指頭痕、ナデ	にぶい橙	にぶい橙	2mm以下の褐色粒・灰色粒・黒色粒・無 色透明光沢粒を少し含む。	穿孔
15	土師器	壺 口縁	B区 表土				横方向の粗いナデ	横ナデ	にぶい黄橙 褐灰	にぶい黄橙 褐灰	2mm以下の黄灰色・褐色・灰色粒を多く 含む。	16と同一 個体
16	土師器	壺 胴部	B区 SA 3				ミガキ後ナデ、横方向の粗いミガキ 黒変	ナデ、横・斜方向の工具ナデ後ナデ	にぶい黄橙 黒褐	灰黄褐、黒褐 にぶい黄橙	3mm以下の黒色・褐色・灰色粒を多く含 む。	15と同一 個体
17	土師器	甕 口縁付近	B区 SA 3				貼付突帯、スス付着	ナデ	にぶい橙 黒褐	にぶい橙	1mm以下の灰白・褐色粒を含む。	穿孔
18	土師器	坏 口縁~底部	B区 SA 3	12.8			ミガキ、風化著しい	ミガキ	明赤褐	明赤褐	きめ細か	
19	土師器	坏 口縁~体部	B区 SA 3	11.4			横ナデ、ナデ後ミガキ	ミガキ	橙	橙	1mm以下の灰白色・褐色粒を含む。	
20	土師器	高坏 脚部	B区 SA 3				ミガキ後縦方向のケズリ風ナデ 風化著しい	ナデ	灰黄褐 にぶい黄橙	にぶい黄橙	きめ細か	
21	土師器	高台付碗 裾部	B区 SA 3				丹塗	ナデ	灰褐	にぶい黄橙	1mm以下の無色透明光沢粒・乳白色粒を 含む。	
22	須恵器	短頸壺	B区 SA 3	7.6	7.65		横ナデ、ヘラケズリ	横ナデ、回転による横ナデ	灰	灰	精良	
23	須恵器	身	B区 SA 3	9.95	2.75		回転ナデ後粗な調整 ヘラ切り後粗な調整	回転ナデ、指オサエ後ナデ	灰	灰	精良	
24	須恵器	甕 胴体	B区 SA 3				格子目タタキ後ナデ	同心円タタキ	灰	灰	精良	
25	土師器	甕 口縁~底部	B区 SA 3	25.9	7.5	25.4	横ナデ、指ナデ、指オサエ後ナデ スス付着、貼付突帯	横ナデ、縦方向・斜方向のナデ 指頭痕、黒変	灰褐、黒 にぶい赤褐	灰黄褐 黒褐	1mm以下の無色透明光沢粒を多く含む。1mm以下の浅黄 色粒・灰色粒を含む。9.5mm大の赤褐色粒を1個含む。	
26	土師器	甕 口縁~胴部	B区 SA 3	26.1			横ナデ、斜方向のナデ、三角貼付突 帯、ケズリ後斜方向のナデ	横方向の工具ナデ、ナデ	灰褐 にぶい赤褐	明赤褐	5mm以下の茶褐色粒、2mm以下の灰白色粒を多く含む。 2mm以下のガラス状に光る鉱物粒(石英)を少し含む。	
27	縄文土器	深鉢 口縁	B区 IV層				横ナデ、貼付突帯	丁寧な横ナデもしくはミガキ 若干光沢あり	黒褐	にぶい橙	2mm以下の乳白色・透明な粒を含む。	
28	縄文土器	深鉢 口縁	B区 IV層				横ナデ 貼付突帯	横ナデもしくはミガキ 若干光沢あり	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1.5mm以下の透明・乳白色・黒などの粒 を含む。	
29	縄文土器	深鉢 口縁	B区 IV層				横ナデ、煤付着 貼付突帯	横ナデ	橙	にぶい黄橙	2mm以下の黄灰・浅黄の粒を含む。	

第2表 蓑原遺跡出土土器観察表(2)

遺物 番号	種 別	器種 部位	出土 地点	法量 (cm)			手法・調整・文様ほか		色 調		胎 土 の 特 徴	備 考
				口径	底径	器高	外 面	内 面	外面	内面		
30	縄文 土器	深鉢 口縁	B区 IV層				横ナデ、貼付突帯 わずかにスス付着	横ナデ	灰褐	灰黄褐	1mm以下の灰白色粒、無色透明光沢粒、 黒色光沢粒を含む。	
31	縄文 土器	深鉢 口縁	B区 IV層				横ナデ、スス付着	横ナデ	にぶい 橙	にぶい 黄褐	2mm以下の灰白・灰色・透明光沢粒を少 し含む。	
32	縄文 土器	深鉢 口縁	B区 IV層				横方向の条痕の上を斜め、または 横方向のナデ、指押さえ、スス付着	横方向へのヘラミガキ	灰黄 黒灰・黒	にぶい 橙	1mmくらいの無色透明光沢粒、黄灰色粒 を多量に含む。	口唇部に鼠 の嚙り痕
33	縄文 土器	深鉢 底部	B区 IV層		11.35		粗い横ナデ、薄くスス付着	ナデ、部分的に炭化物付着 風化著しい	にぶい 褐	灰黄褐	1mm位の灰色粒少量、1mm位の無色透明光沢粒 を多く含む。1mm以下の浅黄色粒を含む。	平底
34	縄文 土器	浅鉢 口縁~肩部	B区 IV層				横方向へのヘラミガキ	横方向へのヘラミガキ、 沈線	灰黄橙	にぶい 黄橙	0.5mm以下の灰白の粒を含む。	2列のヒレ 状突起
35	縄文 土器	浅鉢 口縁~頸部	B区 IV層				横方向へのヘラミガキ	横方向へのヘラミガキ	にぶい 橙	にぶい 黄橙	きめ細か	ヒレ状 突起
36	縄文 土器	浅鉢 口縁	B区 IV層				横方向へのヘラミガキ、 沈線	横方向へのヘラミガキ	灰黄褐	灰黄褐	0.5mm以下の無色透明光沢粒を含む。	
37	縄文 土器	浅鉢 頸部~胴部	B区 IV層				横方向へのヘラミガキ	横方向へのヘラミガキ	褐灰	褐灰	1mm程度の灰白色粒、0.5mm以下の無色 透明光沢粒を含む。	
38	縄文 土器	浅鉢 胴部	B区 IV層				横ナデ、スス付着、 貼付突帯?	横ナデ	にぶい 赤褐	灰黄褐 にぶい褐	2mm以下の灰白・褐色及び黒色光沢粒を 多く含む。	
39	縄文 土器	浅鉢 胴部	B区 IV層				横ナデ	横ナデ	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	4mm以下の褐色の粒。2mm以下の灰白・ 褐色の粒を少し含む。	
40	弥生 土器	甕 胴中~胴下	B区 IV層				横ナデ、刻み目貼付突帯、 黒変	指頭痕、丁寧なナデ	黒褐	黒褐	1~2mmの金色に光る粒を含む。 1mm以下の透明乳白色の粒を含む。	下城式
41	弥生 土器	甕 胴部	B区 IV層				横ナデ、刻み目貼付突帯、		にぶい黄褐 黒褐	にぶい黄褐 黒褐	1mm以下の灰白・灰黄色の粒を含む。	下城式
42	弥生 土器	壺 頸部~胴部	B区 IV層				ミガキ後ナデ、沈線	ナデ、ミガキ後ナデ	にぶい橙 にぶい黄褐	にぶい黄褐 黒褐	7mmの褐色の粒を含む。 4mm以下の褐色・灰色の粒を多く含む。	下城式
43	弥生 土器	甕 底部	B区 IV層		7.25		縦方向のハケ目	ナデ、工具痕(ハケ先端?)、 黒変	にぶい橙 灰黄褐	黒褐	2mm以下の灰白・白色粒、1mm以下の無色 透明光沢粒を多く含む。	
44	土師 器	甕 胴部下~底部	B区 IV層		5.5		風化著しい、ナデ?	ナデ、ヘラ状工具による ナデ	灰黄	灰黄	1mm以下の乳白色・黒色・灰白色・暗褐 色・灰色の粒を多く含む。	
45	土師 器	甕 底部	B区 表土				ナデ	ミガキ	橙	橙	きめ細か	
46	土師 器	壺 底部	B区 IV層				丁寧なナデ、風化	工具突刺痕、剥離	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	1mm以下の透明・黒色・褐色の粒を多く 含む。	丸底
47	土師 器	高坏 脚~裾部	B区 IV層		7.8		横ナデ、縦方向のナデ		橙	明赤褐	1~2mmの黄色粒、1mmの褐色粒を少し含 む。	
48	土師 器	高坏 脚	B区 表土				ハケ目、棒状工具痕	ナデ	にぶい 橙	にぶい 黄橙	1mm程度の黒色・灰色粒を含む。	
49		紡錘車	B区 III層	4.4	0.95		丁寧なナデ		にぶい黄褐 黒褐	にぶい褐 灰黄褐	0.5mm~1mmの黄色粒を含む。 きめ細かい	穿孔
50	須恵 器	蓋	B区 II層	9.3	2.45		ヘラケズリ、ナデ	ナデ	黄灰	黄灰	0.5mm以下の黄色粒を含む。	
51	須恵 器	壺 頸部~肩部	B区 IV層				平行タタキ	あて具痕(放射状?)	灰	灰	精良	
52	青磁	碗 胴部~底部付近	B区 IV層				施釉	施釉	灰白	灰黄	精良	
53	青磁	碗 胴部	B区 トレンチ				施釉	施釉	灰白	暗オリブ	精良	
54	青磁	碗 胴部	B区 トレンチ				施釉、貫入あり	施釉、貫入あり	灰白	灰黄	精良	
58	縄文 土器	深鉢 胴部	C区 IV層				条痕の上を横ナデ	条痕の上を横ナデ	黒褐 にぶい赤褐	にぶい 橙	3mm以下の褐色の粒を少し含む。	
59	弥生 土器	壺 口縁	C区 SC2				横ナデ	横ナデ	にぶい橙	にぶい橙	2mm以下の乳白色、金色に光る粒を含む。	60と同 一物体
60	弥生 土器	壺 肩部	C区 SC2				横ナデ、貼付突帯	横ナデ	にぶい橙	にぶい橙	2mm以下の乳白色・白色・金色に光る粒 を含む。	59と同 一物体

第3表 袁原遺跡出土土器観察表(3)

遺物番号	種別	器種部位	出土地点	法量 (cm)			手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
61	弥生土器	壺口縁	C区 IV層	10.9			横ナデ、斜方向のナデ	斜方向のナデ	橙	橙	0.5~2mmの灰色・赤褐色・灰白色の粒、0.5mmの黄色粒、1mmの黒色光沢粒を含む。	
62	弥生土器	甕胴部	C区 IV層				横ナデ、斜方向のナデ、貼付突帯	横ナデ	黒褐	にぶい褐	0.5~2mmの黄褐色・金色の粒を多く含む。	
63	弥生土器	甕胴部	C区 IV層				丁寧な横ナデ、貼付突帯、スス付着	剥離	黒褐		0.5~2mmの黄褐色・金色・褐色の粒を多く含む。	
64	土師器	埴口縁	C区 SC1	11.5			ミガキ	ミガキ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	きめ細か	
68	縄文土器	深鉢口縁~胴部	D区 IV層				横または斜方向の粗いヘラミガキスス付着	丁寧な横ナデ、板状工具痕	黒褐	黒褐	3.5mm以下の褐色粒、1.5mm以下の浅黄色粒	後期三万田式?
69	縄文土器	深鉢口縁	D区 IV層				斜方向の粗い条痕の上をナデ	横ナデ	黒褐	褐	2mm以下の灰白・にぶい黄褐色の粒、1mm以下の透明光沢粒を多く含む。	
70	縄文土器	深鉢口縁	D区 VI層				粗い横ナデ	横方向のヘラナデもしくはミガキ	橙	にぶい黄橙	2mm以下のにぶい黄橙・灰白色の粒を多く含む。	
71	縄文土器	深鉢口縁	D区 II・III層-拵				横ナデ	横ナデ	黄灰	灰黄	1mm以下の無色透明光沢粒、灰白色粒、褐色粒を含む。	
72	縄文土器	浅鉢口縁	D区 トレンチ	35.8			横方向のヘラミガキ、沈線	横方向のヘラミガキ	にぶい黄橙	灰黄、黒褐	きめ細か	
73	縄文土器	浅鉢頸部~胴部	D区 IV層				横方向のヘラミガキ	横方向のヘラミガキ	にぶい黄橙	褐灰	0.5mm以下の無色透明光沢粒を含む。	穿孔
74	縄文土器	浅鉢胴部	D区 II・III層-拵				スタレ状圧痕、スス付着	横方向のミガキ炭化物付着	浅黄橙	黒褐	2mm以下の褐色粒、灰白色粒、無色透明光沢粒を含む。	組織痕土器
75	縄文土器	浅鉢胴部	D区 II層				粗いナデ	横または斜方向のヘラミガキ炭化物付着	にぶい赤褐	黒褐	1.5mm以下の褐・灰白色の粒を多く含む。	
76	縄文土器	浅鉢胴部	D区 II・III層-拵				ケズリ気味の粗い横ナデ、指頭痕薄くスス付着、ナデ	横方向のヘラミガキ	灰褐	黒褐	1.5mm以下の浅褐色粒、無色透明光沢粒、褐色粒を多く含む。	
77	弥生土器	壺口縁	D区 II・III層-拵				粗いナデ	粗いナデ、指頭痕	橙	にぶい赤褐	3mm以下の灰白色・褐色粒を多く含む。	
78	弥生土器	甕底部	D区 II・III層-拵	6.6			縦方向・斜方向のナデ、指頭痕	斜方向のナデ、指頭痕	灰黄	灰黄	2mm以下の茶褐色・灰褐色・褐色・無色透明光沢粒を含む。	
79	弥生土器	高台付埴坏部	D区 IV層				丹塗、風化著しい	粗なナデ	にぶい橙	にぶい赤褐	2mm以下のガラス状に光る鉱物粒、1mm以下の黒く光る鉱物粒、2mm以下の茶褐色粒、1mm以下の灰白色粒を少し含む。	
80	土師器	鉢	D区 北掘				横ナデ、風化著しい	横方向のハケ目、一部黒斑	灰白	灰白	1mm以下の茶褐色・灰白色を少し含む。きめ細か	
81	土師器	胴部	D区 III層				タタキ、剥離	剥離	灰白	灰白	2.5mm以下の茶褐色・浅黄灰色粒、1.5mm以下の透明光沢粒を多く含む。	
82	土師器	壺胴部	D区 北掘				横ナデ、斜方向のナデ、黒斑	横ナデ、斜方向のナデ	にぶい黄褐	灰黄褐	1mm以下の赤褐色を少し含む。	
83	土師器	皿口縁~底部	D区 SB1-P-8	6.6	5.6	1.15	横ナデ、糸切り底	横ナデ	にぶい黄褐	淡黄橙	きめ細か	
84	土師器	皿底部			8.6		横ナデ、糸切り	ナデ	灰黄	灰黄	きめ細か	
85	土師器	小皿口縁~底部	D区 III層	6	4.9	1.45	横ナデ、板状工具痕?	横ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	きめ細かな砂粒。1mm程度の黒褐色粒1個含む。	
86	土師器	坏体部~底部	D区 北掘				横ナデ	横ナデ	淡赤橙	淡赤橙	きめ細か	
87	須恵器	こね鉢口縁	D区 北トレンチ				横ナデ	横ナデ、斜方向のナデ	褐灰	灰白	1mm以下の灰白色粒を少し含む。3mmの灰白色粒を含む。きめ細か	
88	須恵器	こね鉢口縁	D区 II・III層-拵				横ナデ、自然釉	横ナデ	黄灰	灰	1mm以下の灰白色粒を少し含む。きめ細か	
89	須恵器	こね鉢口縁(片口)	D区 北トレンチ						褐灰	褐灰	3.5mm以下の灰白色粒を少し含む。	
90	青磁	碗口縁	D区 II・III層-拵				施釉	施釉	灰白胎土調	オリーフ灰釉調	精良	
91	青磁	碗口縁~体部	D区 SB4-P-38				施釉(蓮弁文)	施釉	灰白胎土調	明緑灰釉調	精良	
92	陶器	仏花器?口縁	D区 III層	20.5			斜方向の工具ナデ後横ナデ、横ナデ	横ナデ	にぶい赤褐	にぶい黄褐	精良	
93	陶器	甕胴部	D区 P-60				斜方向の平行タタキ、スス付着	同心円タタキ	黒褐	褐灰	2.5mm以下の灰白色粒、1mm以下の浅黄色粒を含む。	

## 第7節 自然科学分析の結果

株式会社 古環境研究所

### 1 放射性炭素年代測定

#### 1) 試料と方法

試料名	地点・遺構	種類	前処理・調整	測定法
No.1	C区、SC-1	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄、石墨調整	加速器質量分析 (AMS) 法
No.2	C区、SC-2	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄、石墨調整	加速器質量分析 (AMS) 法
No.3	D区、Pit59	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄、石墨調整	加速器質量分析 (AMS) 法
No.4	D区、石組遺構	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄、石墨調整	加速器質量分析 (AMS) 法

#### 2) 測定結果

試料名	$^{14}\text{C}$ 年代 (年BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正 $^{14}\text{C}$ 年代 (年BP)	暦年代 (西暦)	測定No (Beta-)
No.1	1290±60	-25.1	1290±60	交点 : cal AD700 1 $\sigma$ : cal AD670~780 2 $\sigma$ : cal AD645~880	136473
No.2	2150±40	-25.1	2150±40	交点 : cal BC185 1 $\sigma$ : cal BC340~320, 205~155 2 $\sigma$ : cal BC360~280, 240~60	136474
No.3	900±40	-27.1	870±40	交点 : cal AD1185 1 $\sigma$ : cal AD1155~1220 2 $\sigma$ : cal AD1040~1255	136472
No.4	840±40	-26.6	810±40	交点 : cal AD1235 1 $\sigma$ : cal AD1205~1265 2 $\sigma$ : cal AD1170~1280	136471



#### ・ $^{14}\text{C}$ 年代測定値

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、単純に現在（1950年AD）から何年前かを計算した値。 $^{14}\text{C}$ の半減期は5,568年を用いた。

#### ・ $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比（ $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ ）。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（ $\text{‰}$ ）で表す。

#### ・補正 $^{14}\text{C}$ 年代値

$\delta^{13}\text{C}$ 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定値に補正値を加えた上で算出した年代。

#### ・暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中 $^{14}\text{C}$ 濃度の変動を較正することにより算出した年代（西暦）。較正には年代既知の樹木年輪の $^{14}\text{C}$ の詳細な測定値、サンゴのU-Th年代と $^{14}\text{C}$ 年代の比較により作成された補正曲線を使用した。最新のデータベース（"INCAL98 Radiocarbon Age Calibration" Stuiver et al, 1998, Radiocarbon 40(3)）により、約19,000年BPまでの換算が可能となっている。

暦年代の交点とは較正 $^{14}\text{C}$ 年代値と暦年代較正曲線との交点の暦年代値を意味する。 $1\sigma$ （68%確率）・ $2\sigma$ （95%確率）は、較正 $^{14}\text{C}$ 年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の $1\sigma$ ・ $2\sigma$ 値が表記される場合もある。

## 2 植物珪酸体分析

### 1) はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸（ $\text{SiO}_2$ ）が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石（プラント・オパール）となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出する分析であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山, 1987）。

### 2) 試料

分析試料は、基本土層およびD区セクション1（畦状遺構）から採取された計18点である。試料採取箇所を分析結果図に示す。

### 3) 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法（藤原、976）をもとに、次の手順で行った。

- ① 試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）
- ② 試料約1gに直径約40 $\mu$ mのガラスビーズを約0.02g添加（電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量）
- ③ 電気炉灰化法（550℃・6時間）による脱有機物処理
- ④ 超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散
- ⑤ 沈底法による20 $\mu$ m以下の微粒子除去
- ⑥ 封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
- ⑦ 検鏡・計数。

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位：10-5g）をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。イネ（赤米）の換算係数は2.94（種実重は1.03）、ヨシ属（ヨシ）は6.31、ススキ属（ススキ）は1.24、メダケ節は1.16、ネザサ節は0.48、クマザサ属（チシマザサ節・チマキザサ節）は0.75、ミヤコザサ節は0.30である。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

#### 4) 分析結果

##### ・分類群

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1および図1、図2に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

[イネ科]

機動細胞由来：イネ、キビ族型、ヨシ属、ススキ属型（おもにススキ属）、ウシクサ族A（チガヤ属など）、ウシクサ族B（大型）、シバ属

穎の表皮細胞由来：オオムギ族（ムギ類）

[イネ科-タケ亜科]

メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属）、ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、クマザサ属型（チシマザサ節やチマキザサ節など）、ミヤコザサ節型（おもにクマザサ属ミヤコザサ節）、未分類等

[イネ科-その他]

表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、茎部起源、未分類等

#### 5) 考察

##### ・イネ科栽培植物の検討

植物珪酸体分析で同定される分類群のうち、栽培植物が含まれるものには、イネをはじめオオムギ族（ムギ類が含まれる）、ヒエ属型（ヒエが含まれる）、エノコログサ属型（アワが含まれる）、キビ属型（キビが含まれる）、ジュズダマ属（ハトムギが含まれる）、オヒシバ属型（シコクビエが含まれる）、モ

ロコシ属型、トウモロコシ属型などがある。このうち、本遺跡の試料からはイネとオオムギ族が検出された。以下に各分類群ごとに栽培の可能性について考察する。

### イネ

基本土層でイネが検出されたのは、現表土（試料1）から桜島文明軽石直上層（試料6）までの各層および桜島文明軽石の下層（試料11）である。このうち、現表土（試料1）から桜島文明軽石直上層（試料5）までの各層では、密度が3,600～8,100個/gと高い値であり、稲作跡の検証や探査を行う場合の判断基準としている3,000個/gを上回っている。したがって、これらの層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

桜島文明軽石の下層（試料11）では密度が700個/gと低い値である。ただし、直上の桜島文明軽石直下層ではまったく検出されないことから、上層から後代のものが混入したことは考えにくい。したがって、同層の時期に調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていた可能性が考えられる。イネの密度が低い原因としては、稲作が行われていた期間が短かったこと、土層の堆積速度が速かったこと、採取地点が耕作面以外であったことなどが考えられる。

D区セクション1（畦状遺構）でイネが検出されたのは、畦部（試料3、4）と畝間部（試料8～10）および桜島文明軽石直上層（試料1）である。このうち、畦部（試料4）では密度が4,100個/gと高い値であり、畝間部（試料9）でも2,900個/gと比較的高い値である。したがって、これらの遺構では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。桜島文明軽石直上層（試料1）では、密度が700個/gと低い値である。

### オオムギ族

オオムギ族（穎の表皮細胞）は、D区セクション1（畦状遺構）の畦部（試料4）から検出された。ここで検出されたのは、ムギ類（コムギやオオムギ）と見られる形態のものである（杉山・石井, 1989）。密度は1,400個/gと比較的低い値であるが、穎（穀粒）は栽培地に残されることがまれであることから、少量が検出された場合でもかなり過大に評価する必要がある。これらのことから、同遺構ではムギ類が栽培されていた可能性が高いと考えられる。

### その他

イネ科栽培植物の中には未検討のものもあるため、その他の分類群の中にも栽培種に由来するものが含まれている可能性が考えられる。キビ族型にはヒエ属やエノコログサ属に近似したものが含まれており、ウシクサ族B（大型）の中にはサトウキビ属に近似したものが含まれている。これらの分類群の給源植物の究明については今後の課題としたい。なお、植物珪酸体分析で同定される分類群は主にイネ科植物に限定されるため、根菜類などの畠作物は分析の対象外となっている。

#### ・植物珪酸体分析から推定される植生と環境

桜島文明軽石直下層では、上記以外にもメダケ節型やネザサ節型が多量に検出され、ススキ属型、ウ

シクサ族A、クマザサ属型、ヨシ属なども検出された。おもな分類群の推定生産量によると、メダケ節型やネザサ節型が卓越しており、ススキ属型も優勢となっていることが分かる。

以上のことから、桜島文明軽石直下層の堆積当時は、メダケ節やネザサ節などの竹笹類を主体としてススキ属やチガヤ属なども生育する草原的な環境であったと考えられ、ヨシ属などが生育する湿地的なところも見られたと推定される。

## 6) まとめ

植物珪酸体分析の結果、桜島文明軽石（1471年）直下の畦状遺構（D区セクション1）からはイネが多量に検出され、稲作が行われていた可能性が高いと判断された。また、桜島文明軽石の下層および同テフラより上位の各層でも、稲作が行われていた可能性が認められた。さらに、D区セクション1の畦状遺構では、ムギ類が栽培されていた可能性も認められた。

桜島文明軽石直下層の堆積当時は、メダケ節やネザサ節などの竹笹類を主体としてススキ属やチガヤ属なども生育する草原的な環境であったと考えられ、ヨシ属などが生育する湿地的なところも見られたと推定される。

## 文献

杉山真二（1987）遺跡調査におけるプラント・オパール分析の現状と問題点．植生史研究，第2号，p.27-37.

杉山真二（1987）タケ亜科植物の機動細胞珪酸体．富士竹類植物園報告，第31号，p.70-83.

杉山真二・石井克己（1989）群馬県子持村、F P直下から検出された灰化物の植物珪酸体（プラント・オパール）分析．日本第四紀学会要旨集，19，p.94-95.

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－．考古学と自然科学，9，p.15-29.

## 3 寄生虫卵分析

### 1) はじめに

人や動物などに寄生する寄生虫の卵殻は、花粉と同様に堆積物中に残存しており、人が居住するところでは寄生虫卵の汚染度が高くなる。また、トイレ遺構等の糞便の堆積物では寄生虫卵密度がとくに高いことから、トイレ遺構を確認することが可能である。さらに、寄生虫の特有の生活史や感染経路から食物を探ることや、動物固有の寄生虫種から動物種を特定することも可能である。

### 2) 試料

試料は、D区最北部の石組遺構から採取された1点である。

### 3) 方法

- ① サンプルを採量する。

- ② 脱イオン水を加え攪拌する。
- ③ 篩別により大きな砂粒や木片等を除去し、沈澱法を施す。
- ④ 25%フッ化水素酸を加え30分静置（2・3度混和）。
- ⑤ 水洗後サンプルを2分する。
- ⑥ 片方にアセトリシス処理を施す。
- ⑦ 両方のサンプルを染色後グリセリンゼリーで封入しそれぞれ標本を作製する。
- ⑧ 検鏡・計数を行う。

以上の物理・化学の各処理間の水洗は、1500rpm、2分間の遠心分離を行った後、上澄みを捨てるという操作を3回繰り返して行った。検鏡はプレパラート作製後直ちに、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。寄生虫卵に加えて花粉の観察も行った。

#### 4) 結果および考察

分析の結果、D区石組遺構の試料からは、寄生虫卵および明らかな消化残渣は検出されなかった。花粉や孢子も検出されないことから、乾燥あるいは乾湿を繰り返す堆積環境下で寄生虫卵などの有機質遺体が分解された可能性が考えられる。

#### 文献

Peter J. Warnock and Karl J. Reinhard (1992) Methods for Extraxting Pollen nd Parasite Eggs from Latrine Soils. Journal of Archaeological Science, 19, p.231-245.

金原正明 (1999) 寄生虫. 考古学と動物学, 考古学と自然科学, 2, 同成社, p.151-158.

金原正明・金原正子 (1992) 花粉分析および寄生虫. 藤原京跡の便所遺構—藤原京7条1坊—, 奈良国立文化財研究所, p.14-15.

金子清俊・谷口博一 (1987) 線形動物・扁形動物. 医動物学, 新版臨床検査講座, 8, 医歯薬出版, p.9-55.

中村純 (1973) 花粉分析. 古今書院, p.82-110.

表1 葦原遺跡における寄生虫卵分析結果

学名	分類群 (試料1cc中) 和名	石組 遺構
Helminth eggs	寄生虫卵	(-)
	明らかな消化残渣	(-)
Pollens	花粉	(-)
Fern spore	シダ植物孢子	(-)

## 4 炭化物の同定

### 1) 試料

試料は、D区最北部の石組遺構の床石直上から出土した炭化物である。

### 2) 方法

複数の細片から観察可能なものを選び、細胞の配列にそって割折して新鮮な横断面、放射断面、接線断面を作製して、落射顕微鏡によって75~750倍で観察を行った。各断面の顕微鏡写真を示す。

### 3) 結果および考察

木材の構造を示さないことや、横断面で維管束が観察されることから、いずれも草本 (grass) と同定される。草本の分類は現状の研究では困難である。なお、落射顕微鏡による観察の結果、表面の反射光が強いことから、これらの炭化物は燃焼により炭化したものと推定される。

### 文献

佐伯浩・原田浩 (1985) 針葉樹材の細胞. 木材の構造、文永堂出版、p.20-48.

佐伯浩・原田浩 (1985) 広葉樹材の細胞. 木材の構造、文永堂出版、p.49-100.

### 植物珪酸体 (プラント・オパール) の顕微鏡写真

(倍率はすべて240倍)

No.	分類群	地点	試料名
1	イネ	D区セクション1	9
2	イネ	基本土層	5
3	イネ	基本土層	2
4	オオムギ族 (穎の表皮細胞)	D区セクション1	4
5	キビ族型	基本土層	12
6	ススキ属型	基本土層	10
7	ウシクサ族型A	基本土層	2
8	メダケ節型	D区セクション1	4
9	ネザサ節型	基本土層	3
10	ネザサ節型	基本土層	4
11	クマザサ属型	基本土層	12
12	棒状珪酸体	基本土層	2





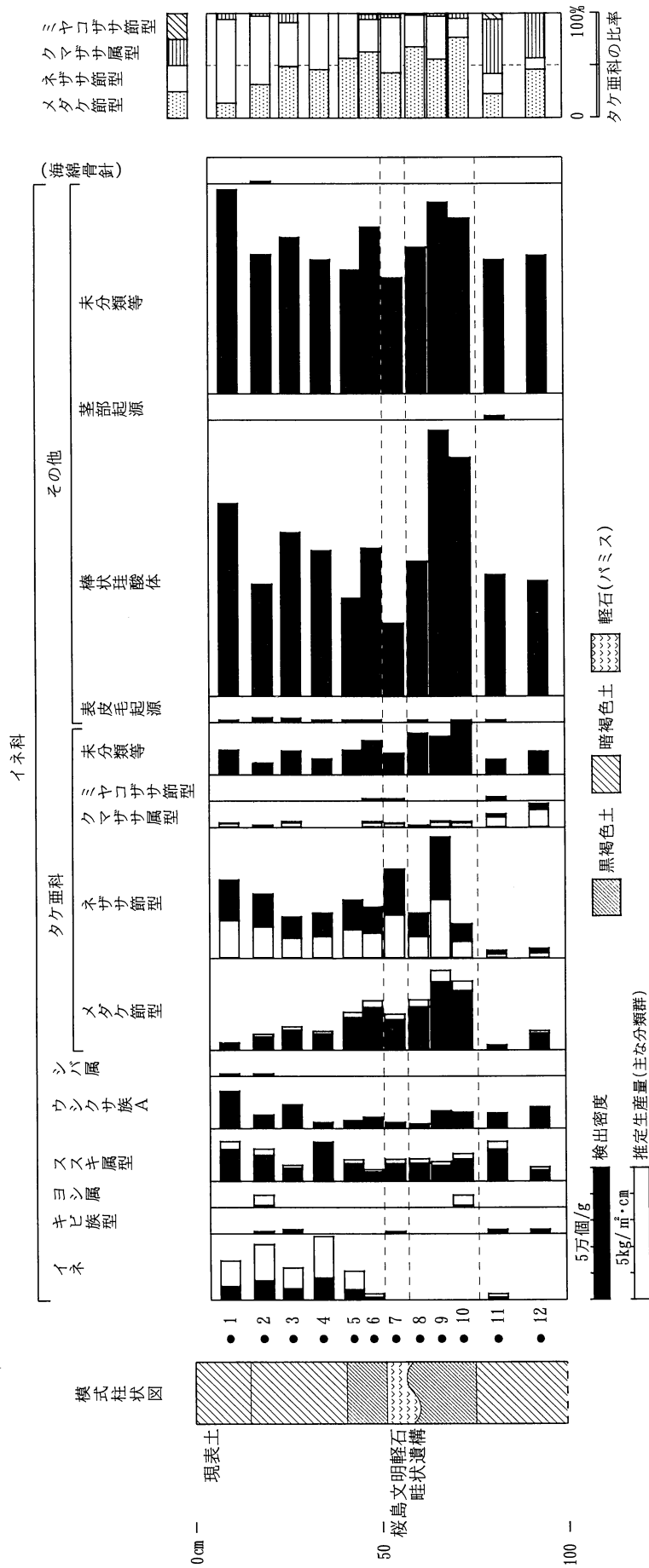


図1 裴原遺跡、基本土層における植物珪酸体分析結果

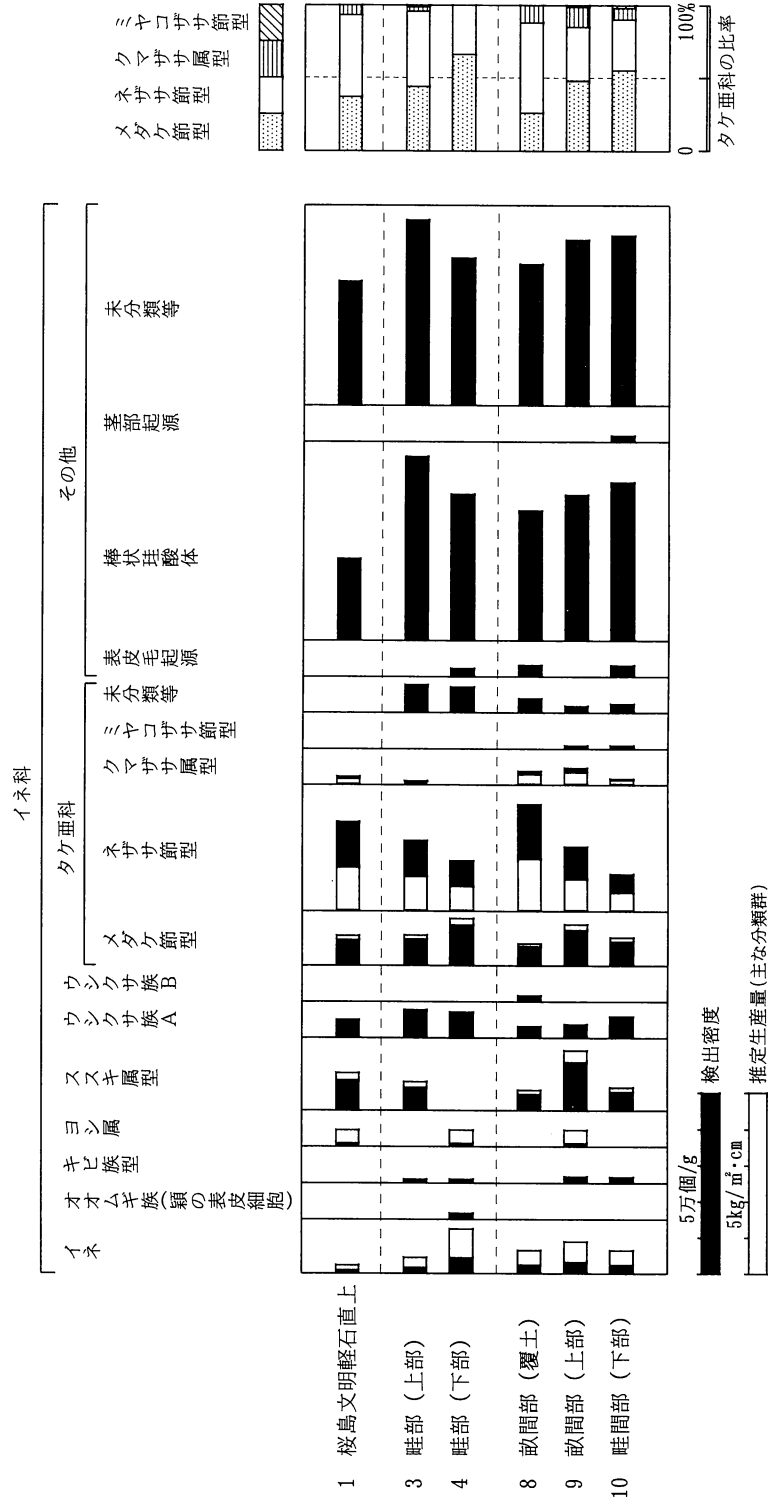
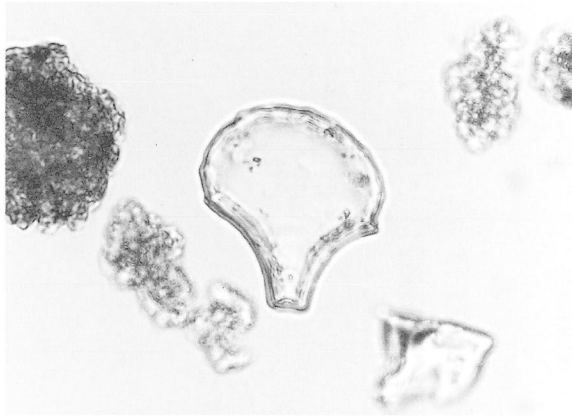
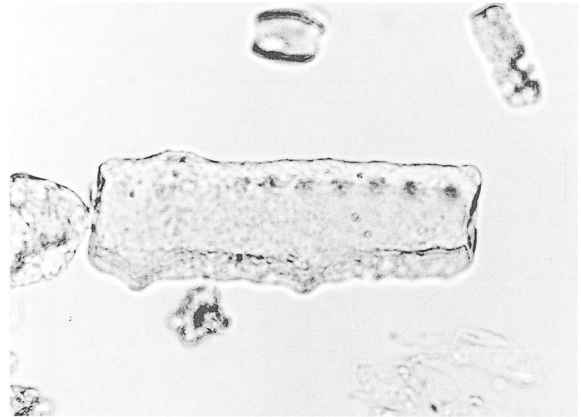


図2 葦原遺跡、D区セクション1(畦状遺構)における植物珪酸体分析結果



1 イネ



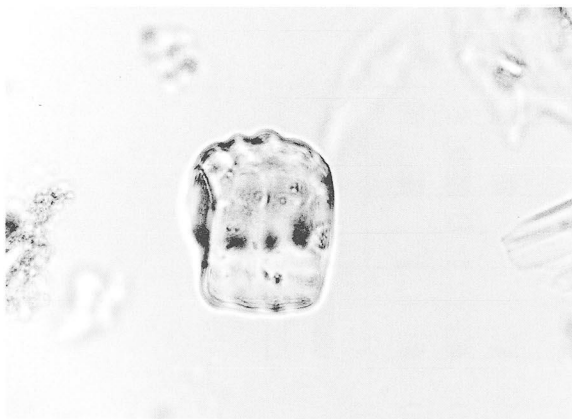
5 キビ族型



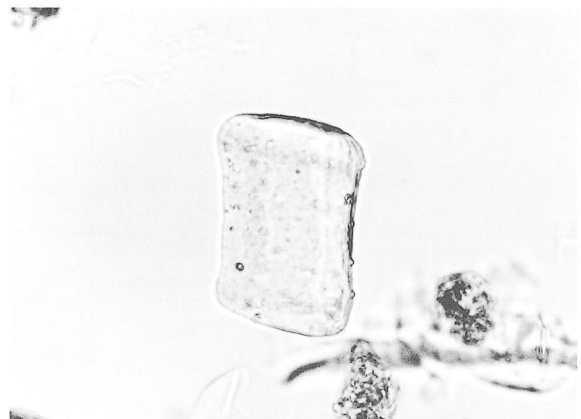
2 イネ



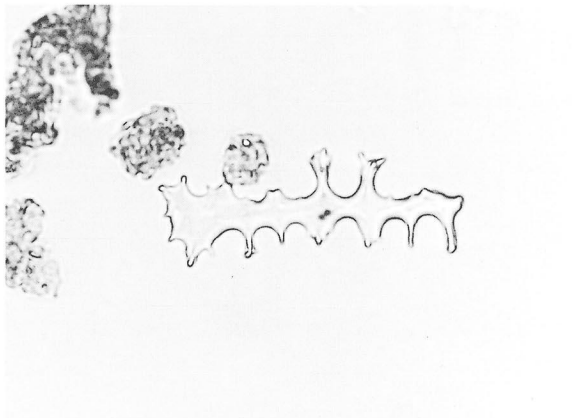
6 ススキ属型



3 イネ (側面)



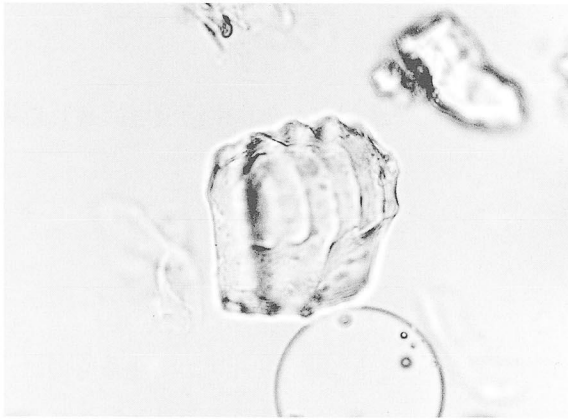
7 ウシクサ属族型A



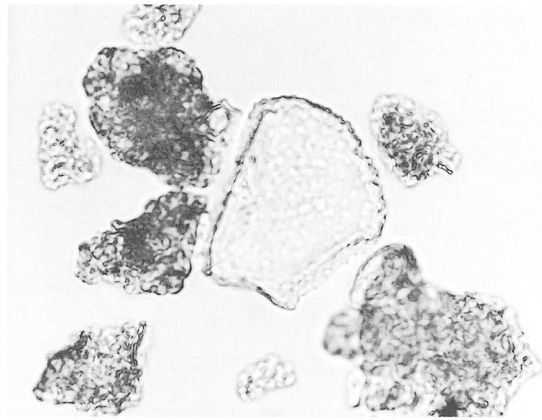
4 オオムギ族 (穎の表皮細胞)



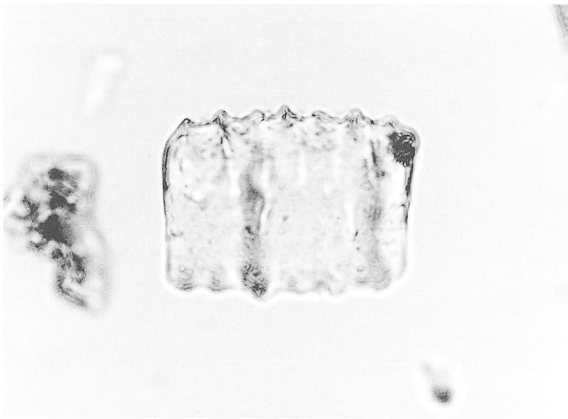
8 メダケ節型



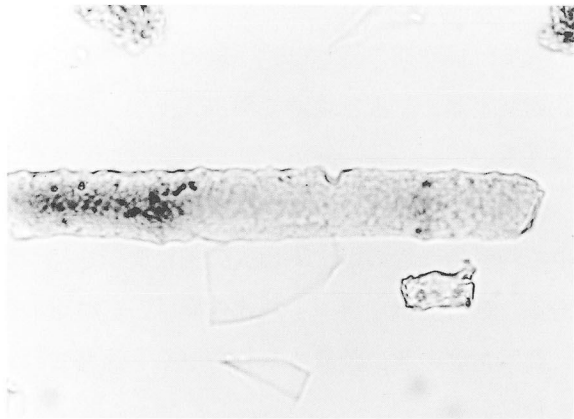
9 ネザサ節型



11 クマザサ属型



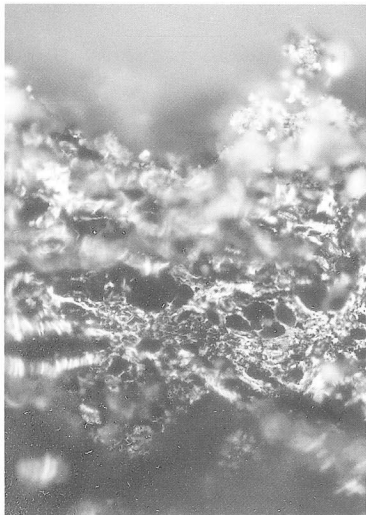
10 ネザサ節型



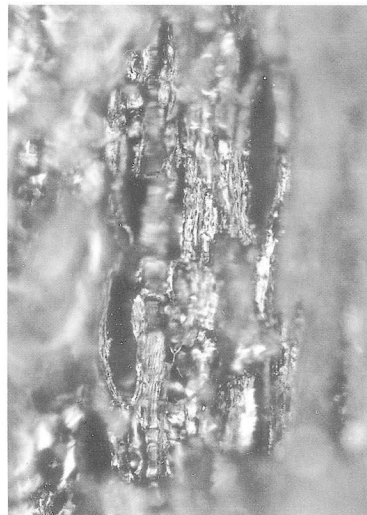
12 棒状珪酸体

0 50 100  $\mu$ m

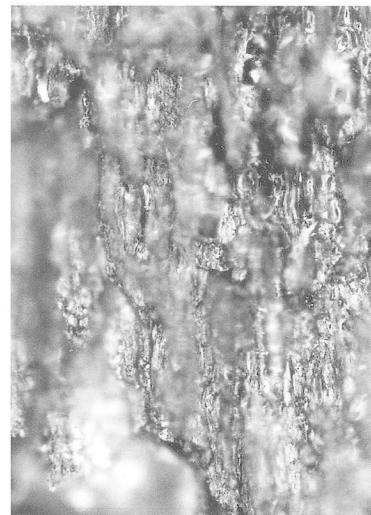
葦原遺跡出土炭化材の顕微鏡写真



横断面 ————— : 0.2mm



放射断面 ————— : 0.2mm



接線断面 ————— : 0.2mm

D区 最北部石組遺構 床石直上 炭化物 草木

## 第8節 まとめ

蓑原遺跡では、縄文時代から中世までの遺構・遺物を確認し、この地が古くから生活環境に適した場であったことが窺えた。以下、各時期の成果や問題点について述べることにする。

### 1 縄文時代・弥生時代

縄文時代の遺構は検出されなかったが、縄文時代晩期に位置づけられる土器片が出土した。主なものは、鱗状突起のある天城式土器（34・35）や黒色磨研の黒川式土器（36・37）、後期三万田式と思われる土器（68）等である。

縄文時代晩期の遺物は、近隣の遺跡では、蓑原台地北端の舌状部に立地している中尾山・馬渡遺跡で孔列文土器、正坂原遺跡で黒川式土器、刻目突帯文土器等が出土しており、蓑原遺跡との関連性も注目される。

弥生時代の遺構は検出されなかったものの、弥生土器片が出土した。蓑原遺跡で出土した弥生土器の中で特徴的なものは、下城式の刻目突帯を持つ甕や頸部と胴上半部に2本単位の平行線文がめぐる壺である。刻目突帯を持つ下城式の甕は、宮崎市の市位遺跡や右葛ヶ迫遺跡等で出土が見られる。

蓑原遺跡の北に位置する牧の原第2遺跡では、遺構は確認されていないものの弥生時代の甕や壺が出土している。

### 2 古墳時代

古墳時代後期の竪穴住居跡が3軒確認された。3軒とも一辺6～7mの大型の住居跡である。近接する鶴喰遺跡でも古墳時代の竪穴住居跡68軒が確認されているが、一辺4～5mの方形プランで、蓑原遺跡で検出された竪穴住居跡よりも小規模である。鶴喰遺跡では半数近くに竈が敷設されていたが、本遺跡の場合、竪穴住居跡全体が検出されなかったこともあって、竈は確認できなかった。出土遺物は、土師器の甕や碗（SA1）、壺（SA2）、須恵器の短頸壺（SA3）等である。

C区の竪穴状土坑（SC1～4）は、竪穴住居跡に隣接して検出されたものの、供伴する遺物が少なく（弥生土器2点、土師器1点）、竪穴住居との時期差や関係を検証するまでには至らなかった。

調査区の幅が狭いため、部分的にしか検出されなかったものの、蓑原台地周辺に展開する古墳時代の遺跡の可能性を示唆できたことは大きな成果であった。

### 3 中世

#### ・掘立柱建物跡

中世の遺構としては、掘立柱建物跡が9棟確認された。

規模としては3間×2間のものが5棟と最も多い。庇を持つものも5棟ある。主軸の方向は南北棟5棟、東西棟4棟である。特徴のあるものとしては、中央部南寄りに石組遺構のあるSB1（建物に付随する遺構かどうかは不明）と、4面庇で規模も5間×2間と9棟中最大規模のSB9が見られる。

遺構に伴う遺物は少なく、SB1の柱穴から土師器とSB4の柱穴から龍泉窯系青磁碗が出土したの

みで、建物間の時期差を検証するまでには至らなかったが、蓑原台地周辺の中世の遺跡の可能性を示唆できたことは大きな成果であった。

#### ・石組遺構

S B 1 内で石組遺構が1基検出された。同様の石組遺構が、天神河内第1遺跡で3間×2間の掘立柱建物跡内から検出されており（建物に付随するものかどうかは不明）、蓑原遺跡の石組遺構と規模や形式が類似している。また蓑原遺跡と近接している鶴喰遺跡では石積遺構が検出されている。用途等については今後の類例の研究を待ちたい。

#### ・畝状遺構

調査区全体で文明年間（1469～1487）に降下した桜島起源の軽石（白ボラ）の残存が確認されたが、特にB区とD区では、白ボラが溝状に検出された。B区は掘り上げてみると凹凸が激しく、復旧痕等である可能性が指摘され、畝状遺構として確認することはできなかった。

白ボラの残存状況が最も良好であったD区北端部では区画はあまり明瞭ではなかったものの、畝状遺構が確認された。基本的には南北方向の畝で、等高線に交わるような形で検出された。一部等高線と平行して走る南東―北西方向のものが見られた。植物珪酸体分析の結果からイネやオオムギが栽培されていた可能性が考えられる。

隣接する中尾遺跡や近接する鶴喰遺跡・肘穴遺跡でも白ボラよってパックされた畝跡や水田跡が検出されているので、今後の検証により当時の土地利用のあり方が徐々に明らかにされていくものと思われる。

#### 〈参考文献〉

- 1 日本考古学協会2000年度鹿児島大会資料集第一集『はたけの考古学』2000
- 2 都城市教育委員会『都城市文化財調査報告書第38集 田谷・尻枝遺跡』1997
- 3 都城市教育委員会『都城市文化財調査報告書第44集 鶴喰遺跡』1998
- 4 都城市教育委員会『都城市文化財調査報告書第47集 肘穴遺跡』1999
- 5 平凡社『宮崎県の地名』1997
- 6 熊本県教育委員会『熊本県文化財調査報告書第171集 古閑山遺跡』1999
- 7 熊本県教育委員会『熊本県文化財調査報告書第184集 古閑北遺跡』1999
- 8 宮崎県教育委員会『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第21集 右葛ヶ迫遺跡』2000
- 9 宮崎県教育委員会『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第27集 竹ノ内遺跡』2000
- 10 宮崎県教育委員会『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第19集 牧の原第2遺跡』1999
- 11 大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館『研究紀要I』1984
- 12 中世土器研究会編『概説中世の土器・陶磁器』真陽社1995
- 13 太宰府市教育委員会『太宰府市の文化財第49集太宰府条坊跡XV―陶磁器分類編―』2000
- 14 鈴木道之助『図録石器入門事典―縄文』柏書房1991
- 15 齊藤忠『日本考古学用語辞典』学生社1998
- 16 平井勝『考古学ライブラリー64 弥生時代の石器』ニュー・サイエンス社1991







葦原遺跡全景（北から）



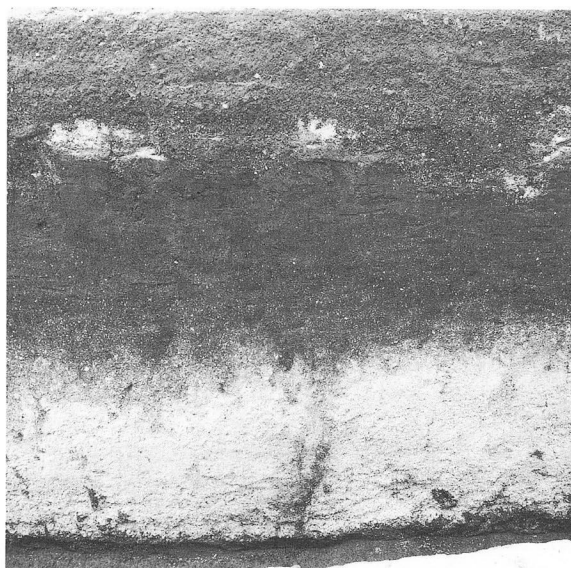
葦原遺跡全景（南から）



A区（北から）



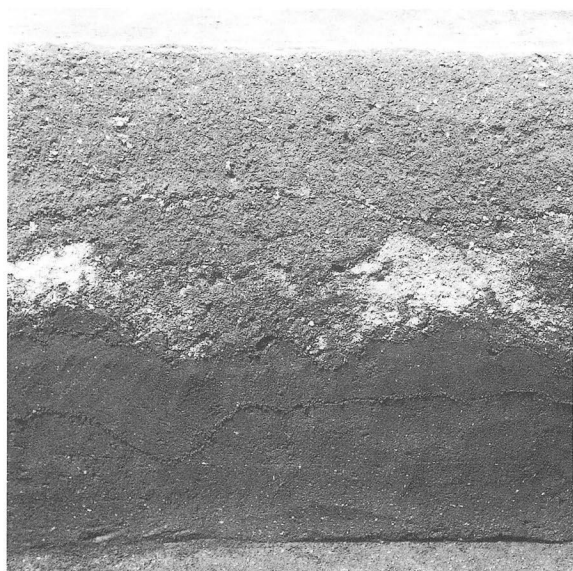
B1区II層上面（南から）



B1区土層断面



B1区土層断面（白ボロ部分）

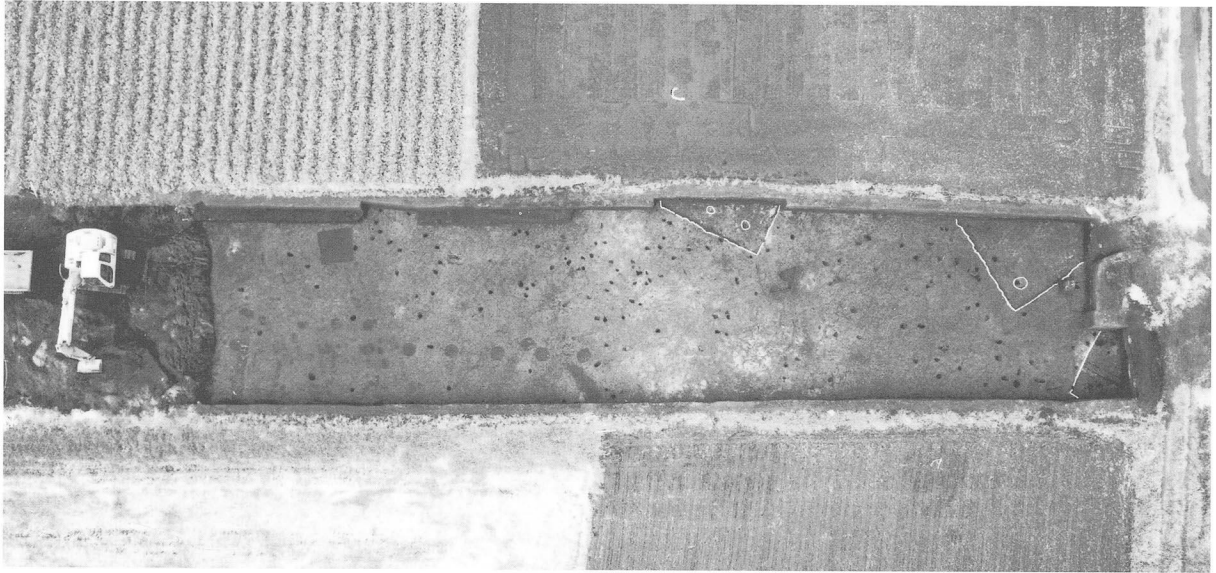


B1区鳥跡土層断面

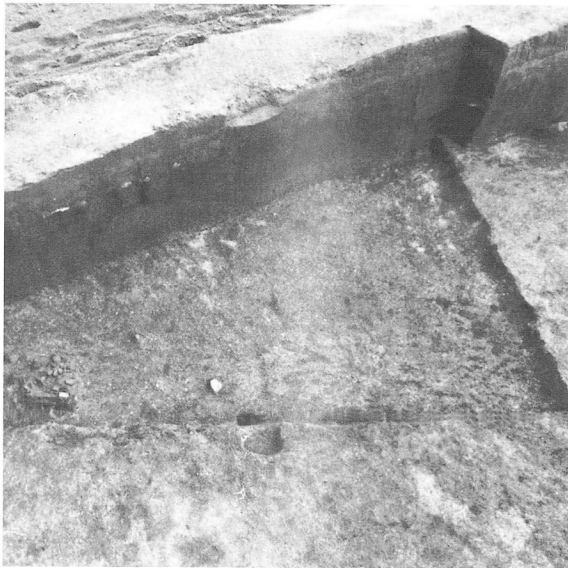


B1区白ボロ完掘状況

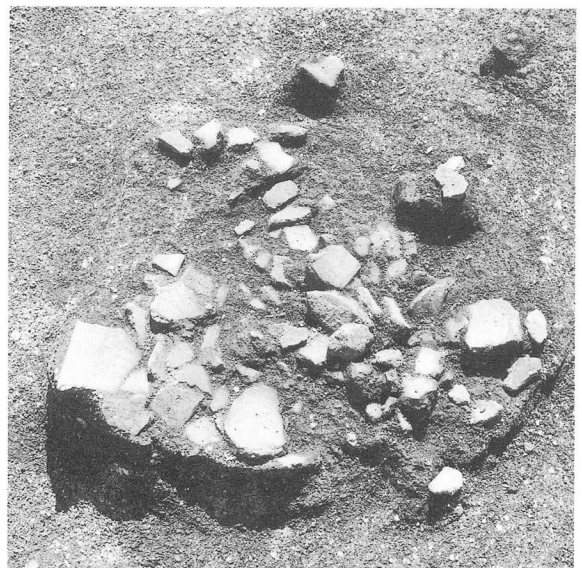




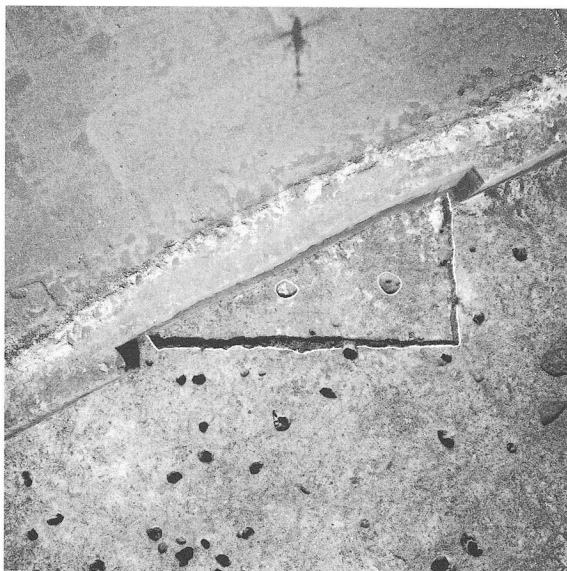
B 2 区全景



S A 1 (東から)



S A 1 遺物出土状況

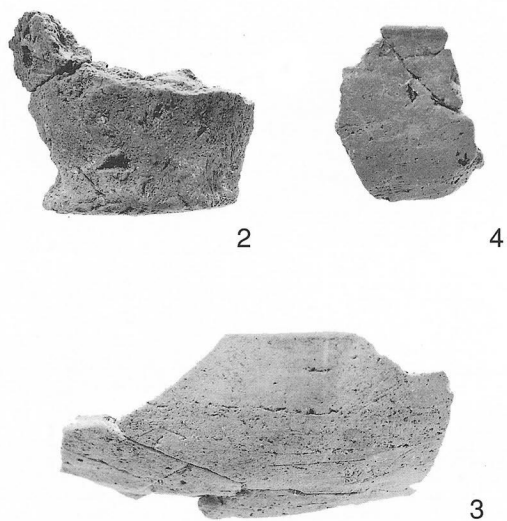


S A 1



1

S A 1 出土土器①



S A 1 出土土器②



S A 2 (南から)



S A 2 北側



S A 2 遺物出土状況



S A 2 南側



S A 2 出土土器①